上峰町文化財調査報告書第８集

船石遺跡Ⅲ

昭和62年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年３月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第８集

船石（ふないし）遺跡 Ⅲ

昭和62年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年３月

上峰町教育委員会

序

この報告書は、上峰町大字堤地区一帯を対象とした県営農業基盤整備事業に先がけて実施しました昭和62年度の船石遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

船石遺跡は、これまでの発掘調査で、弥生時代を中心に縄文時代から中世に及ぶ遺構、遺物が検出され、町北部を代表する複合遺跡であります。今回の発掘調査では、弥生時代の遺構もさることながら、「肥人」の文字をもつ奈良時代の遺物が出土し、当時の社会を考えるうえで貴重な資料となりました。また、縄文時代の土壙からまとまった遺物が出土したことも特筆すべき成果であります。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成２年３月

上峰町教育委員会

教育長　松　田　末　治

例　　言

1．本書は、昭和62年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字四本杉に所在する船石遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、昭和62年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う圃場基盤造成工事および水路掘削工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分4,200㎡について、便宜的に船石遺跡６・７区とし・６区3,600㎡を佐賀県農林部委託事業として、７区600㎡を国庫補助事業として実施した。
3．現地での発掘調査は昭和62年７月１日から12月９日まで行った。
4．現場での遺構実測作業は、調査員の指示により、実測作業員が行い、一部を新九州測量設計株式会社に委託した。
5．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、一部気球による空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した
6．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
7．本書中の挿図の実測図作成、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
8．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
9．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1．船石遺跡の略号は、「FNI」であり、調査区略号は、「FNI-６」・「FNI-７」とした。
2．遺構番号は、発掘調査当時のままとした。また、遺構番号に冠した２文字のアルファベットは、遺構の種別を表わす。

　SH……竪穴式住居址　　SB……掘立柱建物址　　SK……土壙　SD……溝跡
　SX……性格不明遺構

3．挿図中の方位については、既成の地形図を用いたものは特記のない限り図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は磁北を基準としている。
4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表わす。
5．土器実測図の縮尺は、原則として１/４であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
6．遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。
7．上峰村は、平成元年11月１日に町制を施行した。村・町の表記における煩雑さを考慮し、本書では「上峰町」に統一する。

調査組織（昭和62年度発掘調査当時）

（事務局）

総　括	重松守男	上峰町教育委員会	教育長
事務主任	浜田小夜子	〃	教育課長
経費執行	八谷勝憲	〃	社会教育係長
	鶴田浩二	〃	社会教育係
	原田大介	〃	社会教育係
調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
	原田大介	〃	社会教育係
調査指導		佐賀県教育委員会	

発掘作業参加者

秋山　巌、秋山ユキエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪弘子、大坪光代、川原ツヤ、川原正美、川原ミヨ、北島八重子、楠川カメ子、黒石光利、島　四郎、高島英子、田中静雄、田中ミスエ、堤　イシ、堤　ユキ、鶴田キヨ子、鶴田サヨ子、鶴田久子、鶴田美千代、鶴田八重子、納富ヌイ子、檜枝　茂、宮原則美、矢動丸喜三、矢動丸勅代、山口ミヨ子、山下孝子、和佐治夫（発掘作業員）

江頭由香里、古賀智恵子、島　美保子、馬原喜美子、牟田記代美（実測作業員）

整理作業参加者

荒木和代、島　美保子、深町佐千子　馬原喜美子（製図作業員）

目　　次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境……1

1．船石遺跡の位置……1

2．歴史的環境……1

Ⅱ．調査に至る経過……6

1．調査に至る経緯……6

2．調査の経過……7

Ⅲ．遺跡の概要……9

1．遺跡の概要……9

2．調査区域の概要……11

Ⅳ．船石遺跡6区の調査……14

1．遺　構……14

(1)　竪穴式住居址……14

(2)　掘立柱建物址……20

(3)　土　壙……22

(4)　その他の遺構……31

2．遺　物……35

Ⅴ．船石遺跡7区の調査

1．遺　構……59

(1)　竪穴式住居址……59

(2)　土　壙……61

2．遺　物……62

Ⅳ．まとめ……66

挿図目次

Fig. 1　船石遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）……2
2　船石遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）……10
3　船石遺跡6・7区グリッド設定図（1/1,000）……12
4　船石遺跡6区遺構配置図（1/500）……15
5　船石遺跡6区竪穴式住居址実測図(1)　SH-601～SH-604（1/80）……18
6　船石遺跡6区竪穴式住居址実測図(2)　SH-605～SH-608（1/80）……19
7　船石遺跡6区竪穴式住居址実測図(3)　SH-609・SH-610（1/80）……20
8　船石遺跡6区掘立柱建物址実測図　SB-601・SB-602（1/80）……21
9　船石遺跡6区土壙実測図(1)　SK-601～SK-608（1/60）……25
10　船石遺跡6区土壙実測図(2)　SK-609～SK-612・SK-614・SK-616（1/60）……26
11　船石遺跡6区土壙実測図(3)　SK-617～SK-627（1/60）……27
12　船石遺跡6区土壙実測図(4)　SK-628～SK-638・SK-641～SK-643（1/60）……28
13　船石遺跡6区土壙実測図(5)　SK-644～SK-653(A)(1/60)……29
14　船石遺跡6区土壙実測図(6)　SK-653(B)～SK-657・SK-659～SK-665（1/60）……30
15　船石遺跡6区　SX-615実測図（1/100）……32
16　船石遺跡6区溝跡実測図(1)　SD-601（1/200）……33
17　船石遺跡6区溝跡実測図(2)　SD-607・SD-610（1/200）……34
18　船石遺跡6区出土遺物実測図(1)（1/4）……43
19　船石遺跡6区出土遺物実測図(2)（1/4）……44
20　船石遺跡6区出土遺物実測図(3)（1/4）……45
21　船石遺跡6区出土遺物実測図(4)（1/4）……46
22　船石遺跡6区出土遺物実測図(5)（1/4）……47
23　船石遺跡6区出土遺物実測図(6)（1/4）……48
24　船石遺跡6区出土遺物実測図(7)（1/4）……49
25　船石遺跡6区出土遺物実測図(8)（1/4）……50
26　船石遺跡6区出土遺物実測図(9)（1/4）……51
27　船石遺跡6区出土遺物実測図(10)（1/4）……52
28　船石遺跡6区出土遺物実測図(11)（1/4）……53
29　船石遺跡6区出土遺物実測図(12)（1/4）……54
30　船石遺跡6区出土遺物実測図(13)（1/4）……55
31　船石遺跡6区出土遺物実測図(14)（1/4）……56

32　船石遺跡６区出土遺物実測図⒂（１/４）……57
33　船石遺跡６区出土遺物実測図⒃（１/４）……58
34　船石遺跡７区竪穴式住居址実測図　SH-701（１/80）……59
35　船石遺跡７区遺構配置図（１/500）……60
36　船石遺跡７区土壙実測図　SK-701～SK-705（１/60）……61
37　船石遺跡６区出土遺物実測図⑴（１/４）……63
38　船石遺跡６区出土遺物実測図⑵（１/４）……64

表　目　次

Tab. 1　船石遺跡周辺遺跡地名表……3
2　船石遺跡６区出土竪穴式住居址一覧表……17
3　船石遺跡６区出土掘立柱建物址一覧表……22
4　船石遺跡６区出土土壙一覧表……22
5　船石遺跡７区出土土壙一覧表……62

図版目次

PL. 1　船石遺跡６・７区全景
2　船石遺跡６区全景
3　船石遺跡６区竪穴式住居址集中部分・SD-601
4　船石遺跡６区 SX-615・SD-607／北部自然堆積土層調査区・SD-610
5　船石遺跡７区調査区
6　船石遺跡６区遺構⑴　SH-601～SH-604
7　船石遺跡６区遺構⑵　SH-605・SH-606
8　船石遺跡６区遺構⑶　SH-607・SH-608
9　船石遺跡６区遺構⑷　SH-609・SH-610
10　船石遺跡６区遺構⑸　SH-602～SH-604
11　船石遺跡６区遺構⑹　SH-605・SH-606・SH-609
12　船石遺跡６区遺構⑺　SH-610・SB-601
13　船石遺跡６区遺構⑻　SB-602・SK-601・SK-602
14　船石遺跡６区遺構⑼　SK-604～SK-608・SK-610
15　船石遺跡６区遺構⑽　SK-611・SK-616・SK-621～SK-623・SK-625・SK-628

16　船石遺跡６区遺構(11)　SK-626・SK-630・SK-632・SK-634・SK-635・SK-646・SK-659

17　船石遺跡６区遺構(12)　SK-650～SK-652・SK-654・SK-655・SK-657

18　船石遺跡７区遺構　SH-701・SK-701A・SK-702・SK-704・SK-705

19　船石遺跡６区遺物(1)　SH-606・SH-610・SK-601・SK-602出土

20　船石遺跡６区遺物(2)　SK-603・SK-606～SK-608出土

21　船石遺跡６区遺物(3)　SK-608・SK-610～SK-612出土

22　船石遺跡６区遺物(4)　SK-612・SK-614出土

23　船石遺跡６区遺物(5)　SK-614・SK-619・SK-623・SK-625・SK-632出土

24　船石遺跡６区遺物(6)　SK-632・SK-634・SK-635・SK-644・SK-646・SK-651・SK-652出土

25　船石遺跡６区遺物(7)　SK-652・SK-654・SK-656出土

26　船石遺跡６区遺物(8)　SX-615出土・７区遺物 SK-701A・SK-703・SK-704出土

27　船石遺跡６・７区土製品・石器

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（Fig. 1）

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の洪積世丘陵上（標高14m～30m付近）に位置している。

船石遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形が展開している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。

船石遺跡は、町北部の大字堤地区の南東部に所在している。大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。船石遺跡が立地する船石丘陵もそのひとつで、中原町高柳集落の標高35m付近から派生する丘陵であり、現在船石集落が位置する低位段丘上位面(坊所面、標高22～30m）とこれから南に延び、国道34号線沿いの切通集落北側で沖積平野に没する低位段丘下位面（舟石面、標高14～21m）とで構成されている[1]。東方の中原町上地地区の丘陵とは舟石溜池が設けられている谷底平野によって、また、西方の八藤、二塚山の両丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

2．歴史的環境（Fig. 1）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述の洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、縄文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。鋼澤の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[2]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[3]、12本の鋼矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡[4]、甕棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡[5]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神埼・東脊振の２町１村にまたがる吉野ヶ里遺跡[6]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クこ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に遺跡が分布している。

Fig. 1　船石遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の採取にとどまっている。町内では、未だ発見例がなく、近傍では、三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器が採取されている[7]。

縄文時代になると中原町香田遺跡[8]や東脊振村戦場ケ谷遺跡[9]などが出現する。町内においてもこれまでは町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、ここに報告する船石遺跡７区をはじめ船石遺跡の各調査区[10]において遺構・遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中近世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しくその内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[11]、神埼郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓約300基が調査され舶載鏡、仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[12]・五本谷遺跡[13]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[14]、地区運動広場整備に伴う調査で５世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[15]などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡[16]・船石遺跡[17]・八藤遺跡[18]から住居址や甕棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中尾町姫方原遺跡[19]・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から大和町にかけての山麓

Tab. 1　船石遺跡周辺遺跡地名表

上峰町		11	一本谷遺跡	21	姫方前方後円墳	31	東尾銅剣出土遺跡	39	三津永田遺跡
1	鎮西山南麓古墳群	12	目達原古墳群	22	姫方原遺跡	三根町		40	下三津前方後円墳
2	屋形原古墳群	13	塔の塚廃寺跡	23	上地遺跡	32	本分貝塚	41	夕ヶ里遺跡
3	谷渡古墳群	14	上米多貝塚	24	ドンドン落遺跡	三田川町		42	西一本杉遺跡
4	堤土塁跡	中原町		25	町南遺跡	33	吉野ヶ里丘陵遺跡群	43	西石動遺跡
5	八藤遺跡	15	山田蔵骨器出土地	26	天神遺跡	34	二本黒木遺跡	44	下石動遺跡
6	五本谷遺跡	16	山田古墳群	27	西寒水遺跡	35	下中杖遺跡	45	松原遺跡
7	二塚山遺跡	17	大塚古墳	北茂安町		東脊振村		46	辛上廃寺跡
8	**船石遺跡**	18	八幡社遺跡	28	宝満谷遺跡	36	山田谷遺跡	47	大塚遺跡
9	船石南遺跡	19	簑原遺跡	29	宝満宮前方後円墳	37	西石動古墳群	48	横田遺跡
10	切通遺跡	20	姫方遺跡	30	大塚古墳	38	西石動鋼戈鎔范出土地		

部や丘陵部に前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[20]、中原町姫万古墳[21]、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群[22]、神埼町伊勢塚古墳[23]、佐賀市銚子塚古墳[24]、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖－川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、『古事記』の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる前方後円墳７基ほか円墳数基からなる目達原古墳群、同じく５世紀代の古墳で蛇行状鉄剣、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[25]が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中杖遺跡[26]、東脊振村下石動遺跡[27]などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[28]、霊仙寺跡[29]などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条理制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。

町内では堤土塁跡[30]や塔の塚廃寺跡[31]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、潅漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、結論に至っていない。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られている。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と部にふさわしい地域といえる。

註

1）赤木祥彦「二　地形」『上峰村史』上峰村　1979
2）藤瀬禎博・石橋新次『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
3）木下巧・天本洋一『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
4）七田忠昭『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第２集　北茂安町教育委員会　1986
5）金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
6）佐賀県教育委員会調査中
7）七田忠志「原始」『上峰村史』上峰村　1979
8）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
9）七田忠志「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』６－２・４　1934
10）昭和63年度、平成元年度、上峰町教育委員会調査、整理中
11）金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
12）高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
13）木下巧・七田忠昭「五木谷遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
14）七田忠昭『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
15）七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16）昭和60年度、上峰村教育委員会調査、
17）鶴田浩二、原田大介『船石遺跡Ⅱ図録編』上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村　教育委員会　1988　鶴田浩二、原田大介『船石遺跡Ⅱ本文編』上峰村文化財調査報告書　第７集　上峰村教育委員会　1989
18）平成元年度、上峰町教育委員会調査
19）木下巧他『姫方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会　1976
20）石橋新次『剣塚前方後円墳墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
21）前出(3)
22）松尾禎作『目達原古墳群調査報告　佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第９輯　佐賀県教育委員会　1950
23）木下之治「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県　1968
24）木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会　1976
25）前出(15)
26）七四忠昭・高山久美子・西田和己『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
27）高瀬哲郎他「下石動遺跡」『下石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告(6)　佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987
28）松尾禎作「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５輯　佐賀県　1936
29）田平徳栄他『雲仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会　1980
30）高島忠平・柾一義『堤土墨跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
31）松尾禎作「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第７輯　佐賀県　1940

Ⅱ．調査に至る経過

1．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まり打開のためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。そこで、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者により協議が行われ、調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、ＪＲ長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたことに始まる。

今回の船石遺跡の調査区を含む船石地区一帯の埋蔵文化財の取扱についての四者協議会は、昭和60年10月15日に行われた昭和61年度農業基盤整備事業に伴う第１回の協議会が最初であった。この席上では、昭和61年度事業に伴うＪＲ長崎本線以南の船石遺跡（２～５区として昭和

61年度調査）について協議を行う一方で、次年度以降の農業基盤整備事業に先立つ船石地区一帯の埋蔵文化財確認調査について協議が行われた。その結果、昭和57年に町教育委員会が主体となって調査を実施し、支石墓、甕棺墓のほか５世紀代の古墳３基が検出され、古墳からは蛇行状鉄剣ならびに蛇行状鉄矛など貴重な遺物が出土し、県史跡に指定された船石遺跡周辺のＪＲ長崎本線以北の水田面約40haについて確認調査を実施することになった。

確認調査は、稲刈り終了をまって実施され、２ｍ×２ｍの試掘溝268カ所による調査で、県史跡が位置する低位段丘上位面の周辺の低位段丘下位面に弥生時代を中心とする遺構遺物が検出された。この調査によって、船石遺跡の範囲がほぼ把握され、全体では100,000㎡以上に及ぶことが判明した。

以後、船石遺跡については、昭和61年度から農業基盤整備事業に伴い工事の影響が地下の埋蔵文化財に及ぶ地区を対象に本調査を実施してきた。

昭和61年10月18日、「昭和62年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催され、昭和62年度農業基盤整備事業として、船石地区とＪＲ長崎本線の間の区域を対象とした事業計画が提示された。当該区域内にはほぼ全域にわたり遺跡の広がりが確認されていたため、埋蔵文化財の取扱いについて、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その結果、船石地区内で、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲4,200㎡について事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

２．調査の経過

昭和62年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴う船石遺跡６・７区の発掘調査は、圃場基盤造成工事及び水路設置工事により削平が予定される部分4,200㎡について実施した。調査は、昭和62年７月１日に着手し、同年12月９日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

船石遺跡６区の調査経過

７月１日　圃場基盤造成工事で面的に削平が予定されている部分3,600㎡について、調査区名を船石遺跡６区として、重機による表土剥ぎに着手。７月10日まで。

15日　作業員を招集し、簡単な作業の安全祈願の後、発掘器材類の搬入、休憩用テントを設営。午後、調査区北東部分から、発掘作業員による遺構検出作業を開始した。

27日　これまでに検出した遺構について、土壙、ピットなどから掘り下げに着手。以後、検出した遺構から逐次掘り下げを行い、必要に応じて写真撮影などをあわせ行い、調査範囲を南西方面に拡大していった。

８月７日～16日　お盆のため調査休止。17日調査再開。

9月7日　遺構実測のための、基準杭設定。8日より遺構の全体配置図作成開始。18日より、詳細遺構実測作業を開始し、遺構の掘り下げと実測作業を並行して進める。

9月中旬　調査区西方にて、弥生時代の住居址が集中して検出された。

10月末　遺構の掘り下げをほぼ終了した。11月より調査区北側にて検出された黒色土層の堆積部分の掘り下げに着手、グリッドの線にあわせて設定した土層観察用のセクションベルトを残し掘り下げていった。

11月26日　気球による調査区全景や住居址、建物址などの個別の遺構の空中写真撮影。

12月9日　遺構のレベリングを終了。発掘器材類、テントを撤収し、現場での作業をすべて終了した。

船石遺跡7区の調査経過

8月19・20日　水路設置工事により削平が予定されている部分600㎡について、調査区名を船石遺跡7区として、重機による表土剥ぎを行った。

9月7日　線的に長い調査区の東側から作業員による遺構検出作業に着手。低位段丘上位面と低位面の境界を走る部分に調査区が位置しており、段丘上位面側からの浸水が激しく、連日排水ポンプを稼動させながらの作業を強いられた。

以後、6区と同様に検出した遺構から掘り下げを実施、遺構の写真撮影、実測をあわせて行い調査を進めていった。

10月末　検出された遺構の掘り下げをほぼ終了。

11月15日　実測作業を終了し、現場での作業をすべて終了した。

その後、出土遺物、実測図などの記録類を町文化財事務所に移し、遺物の水洗い、図面、写真などの記録類の整理作業を実施した。

Ⅲ. 遺跡の概要

1．遺跡の概要（Fig. 2）

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の標高14m～30mの洪積世段丘上に位置している。遺跡は、これまでの調査で縄文時代から中世に及ぶ各時代の遺構、遺物が検出されており、中でも弥生時代の所産になるものが圧倒的に多く、弥生時代の集落及び墳墓がその主体の複合遺跡である。遺跡の範囲は、農業基盤整備事業に伴い過去に実施された確認調査によって、現在船石集落が立地する低位段丘上位面とこれから南に延び切通集落の北部で中世期平野に没する低位段丘下位面にまたがり、100,000㎡以上の範囲に及ぶことが明らかになっている。この段丘は、東を切通川の支流の舟石川に、西を切通川本流及び同支流の大谷川に開析され南北に細長い舌状を呈している。

地元では、以前から土器片や石器などが耕作に伴い採取されたり、集落の竹藪の開墾の際には甕棺墓が開口したりするなどの話が伝えられていた。また、低位段丘上位面の先端（標高20m～25m付近）付近に位置する船石天神宮境内には、古墳の存在とともに「舟石」・「亀石」・「鼻血石」と呼ばれる巨石群の存在が知られ、昭和20年代より研究者のあいだでは支石墓ではないかと疑問視されてきた。この船石遺跡が、本格的に調査されるのは昭和57年のことで、その後の上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査としては、今回の船石遺跡６、７区の調査が、２年次目に当たる。以下、過去２回の調査概要を年度ごとに記す。

(1) 昭和57年度　船石地区運動広場整備に伴う調査[1)]

調査地区・調査面積・調査区域名：字四本杉の低位段丘上位面（標高21m～25m）に所在する船石天神宮境内の調査、1,660㎡、北区・南区[2)]

遺構：弥生時代の竪穴式住居址９軒、支石墓２基（「舟石」・「亀石」）、甕棺墓ほか墳墓100基以上、５世紀中葉から５世紀末の古墳３基（内１基の天井石が「鼻血石」）、中世の祭祀遺構、その他時期・性格不明の基壇状遺横が検出された。

遺物：住居址出土の弥生式土器・石器・鉄器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳出土の土師器・須恵器・鉄器、中世祭祀遺構出土の中世土器などで、なかでも古墳出土の蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛は被葬者の性格を裏付けるものとして注目されている[3)]。

(2) 昭和61年度　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査[4)]

調査地区・調査面積・調査区域名：字一本谷の低位段丘下位面（標高15m付近）の水田面の調査、6,500㎡、２区～５区

遺構：弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居址108軒、土壙多数、掘立柱建物址３棟、

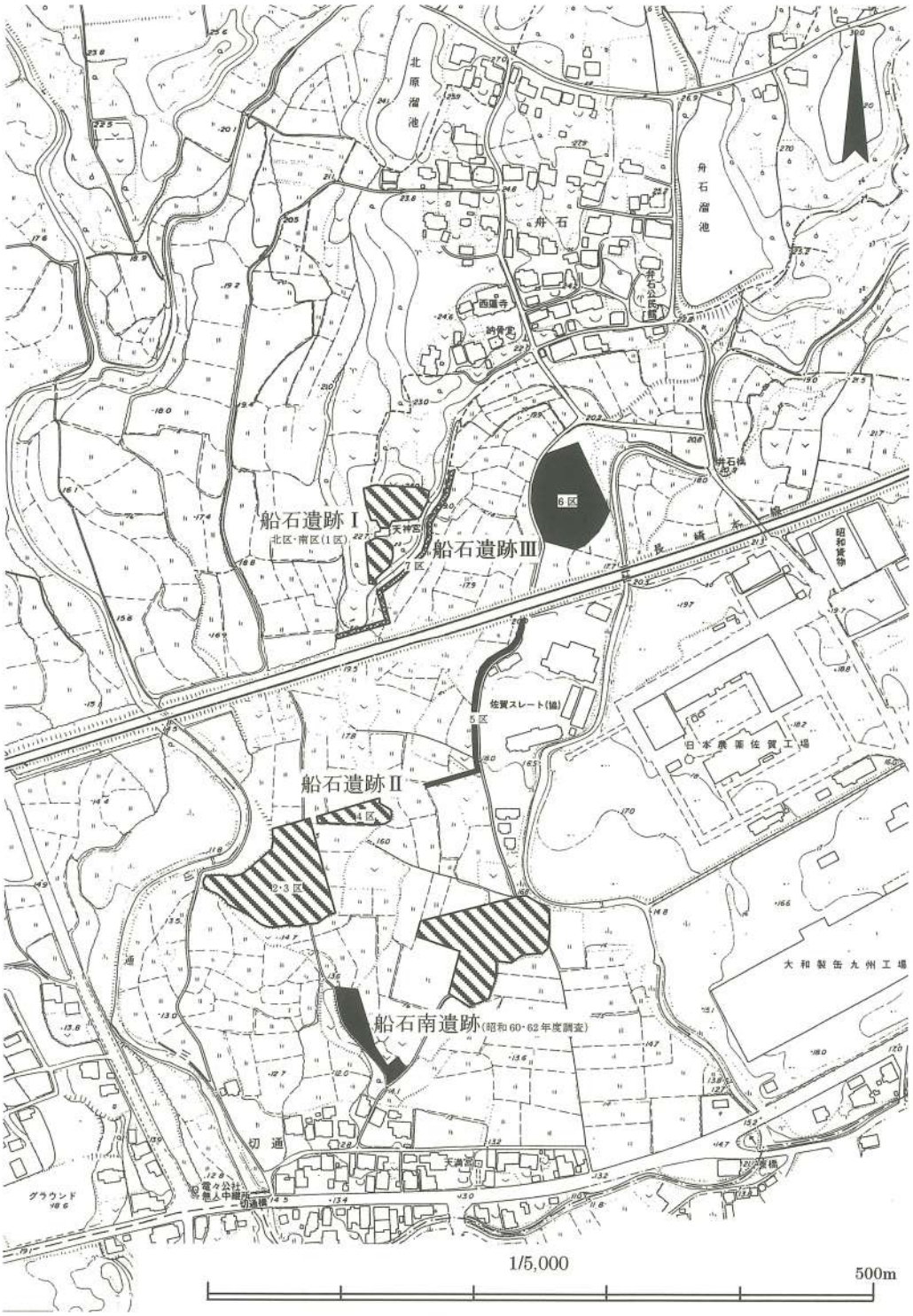


Fig. 2　船石遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

甕棺墓８基、溝１条が検出された。

遺物：弥生時代住居址出土の弥生式土器・石器・鉄器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳時代住居址出土の土師器・須恵器・鉄器など

次に、本遺跡周辺の遺跡を概観すると、かなりの密度で弥生時代の遺跡が分布している。昭和61年度調査の船石遺跡２～３区の東南に隣接する船石南遺跡では、昭和60年度・62年度の農業基盤整備事業に伴う調査で竪穴式住居址40軒余、甕棺墓をはじめ土壙墓・石棺墓など約700基が検出されている[5]。さらに東方の船石工業団地内においても甕棺墓などの墳墓が確認されており、一帯に一大墓域を形成している。これらの墳墓群を営んだ集団は、集落を主体とした船石遺跡の集団を想定することが妥当であり、船石遺跡群として有機的関連を持つものと考えられる。

また、切通川西岸の二塚山丘陵上には昭和30年に調査された切通遺跡[6]、佐賀県東部中核工業団地造成にともない調査が行われた二塚山、五本谷などの二塚山遺跡群の墓域が展開しており[7]、これらの墳墓からは副葬品として漢式鏡・小型彷製鏡・鉄剣・鉄刀・玉類が多数出土しいる。これは副葬品がほとんど見えない船石遺跡群の墳墓群と好対照をなしている。

以上のように、本遺跡は、切通川西岸の二塚山丘陵に展開する二塚山遺跡群・切通遺跡などとともに町北部の代表的な遺跡である。

２．調査区域の概要（Fig. 2 ・PL. 1，2，5）

今回の調査の対象となった船石遺跡６・７区は、昭和62年度県営農業基盤整備事業施工地区の内、上峰町大字堤字四本杉の標高19m付近の低位段丘下位面に位置し、現在は水田として利用されている。圃場基盤造成工事により面的に削平される分部６区（3,600㎡）は、本遺跡が立地する低位段丘下位面の東斜面分部にあたり、すぐ東を舟石川が南流している。また、水路掘削工事により掘削される分部７区（600㎡）は、船石天神宮が立地し、佐賀県史跡に指定されている船石遺跡が所在する低位段丘上位面の東側縁辺沿いの低位段丘下位面との境界部分にあたる。

調査は、６・７区の合計4,200㎡について、両区を一部並行して実施した。６・７区にまたがる区域に、磁北を基準として東西列Ａ～Ｖの22列、南北列１～15の15列の10m×10mのグリッドを設定しこれを基準に実施した。また、調査区域の土層は、後世の水田耕作などのため、６区の北側一部を除き、自然堆積層が失われ、耕作土などの直下は洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

遺構は、６区では、弥生時代の竪穴式住居址10軒が調査区の北西分部に集中した形で検出された。そのほか、奈良時代以降の掘立柱建物址２棟、土壙など64基、溝跡３条などであった。

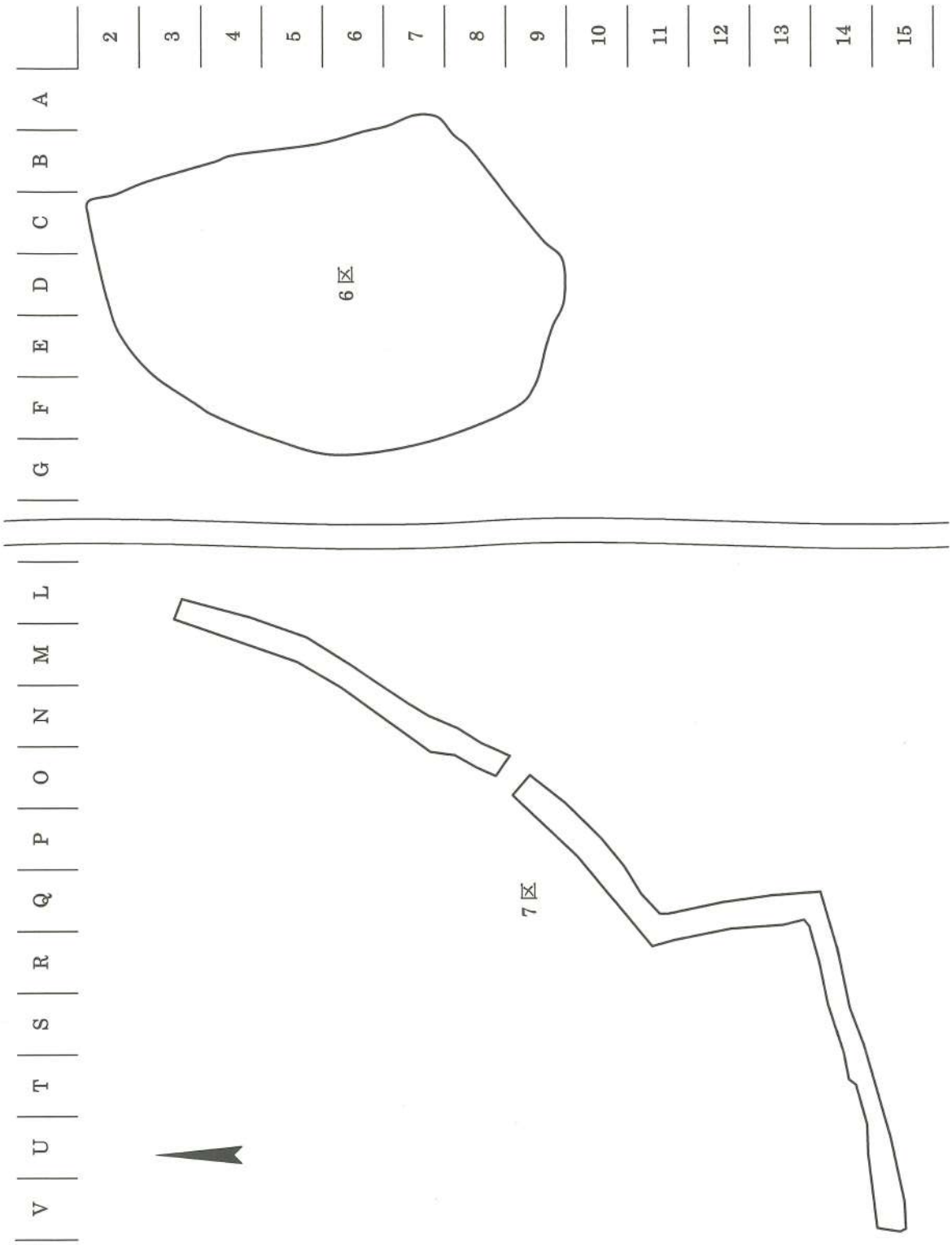


Fig. 3　船石遺跡６・７区グリッド設定図（1/1,000）

また、７区では、調査区南部の低位段丘上位面の先端付近に集中して縄文時代の土壙１基、弥生時代の竪穴式住居址１軒、土壙などが検出された。これら６・７区の遺構から縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石器などが出土している。

註

1）七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
2）農業基盤整備事業に係る船石遺跡の調査にあたって、この「北区」・「南区」を「船石遺跡１区」と仮称した。
3）調査区域は「船石遺跡」として、また古墳出土遺物も「船石遺跡１・２・３号墳出土遺物」としてそれぞれ昭和59年３月21日に佐賀県史跡および重要文化財の指定を受けている。
4）鶴田浩二・原田大介『船石遺跡Ⅱ　図録編』上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介『船石遺跡Ⅱ　本文編』上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
5）原田大介「３．船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７』佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989
6）金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
7）高島忠平・七田忠昭他『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979

Ⅳ．船石遺跡６区の調査

１．遺　構（Fig. 4 ～17・PL. 1 ～ 4 , 6 ～17・Tab. 2 ～ 4 ）

今回６区の調査において検出された遺構は、弥生時代の竪穴式住居址10軒、奈良時代以降の掘立柱建物址２棟、土壙など64基、溝跡３条のほか性格不明の遺構１基、その他ピットなどであった。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 4 ～ 7 ・PL. 1 ～ 3 , 6 ～12・Tab. 2 ）

今回の調査で竪穴式住居址として取り扱った遺構は、10軒であった。いずれも弥生時代中期の隅丸方形を基調とする竪穴式住居址で、調査区域の北西部に集中して検出されており、調査区中央部から南東分部には分布していないことから、ここで検出された住居群が本遺跡の弥生時代中期の集落の東限と推測される。

また、各住居の配置をみると、SH-601、SH-602、SH-606、SH-607、SH-610の北西から南東方向の一群（Ａ群）とSH-604、SH-605、SH-608、SH-609の北東から南西方向の一群（Ｂ群）に分かれ、Ａ群の住居の方がＢ群の住居より概して一回り住居の規模が大きいことが指摘できよう。

SH-601（Fig. 4 , 5 ・PL. 6 ）

SH-601は、F-６、７Gr.の調査区西側境界に接して検出された長辺6.0m以上、短辺5.2mの隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の中央をSD-601により失っている。住居南東壁及び南西壁の内側に幅10～40cm、高さ10cm程の段をもつ。床面に土壙状の掘り込み、ピットがみえるが、主柱穴などは不明。床面積は検出部分で25.0m²。床面までの掘り込みの深さは約15cm。主軸は、長辺方向を基準にするとN-52°-W。

SH-602（Fig. 4 , 5 ・PL. 6 , 10）

SH-602は、F-６Gr.で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の南西部分をSD-601に切られており、SD-601以南の部分は不明である。床面はすでに失われており、底面に凹凸がある掘り方のみが遺存している。主柱穴などの施設は不明。規模は、検出部分で長辺6.3m、短辺4.1m、床面積は推定22.3m²。掘り方底面までの掘り込みの深さは平均で６cm程度。主軸は、長辺方向を基準にするとN-46°-W。

SH-603（Fig. 4 , 5 ・PL. 6 , 10）

SH-603は、F-７、８Gr.の調査区西側境界に接して方形の住居址の東コーナー部分が一部検

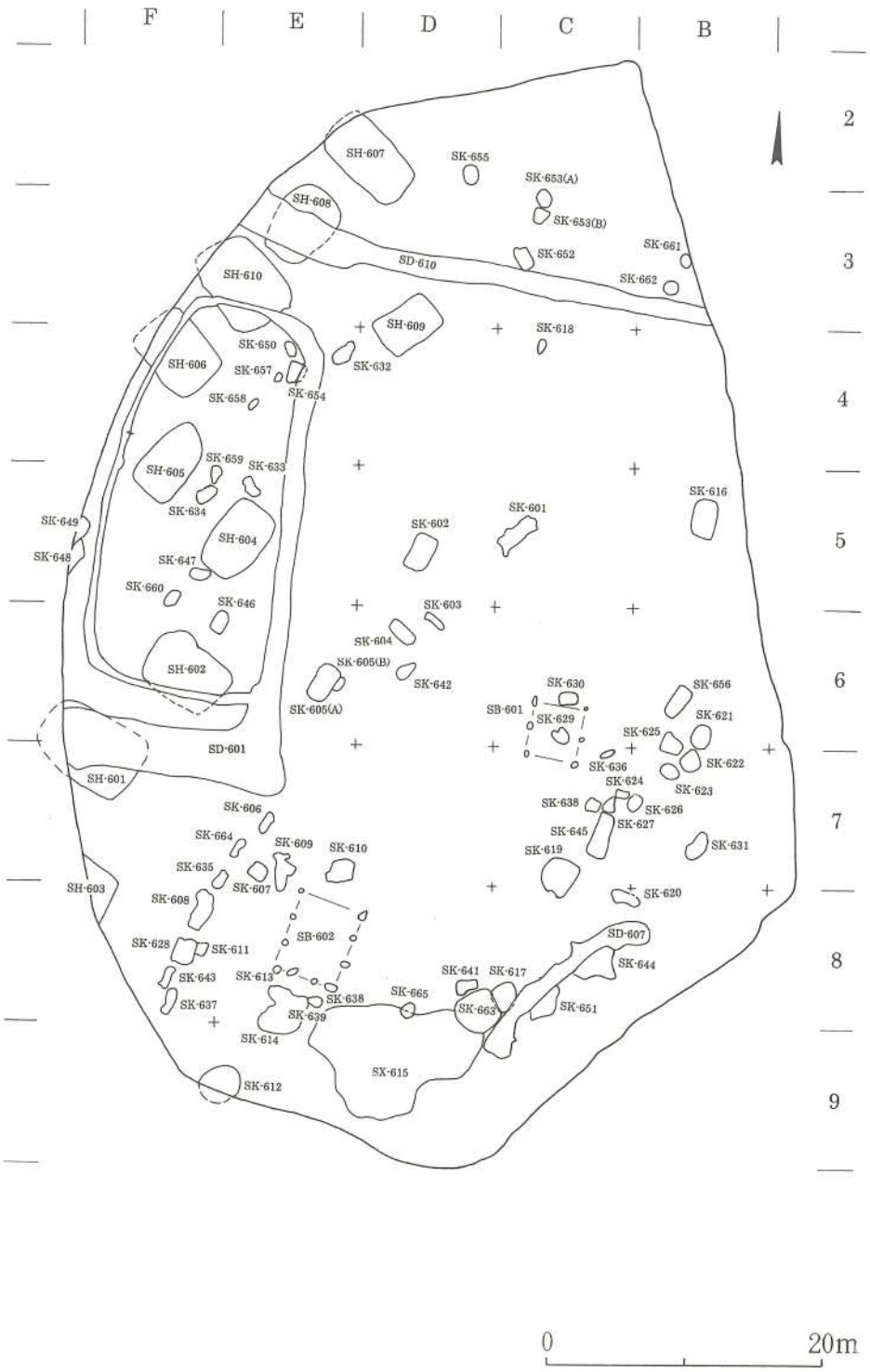


Fig. 4　船石遺跡 6 区遺構配置図（1 /500）

出された住居址。北東壁際では壁沿いに幅40cm、深さ10cm程の周溝がめぐるが、南東壁際では壁から40cm～50cmほど離れた分部に壁と並行して周溝がめぐる。主柱穴などその他の施設不明。住居の規模は、確認分部で一辺約3.2m、床面積は10.0m²。床面までの掘り込みの深さは15cm弱。主軸は、北東壁を基準とするとN-30°-W。

SH-604（Fig.4，5・PL.6，10）

SH-584は、E-5Gr.で検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。床面に小さなくぼみが多数見えるものの主柱穴は不明。床面中央に2ヶ所と南東壁際に土壙状の掘り込みをもつ。規模は、長辺5.9m、短辺3.8m、床面積は19.3m²。床面までの掘り込みの深さは7cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-39°-E。

SH-605（Fig.4，6・PL.7，11）

SH-605は、F-4、5Gr.で検出された不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の南東及び南西壁際では壁沿いに幅10cm～20cm、深さ10cm程の周溝がめぐるが、北東及び北西壁分部では壁から離れた分部に壁と並行して周溝がめぐり住居内を一周している。主柱穴は2本。規模は、長辺5.8m、短辺3.4m、床面積は15.3m²。床面までの掘り込みの深さは10cm弱。主軸は、長辺を基準にするとN-36°-E。

SH-606（Fig.4，6・PL.7，11）

SH-606は、F-4Gr.で調査区西側境界に接して検出されたやや胴張りの隅丸長方形の竪穴式住居址。住居壁内側に沿って幅20cm前後、深さ10cm程の周溝がめぐる。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙をもつ。規模は、検出された部分で、長辺5.2m以上、短辺4.6m、面積は21.2m²以上。床面までの掘り込みの深さは、平均で7cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-44°-W。

SH-607（Fig.4，6・PL.8）

SH-607は、D、E-2Gr.で調査区北西側境界に接して検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。周溝は、幅15cm～20cm、深さ5cm程。住居北東壁分部では壁内側に沿って、南東壁部分では壁からはなれ床面を弧状にめぐり南西壁部分まで続き消滅する。主柱穴は不明。床面中央よりやや南東によった部分に炉状土壙をもつ。規模は、検出された部分で、長辺6.4m以上、短辺4.2m、面積は21.1m²以上。床面までの掘り込みの深さは、平均で6cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-44°-W。

SH-608（Fig. 4，6 ・PL. 8）

SH-608は、E-3 Gr.で検出されたやや不整な胴張り隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の中央をSD-610によって切られている。遺存分部には幅15cm、深さ5cm程の周溝がめぐる。主柱穴などの施設は不明。規模は、検出された部分で、長辺5.7m、短辺約4.5m、面積は推定で18.3㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で8cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-44°-E。

SH-609（Fig. 4，7 ・PL. 9，11）

SH-609は、D-3、4 Gr.で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の掘り込みはほとんど削平され、周溝によって住居址として取り扱った。幅10cm～30cm、深さ5cm程の周溝が住居全周をめぐっている。主柱穴は不明。南東壁際に土壙状の掘り込みをもつ。規模は、長辺4.9m、短辺3.4m、面積は13.8㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で2cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-55°-E。

SH-610（Fig. 4，7 ・PL. 9，12）

SH-607は、E、F-3 Gr.で調査区北西側境界に接して検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の掘り込みはほとんど削平され、周溝によって住居址として取り扱った。拡張されたものか、幅10cm～40cm、深さ5cm～10cm程の周溝が住居の北西壁、南西壁際で二重にめぐる。主柱穴は不明。床面ほぼ中央に炉状土壙をもつ。規模は、長辺6.5m、短辺4.7m、面積は検出分部出で17.5㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で3cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-35°-E。

Tab. 2　船石遺跡6区出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模（m・㎡）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備　考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-601	隅丸長方形	※6.0	5.3	0.16	※43.3	N-52°-W		○			弥生式土器甕、壺、鉢、器台、石鏃	
SH-602	隅丸長方形	6.3	4.1	0.06	※10.0	N-46°-W					弥生式土器甕、壺、器台	掘り方のみ遺存
SH-603	不整方形	※3.3	※3.2	0.14	※14.0	N-30°-W		○			弥生式土器甕、壺、蓋、器台	
SH-604	隅丸長方形	5.9	3.8	0.07	21.5	N-39°-E		○			弥生式土器甕、壺、高坏、蓋、器台、片刃石斧	
SH-605	隅丸長方形	5.8	3.5	0.08	※43.3	N-36°-E	2本	○			弥生式土器甕、壺、蓋、器台、磨石、砥石	
SH-606	隅丸長方形	※5.2	4.6	0.07	※10.0	N-44°-W		○	炉状土壙		弥生式土器甕、壺、蓋、器台、石包丁、土弾	
SH-607	隅丸長方形	※6.6	4.2	0.06	※14.0	N-44°-W		○	炉状土壙		弥生式土器甕、壺、器台、石包丁	
SH-608	隅丸長方形	5.7	4.5	0.08	21.5	N-44°-E		○			弥生式土器甕、壺、高坏、砥石	
SH-609	隅丸長方形	4.9	3.4	0.02	13.8	N-55°-E		○				周溝のみ遺存
SH-610	隅丸長方形	6.5	4.7	0.03	※14.5	N-35°-W		○	炉状土壙		弥生式土器甕、壺、高坏	周溝のみ遺存

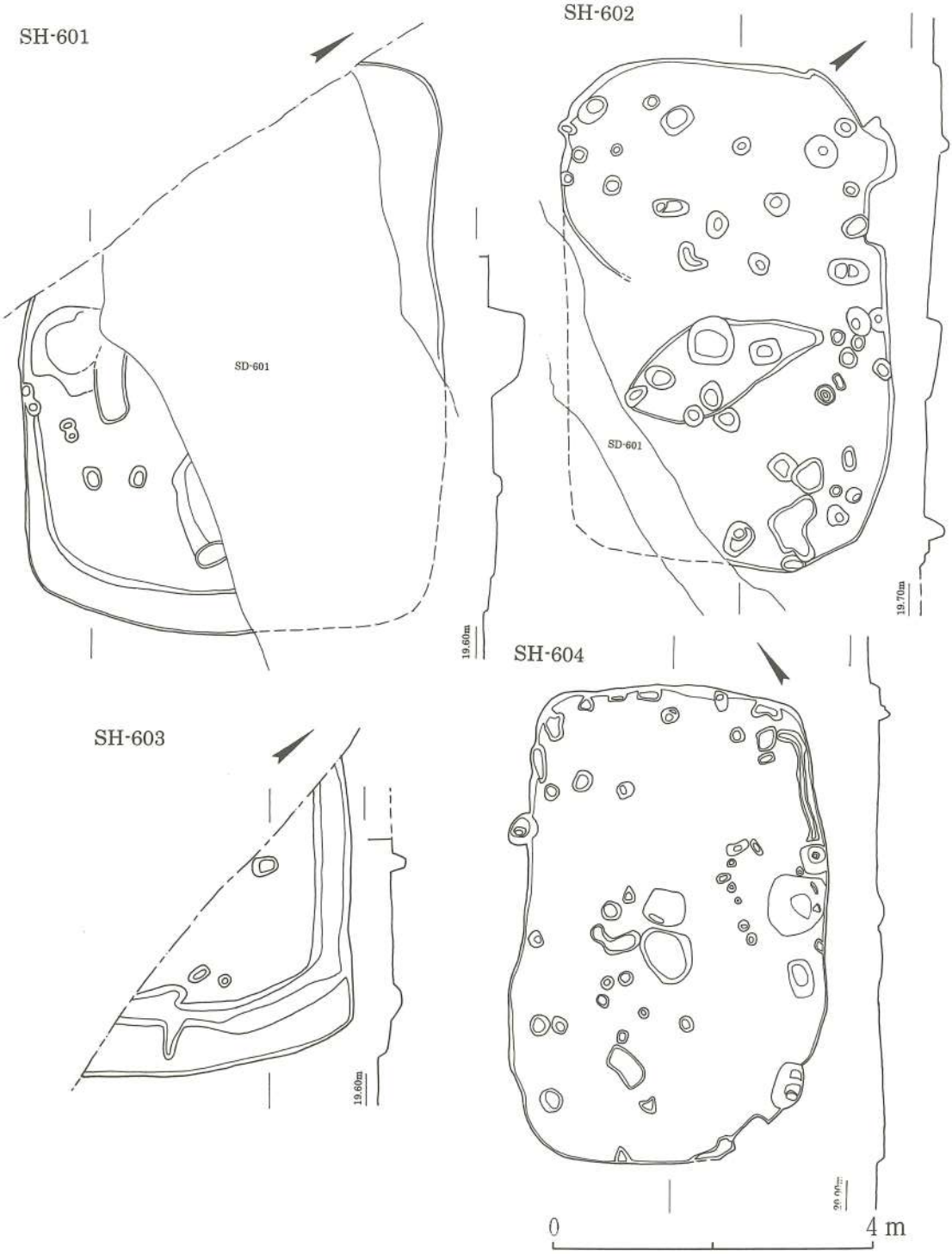


Fig. 5　船石遺跡 6 区竪穴式住居址実測図(1)　SH-601～SH-604（1 /80）

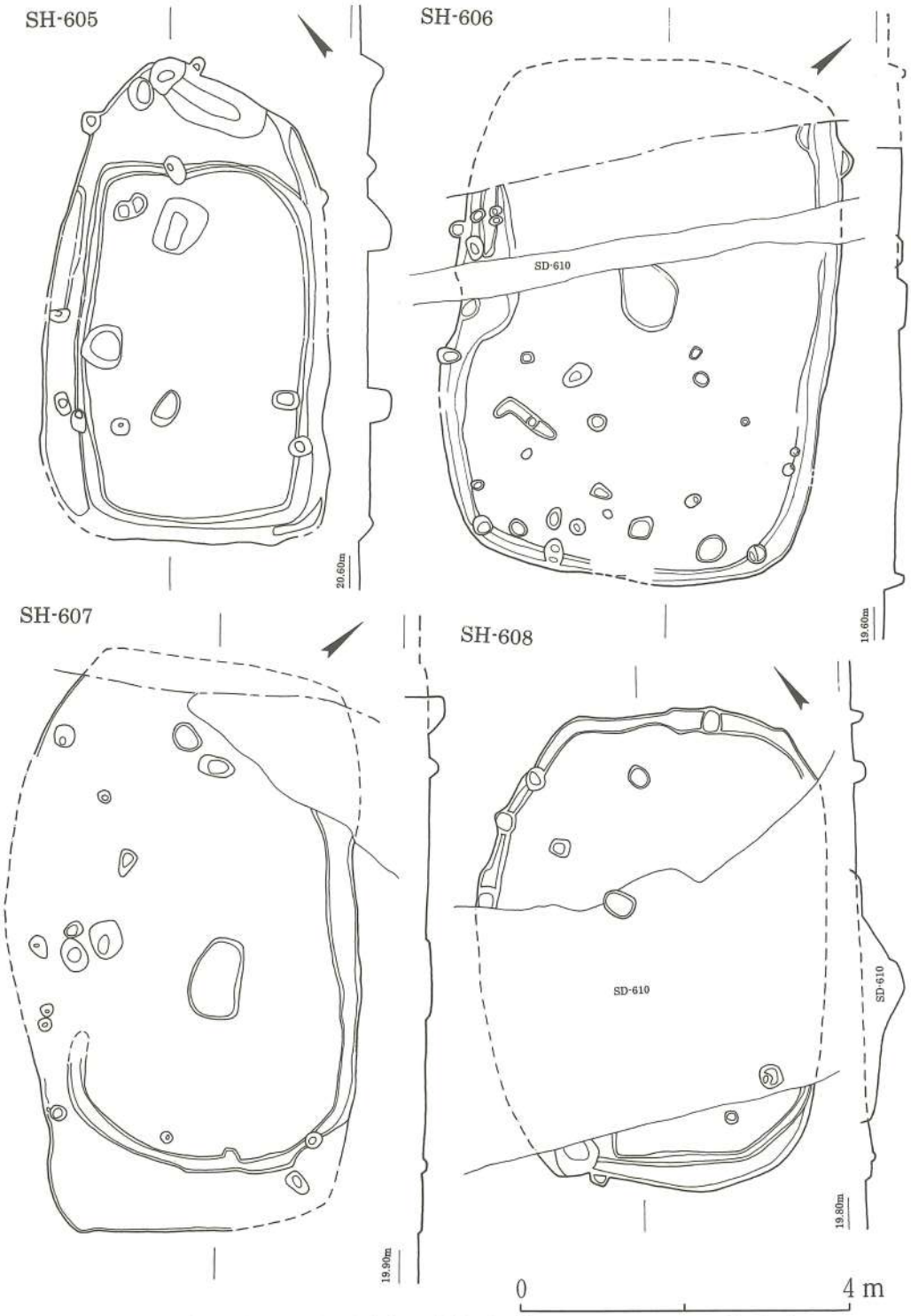


Fig. 6　船石遺跡６区竪穴式住居址実測図(2)　SH-605～SH-608（1/80）

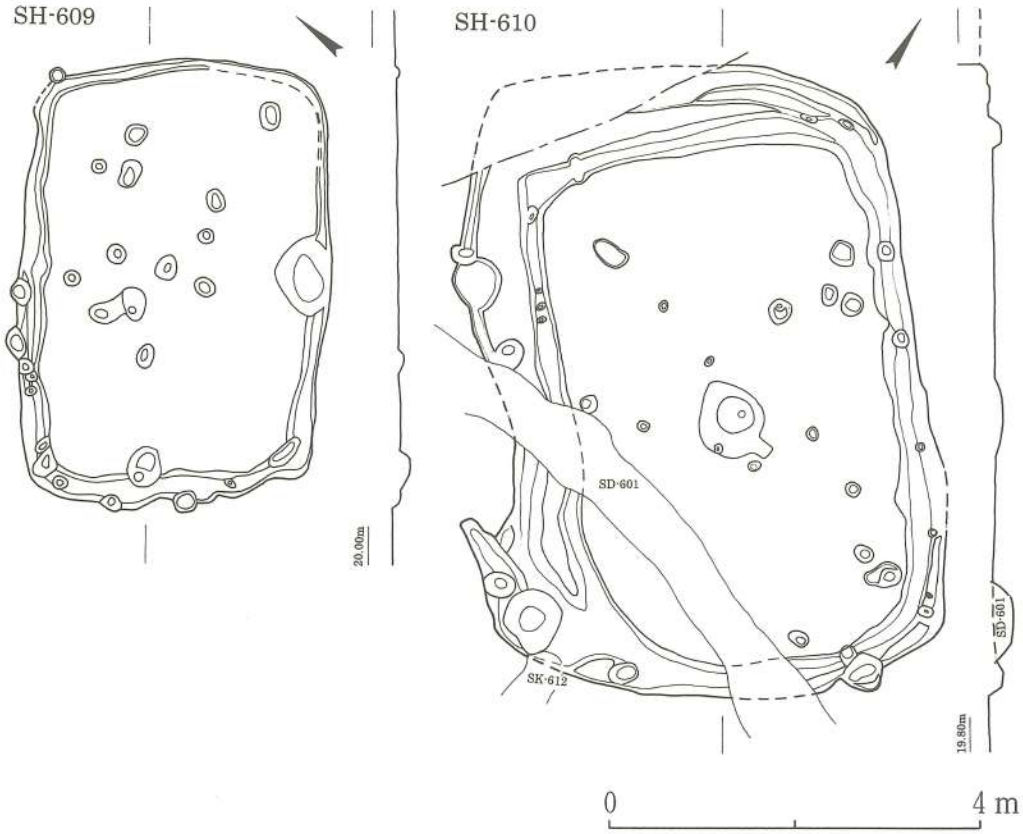


Fig. 7　船石遺跡６区竪穴式住居址実測図(3)　SH-609・SH-610（１/80）

(2)　**掘立柱建物址**（Fig. 4，8・PL. 2，12, 13・Tab. 3）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-601、SB-602の２棟で、これらは、いずれも柱穴からの出土遺物もなく、時期は限定できないがその形態、または遺構の配置などから奈良時代以降の建物と推測される。

SB-601（Fig. 4，8・PL. 2，12）

SB-601はC-６、７Gr.で検出された平面形態２間×１間の建物で、柱穴は、直径25cm～50cm、深さ50cm～60cmの円形の掘り方。桁行の中央の柱穴は二段掘りとなっており、柱の木質が一部遺存している。その大きさからすると、柱材の直径は15cm程度と推定できる。桁行の柱間は2.０m、梁行の柱間は3.7m。規模は、桁行4.0m、梁行3.7m、床面積14.8m²。主軸はN-12°-E。

SB-602（Fig. 4，8・PL. 2，13）

SB-602はD、E-８Gr.で検出された平面形態３間×１間の建物で、建物の南辺の梁行には北

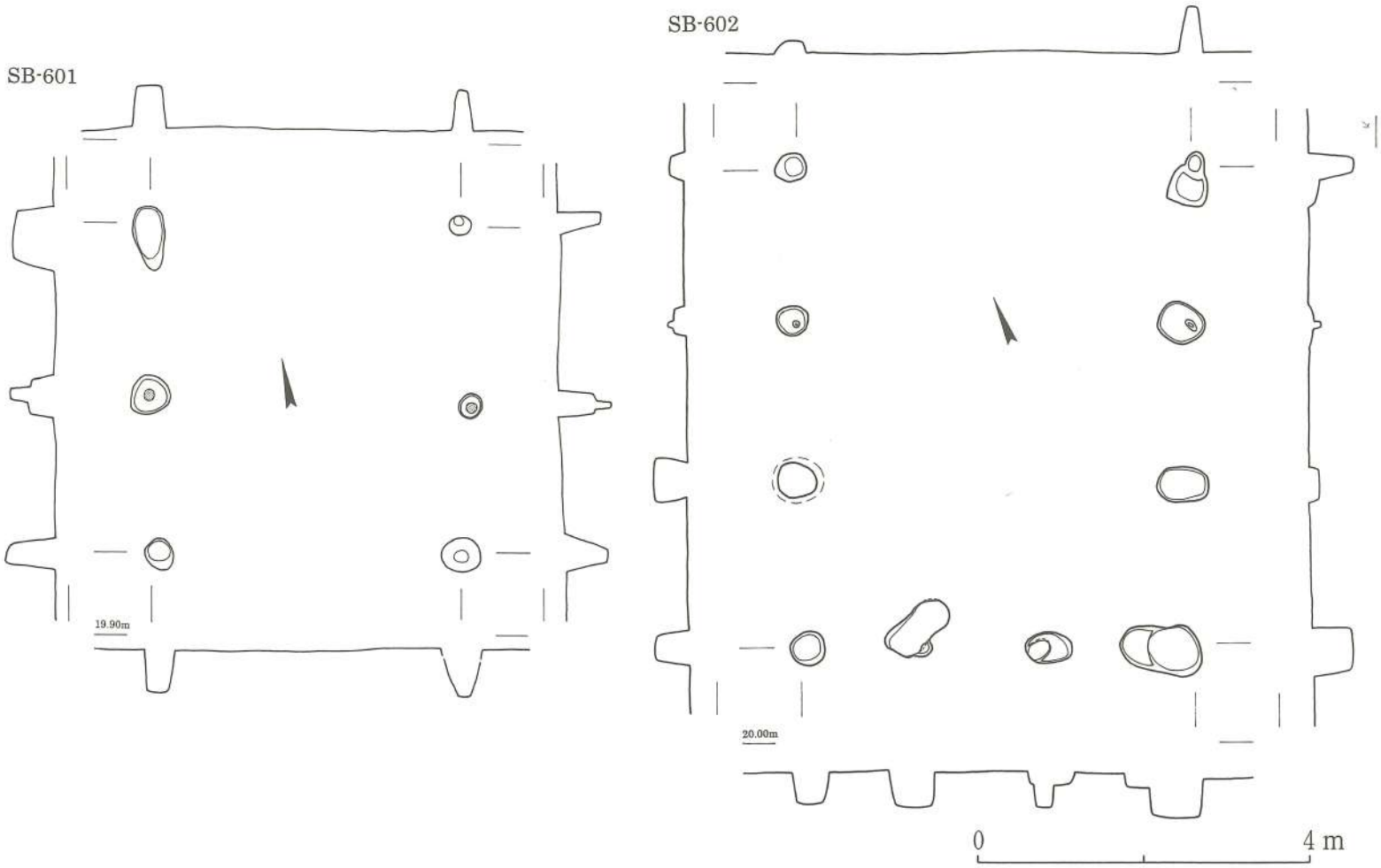


Fig. 8　船石遺跡 6 区掘立柱建物址実測図　SB-601・SB-602（1 /80）

辺にない２本の柱穴をもつが、これは入口などの施設ではないかと推定される。柱穴は、直径35cm～60cm、深さ20cm～60cmの円形の掘り方。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は4.7m。規模は、桁行5.8m、梁行4.7m、床面積27.3m²。主軸はN-18°-E。

Tab. 3　船石南遺跡１・２・６区出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模（m、m²）				棟方向
		桁行柱間	梁行柱間	長さ×幅	面積	
SB-601	2×1	2.0	3.7	4.0×3.7	14.8	N-12°-E
SB-602	3×1	1.9	4.7	5.8×4.7	27.3	N-18°-E

(3)　**土壙**（Fig. 4，9～16・PL. 2，13～17・Tab. 4）

今回の６区の調査で検出された土壙などは64基であった。これらの中で出土遺物などから時期が特定できるものは、44基であった。SK-602、SK-603、SK-606、SK-608、SK-611、SK-624、SK-631～SK-635、SK-637、SK-643、SK-646、SK-648～SK-658が弥生時代中後期の土壙で25基、SK-601、SK-607、SK-609、SK-610、SK-612、SK-614、SK-619、SK-622、SK-623、SK-625、SK-629、SK-630、SK-638、SK-659が奈良時代の土壙で14基、SK-604、SK-617、SK-620、SK-644が中世の土壙で５基の各時期に分類できる。

以下、検出された各土壙の形態・法量などを一覧表にまとめ報告とする。

Tab. 4　船石遺跡６区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-601	不整形	3.23 3.19	1.40 1.14	0.11	2.9		須恵器坏、蓋、土師器甕、坏、蓋、高坏、石鏃	
SK-602	小判形	2.64 2.53	1.70 1.62	0.14	3.7		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-603	不整形	1.57 0.84	0.54 0.31	0.25	0.2		弥生式土器甕、壺	
SK-604	隅丸長方形	2.06 1.95	0.97 0.85	0.34	1.5		中世土器壺、羽釜、土鍋	
SK-605A	隅丸長方形	2.40 2.22	1.65 1.48	0.19	3.1			
SK-605B	楕円形	0.99 0.84	0.65 0.47	0.20	1.2			
SK-606	小判形	1.60 1.52	0.76 0.68	0.04	0.9		弥生式土器甕、壺	
SK-607	隅丸方形	1.25 1.21	1.24 1.18	0.06	1.4		須恵器坏、蓋	
SK-608	不整形	2.95 2.85	1.46 1.22	0.37	3.1		弥生式土器甕、壺、高坏、器台、蓋	
SK-609	不整形	2.74 2.65	1.73 1.40	0.29	2.5		須恵器蓋、土師器坏	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-610	不整形	2.27 1.38	1.49 0.59	0.30	0.6		須恵器坏、蓋、土師器甕、坏、壺	
SK-611	隅丸方形	1.06 0.71	※0.7 ※0.6	0.12	※0.6		弥生式土器甕、壺、鉢、高坏、蓋	
SK-612	不整形	2.75 2.23	※1.9 ※1.3	0.51	2.7		須恵器坏、蓋、土師器甕、坏	
SK-613	不整形	0.81 0.37	0.79 0.36	0.46	0.1			
SK-614	不整形	3.56 2.70	3.05 2.41	0.26	5.4		須恵器坏、蓋、高坏、硯、土師器坏、高坏	
SK-616	小判形	2.86 1.93	1.90 0.99	0.69	1.5		石臼	
SK-617	不整形	2.00 1.37	1.62 1.46	0.55	1.2		須恵器坏、蓋、甕	
SK-619	不整形	2.81 2.80	2.50 2.41	0.08	5.2	中央に1本、壁際に2本	須恵器坏	
SK-618	楕円形	1.35 1.04	0.81 0.61	0.04	0.2			
SK-620	不整形	2.28 1.53	1.08 0.75	0.17	1.0		中世土器土鍋、甕	
SK-621	隅丸方形	1.72 1.60	1.38 1.28	0.09	1.8	底面に2本		
SK-622	胴張方形	1.50 1.13	1.36 0.80	0.16	0.7	底面に3本	須恵器坏、蓋	
SK-623	不整形	1.64 0.58	1.30 0.60	0.30	0.3		須恵器坏	
SK-624	隅丸長方形	0.96 0.62	0.65 0.34	0.20	0.2		弥生式土器甕	
SK-625	隅丸長方形	1.57 1.14	1.27 1.10	0.17	1.6		須恵器坏、蓋、土師器甕	
SK-626	小判形	1.30 1.23	0.92 0.86	0.11	0.9	中央に1本		
SK-627	不整形	0.96 0.73	0.73 0.61	0.30	0.3			
SK-628	隅丸長方形	1.80 1.60	1.52 1.35	0.44	2.0	中央に1本		
SK-629	不整形	1.26 1.18	0.70 0.67	0.08	0.8		須恵器坏	
SK-630	隅丸長方形	1.25 1.16	0.93 0.81	0.18	0.9			
SK-631	小判形	2.22 1.77	1.20 0.90	0.14	1.4		弥生式土器甕、壺	
SK-632	隅丸長方形	2.04 1.91	1.02 0.90	0.18	1.3		弥生式土器甕、壺、ミニチュア、支脚	
SK-633	隅丸長方形	1.37 0.87	0.80 0.66	0.50	0.6		弥生式土器甕、壺、蓋	
SK-634	隅丸長方形	1.82 1.73	1.62 0.73	0.60	0.7		弥生式土器甕、壺、蓋、高坏	
SK-635	不整方形	1.33 0.77	0.82 0.14	0.06	0.9		弥生式土器甕、壺	
SK-636	不整方形	0.99 0.32	0.37 0.26	0.20	0.2			
SK-637	不整形	2.06 1.15	0.80 0.27	0.65	0.2		弥生式土器甕、壺、蓋、高坏、器台	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-638	小判形	1.07 0.57	0.70 0.26	0.28	0.5		須恵器坏、蓋、土師器甕	
SK-639	隅丸方形	0.81 0.45	0.76 0.36	0.30	0.3			
SK-641	不整形	1.50 0.50	0.89 0.18	0.21	0.6			
SK-642	楕円形	1.56 0.82	0.93 0.21	0.34	0.8			
SK-643	不整形	1.80 1.74	0.62 0.54	0.44	0.7		弥生式土器甕、器台	
SK-644	不整形	※2.3 ※2.1	※2.2 ※2.0	0.09	※2.6		中世土器土鍋	
SK-645	長方形	※2.9 ※2.8	1.35 1.29	0.11	※3.3			
SK-646	不整形	1.84 1.58	1.14 0.94	0.11	1.2		弥生式土器甕、壺	
SK-647	不整形	1.32 0.90	0.75 0.50	0.03	0.3			
SK-648	不整形	※2.1 ※2.0	1.12 0.93	0.08	※1.4		弥生式土器甕	
SK-649	不整形	※2.0 ※1.5	※1.2 ※1.0	0.08	※0.8		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-650	不整形	(1.1) 0.89	0.81 0.63	0.05	0.5		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-651	不整形	※2.1 ※2.0	※2.0 ※1.9	0.12	※2.5		弥生式土器甕、壺	
SK-652	隅丸長方形	1.52 1.37	1.28 1.10	0.04	1.3		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-653A	小判形	※1.2 ※0.8	1.03 0.55	0.06	※0.4		弥生式土器甕、壺、蓋、高坏、支脚	
SK-653B	不整形	1.24 0.54	1.07 0.34	0.02	0.2			
SK-654	隅丸方形	1.51 1.45	※1.2 ※1.1	0.07	※1.2		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-655	円形	1.10 (0.9)	※0.7 ※0.5	0.05	※0.4		弥生式土器甕	
SK-656	隅丸長方形	2.42 1.27	1.24 1.05	0.33	0.5		弥生式土器甕	
SK-657	不整形	0.82 0.43	0.61 0.23	0.17	0.2		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-659	隅丸長方形	1.42 1.12	0.80 0.43	0.02	0.2		須恵器坏、甕、土師器甕、坏	
SK-660	不整形	1.21 1.18	0.95 0.66	0.15	0.5			
SK-661	円形	0.81 0.62	※0.6 ※0.5	0.03	※0.2			
SK-662	円形	1.24 1.11	1.15 1.03	0.08	0.4			
SK-663	不整形	3.25 0.81	3.34 0.57	0.65	0.4			
SK-664	不整形	3.10 3.00	1.46 1.41	0.08	0.8			
SK-665	楕円形	1.12 1.03	0.86 0.70	0.16	0.6	壁際に1本		

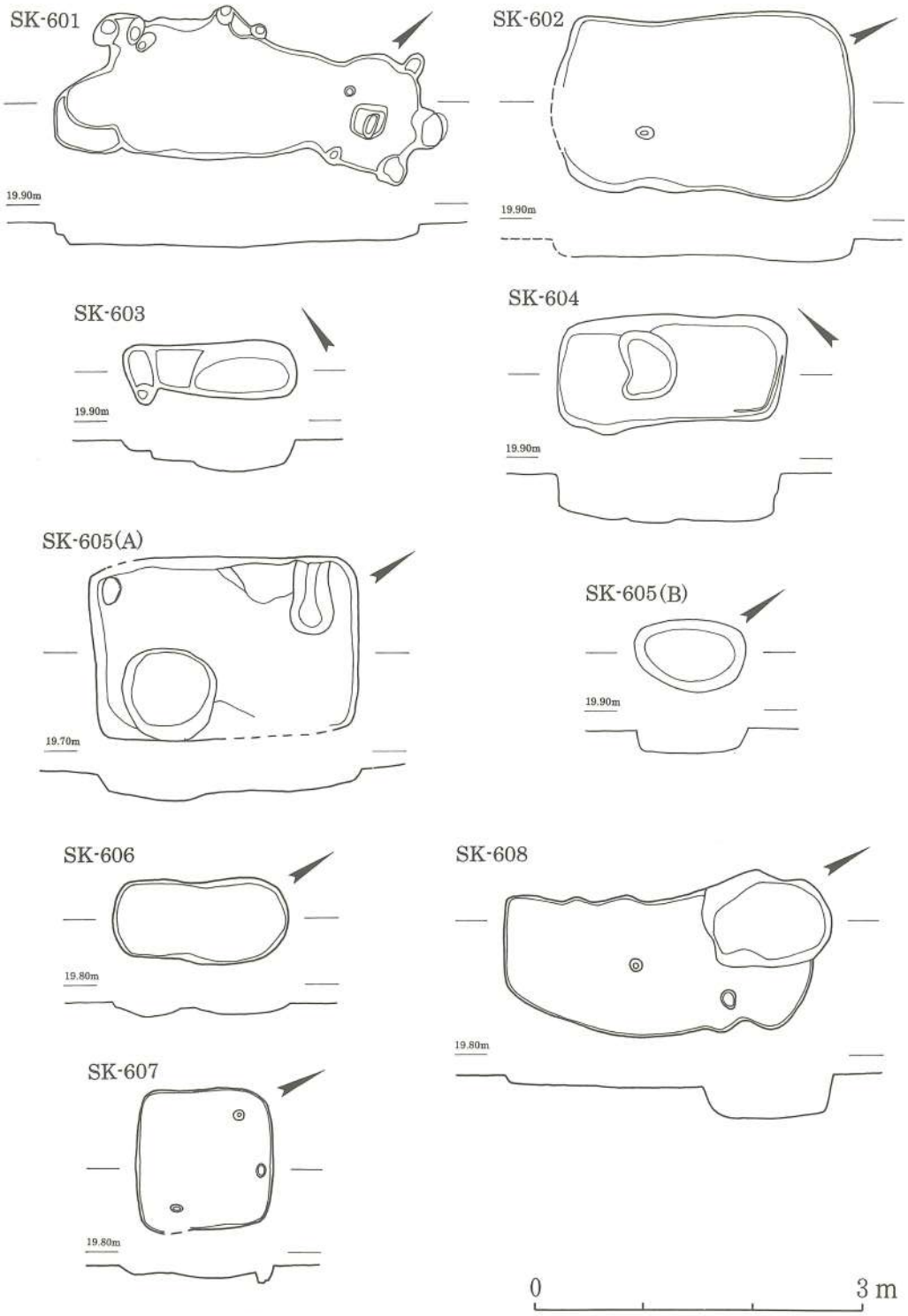


Fig. 9　船石遺跡 6 区土壙実測図(1)　SK-601～SK-608（1/60）

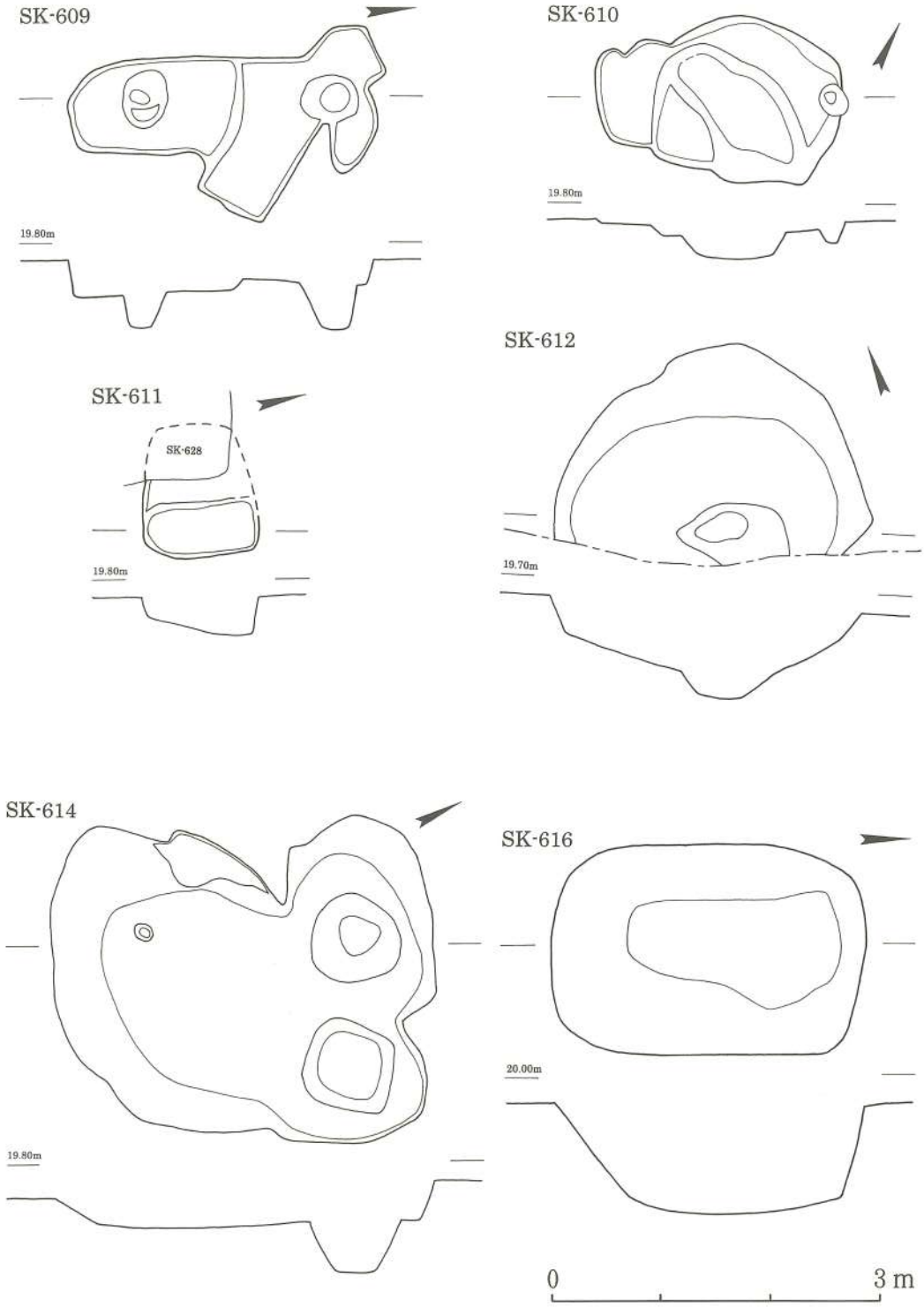


Fig.10　船石遺跡６区土壙実測図(2)　SK-609～SK-612・SK-614・SK-616（1/60）

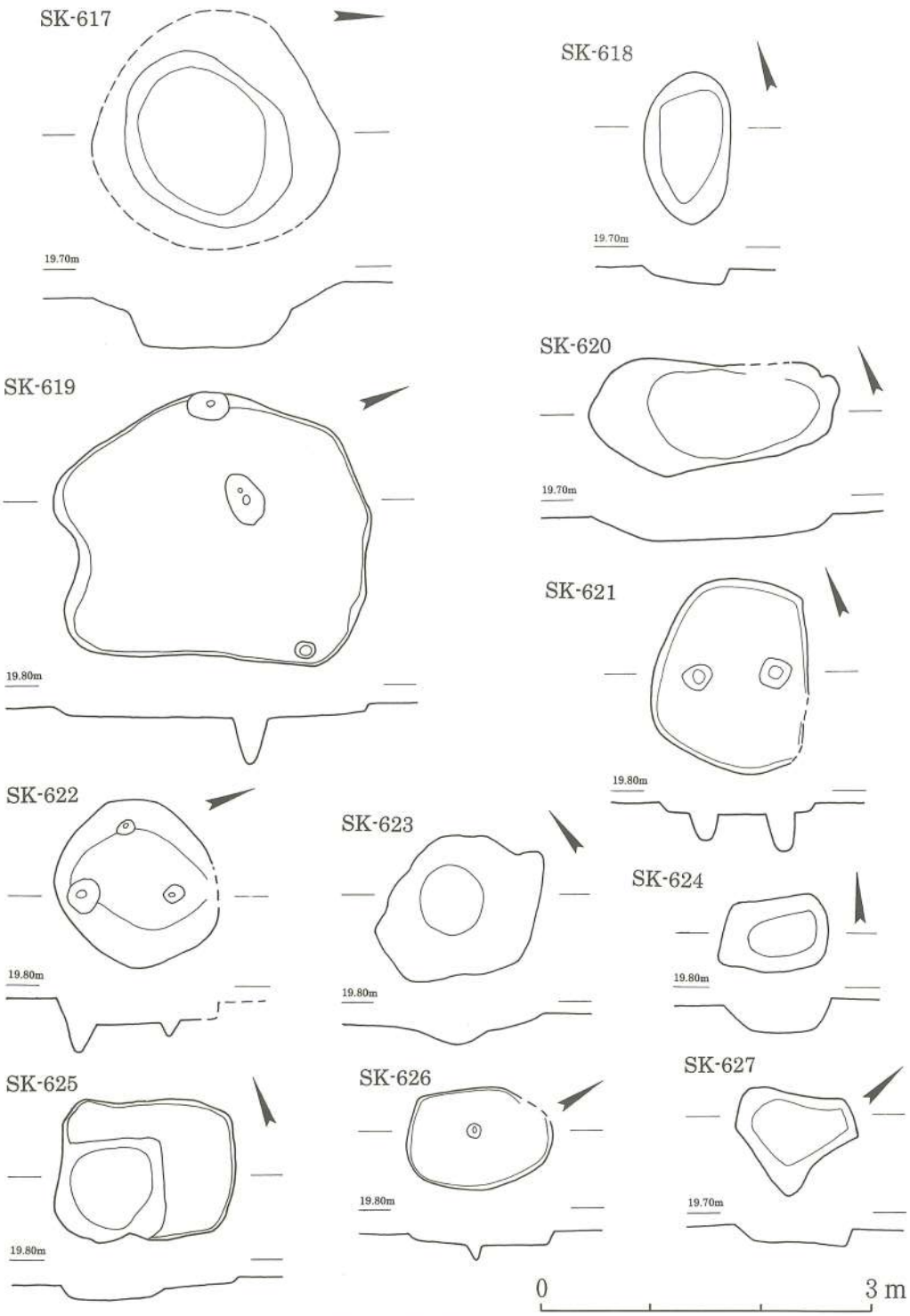


Fig.11　船石遺跡６区土壙実測図(3)　SK-617～SK-627（1/60）

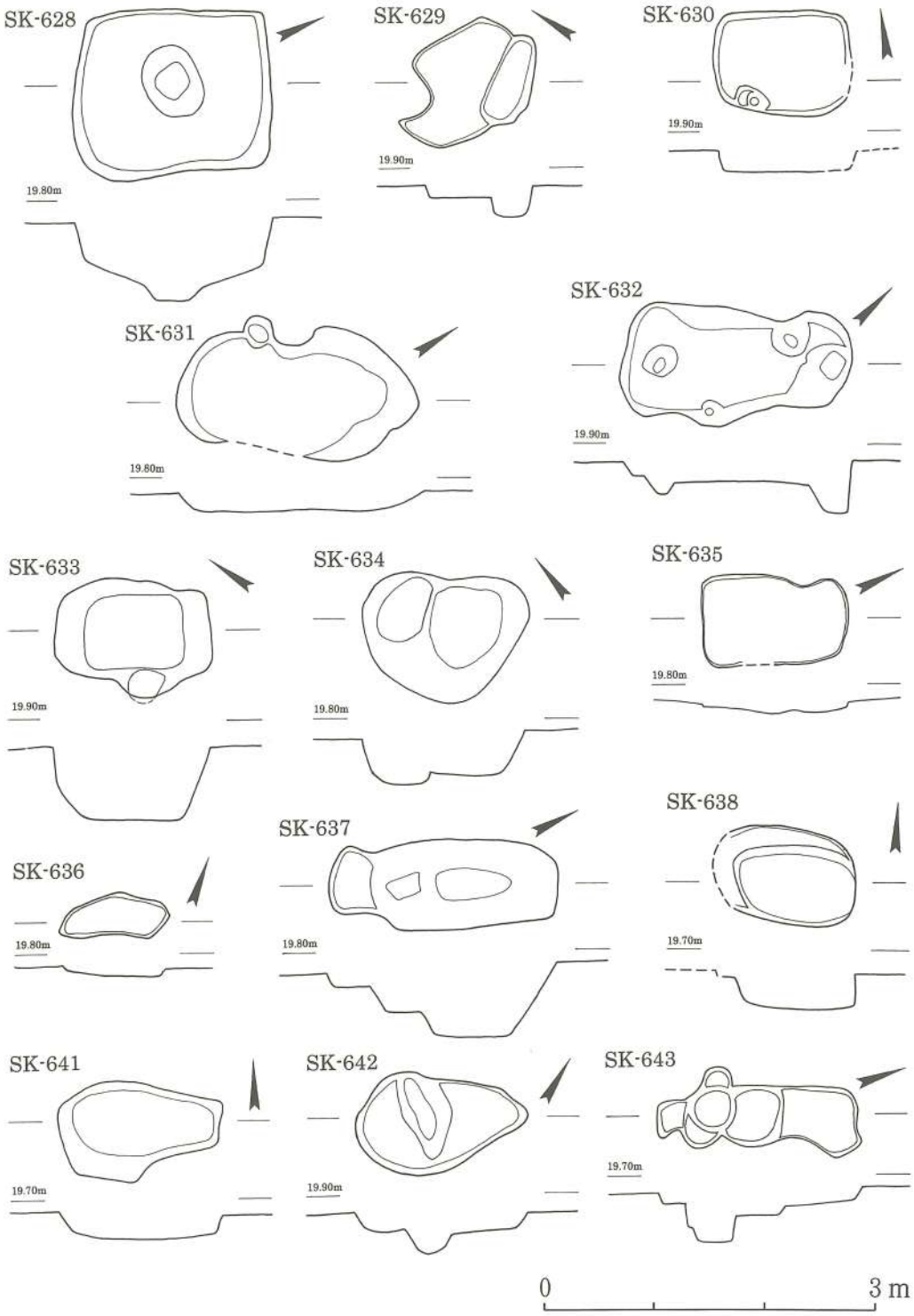


Fig.12　船石遺跡 6 区土壙実測図(4)　SK-628～SK-638・SK-641～SK-643（1/60）

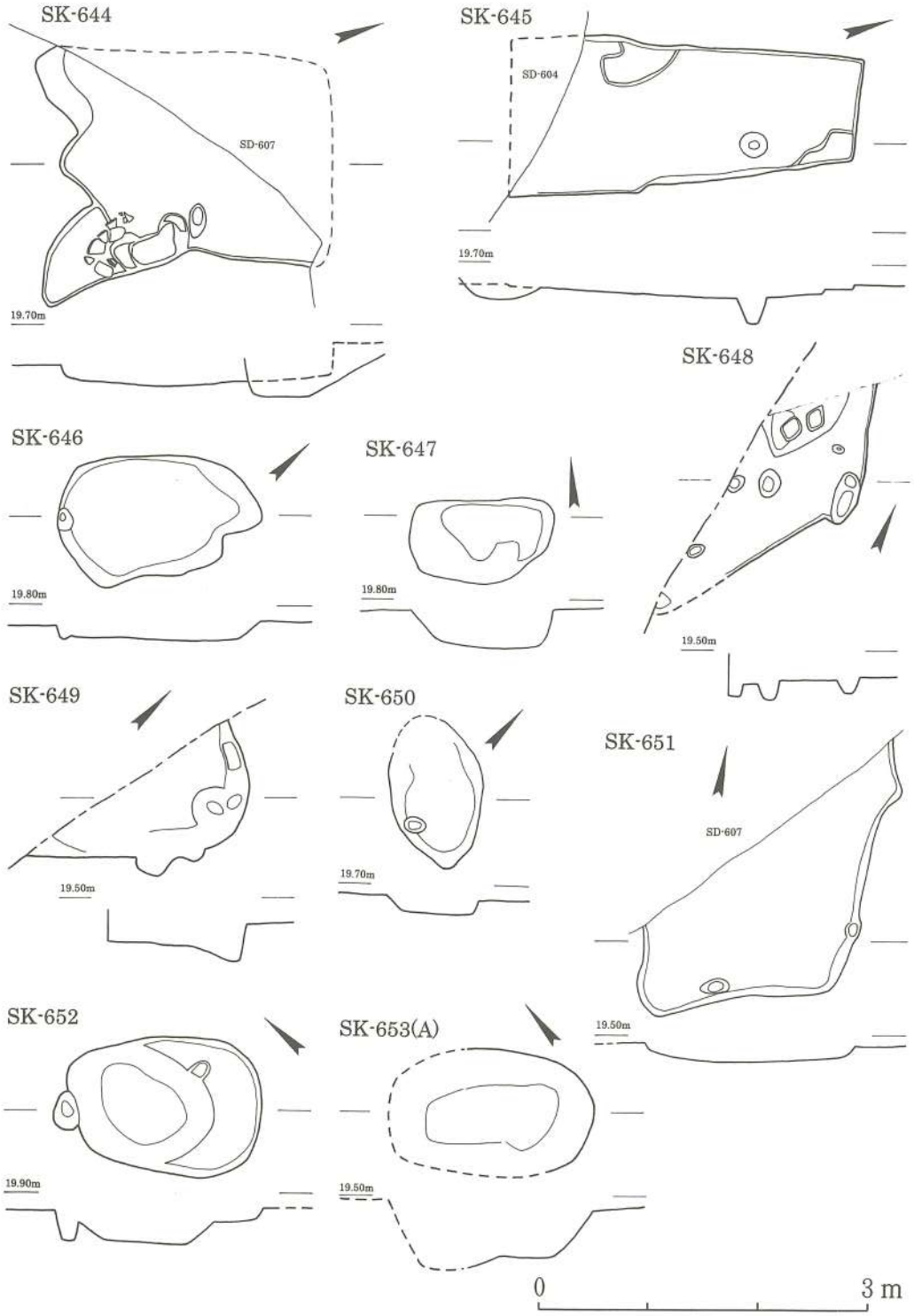


Fig.13　船石遺跡６区土壙実測図(5)　SK-644～SK-653(A)(1/60)

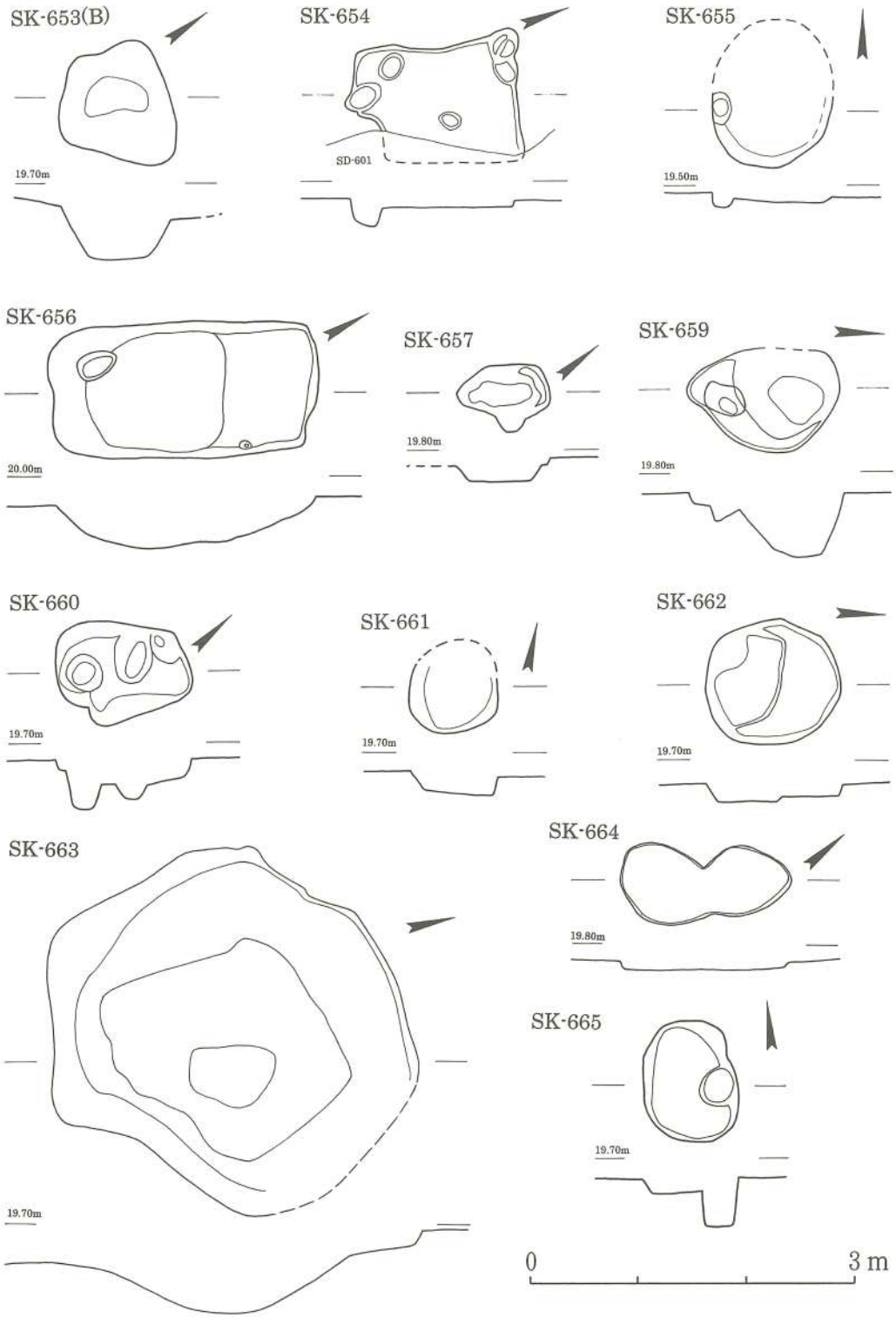


Fig.14　船石遺跡６区土壙実測図(6)　SK-653(B)～SK-657・SK-659～SK-665（1/60）

(4) その他の遺構（Fig. 4 , 15～17・PL. 2 ～ 4 ）

ここまでに報告した遺構のほかにも、今回の調査では性格不明の土壙状の掘り込み１基、溝跡３条などが検出され、遺構として調査を行ったが、それ以外にも多数のピットが検出されている。これらの中には、報告した建物以外にも建物柱穴などが存在する可能性が高い。とくにE- 4 Gr.から D- 5 Gr.にかけてピット群が北北東から南南西に向けほぼ直線状に検出されており、柵列かと思われる（PL. 2 参照）。

また、調査区北部の SD-610の北側分部に黒色土の自然堆積層が堆積しており、これを除去したところ、この区域から地山が北に向かって傾斜していることが判明した。（PL. 4 参照）

以下、性格不明遺構１基、溝跡３条について報告する。

性格不明遺構（Fig. 4 , 15・PL. 4 ）

SX-615として調査を行った遺構で、調査区南端部の D- 9 Gr.付近で検出された。東西約13m、南北約８ｍの不整な掘り方で、遺構の北側はやや浅く25㎝～30㎝で平坦に掘られているが南に突出した分部はさらに擂鉢状に50㎝程深く掘られており、湿潤で底面には木の根と思われる植物遺体が遺存していた。この遺構の東端から溝跡 SD-607が北東へ延びているが、溝内に割石が点在するなど、水を流していた可能性が高い。このようなことからこの SX-615は人工的な水路に続く「池」的施設と考えることもできよう。奈良期の土師器、須恵器が出土している。

溝跡（Fig. 4 , 16, 17・PL. 2 ～ 4 ）

溝跡はここに報告するものの他にも検出されたが、近世以降のものについては割愛しここでは、SD-601、SD-607、SD-610の３条について報告したい。なお、それぞれの溝跡からは、弥生式土器片、土師器・須恵器片、中世土器片、舶載青磁片など多様な遺物が出土しており時期は特定しがたいが、弥生時代の遺構を切っており、奈良時代以降の所産になるものと思われる。

SD-601（Fig. 4 , 16・PL. 3 ）

SD-601は、調査区西側の弥生時代の住居群とほぼ重なる位置で検出された溝跡で、調査区内を南北に縦長の数字の「９」の字形にめぐっている。北側の隅丸長方形の部分とそれから短く南に延び、そこで直角に西へ折れるカギ形の部分からなっている。北部の隅丸長方形の部分は、南北約29m、東西の幅が、北辺部分で約10m、南辺分部で約15mの範囲を一周している。各部分では、西辺の溝が立ち上がりもしっかりしており、幅約50㎝、深さ20㎝、北辺と南辺では幅が60㎝～70㎝とやや広がり掘り方もなだらかでやや浅くなる。これに対し東辺の溝は、幅が約1.5m、深さ10㎝となる。この隅丸長方形の南東隅から東辺の溝はさらに南へ約２ｍ延びここから西へ直角に折れ、幅約3.5mの溝となり西に行くに従って深さを増し、西端部分で約

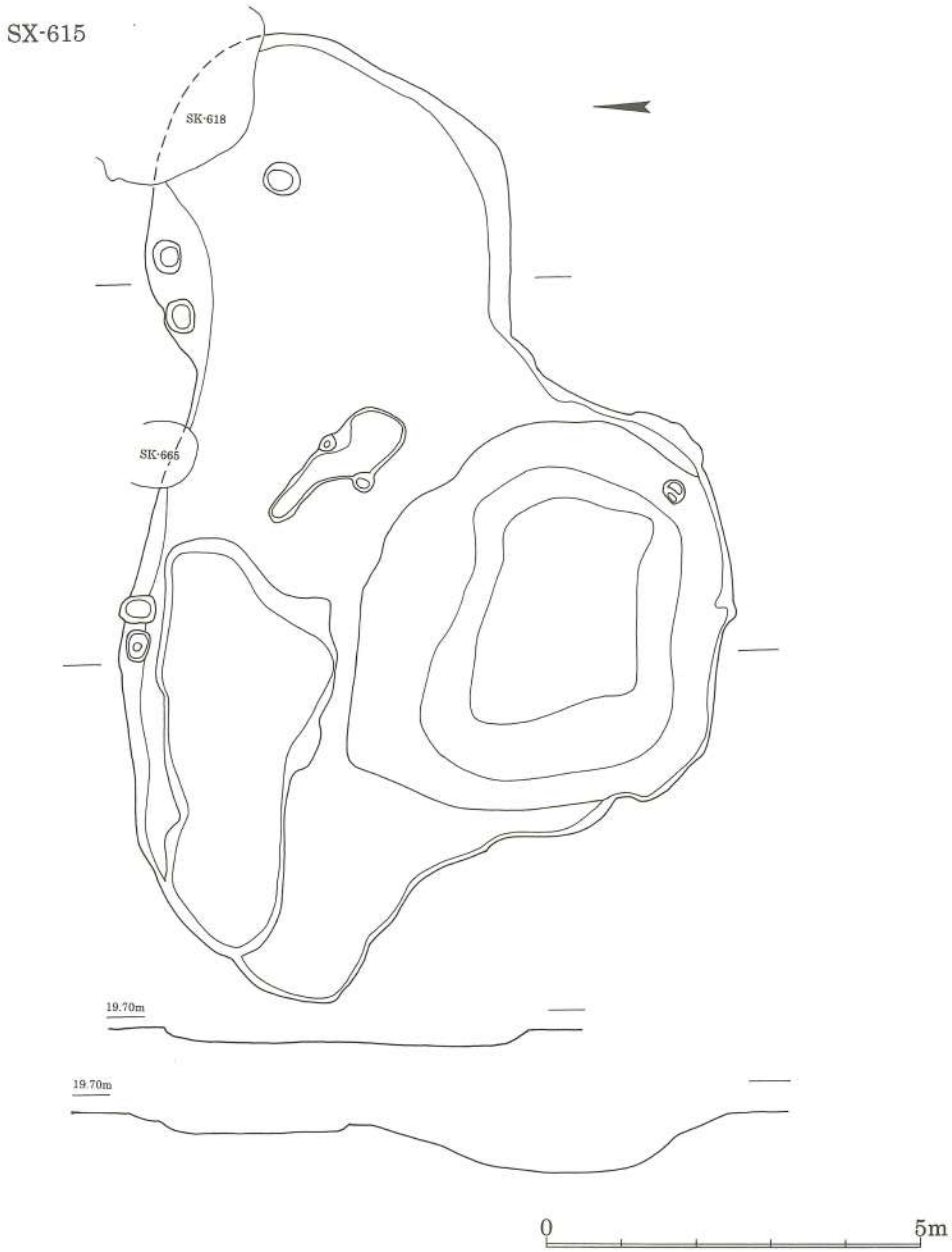


Fig.15　船石遺跡６区 SX-615実測図（１/100）

80cmとなる。区画のための溝かと考えられる。

SD-607（Fig. 4 , 17・PL. 4 ）

SD-607は、前述のように溝内に拳大から頭大の割石が点在している。溝の西端部はC- 9 Gr. S で X-615の東部に接して端を発し、B- 8 Gr.まで、緩やかに弧を描いて北東に伸びる溝で、延

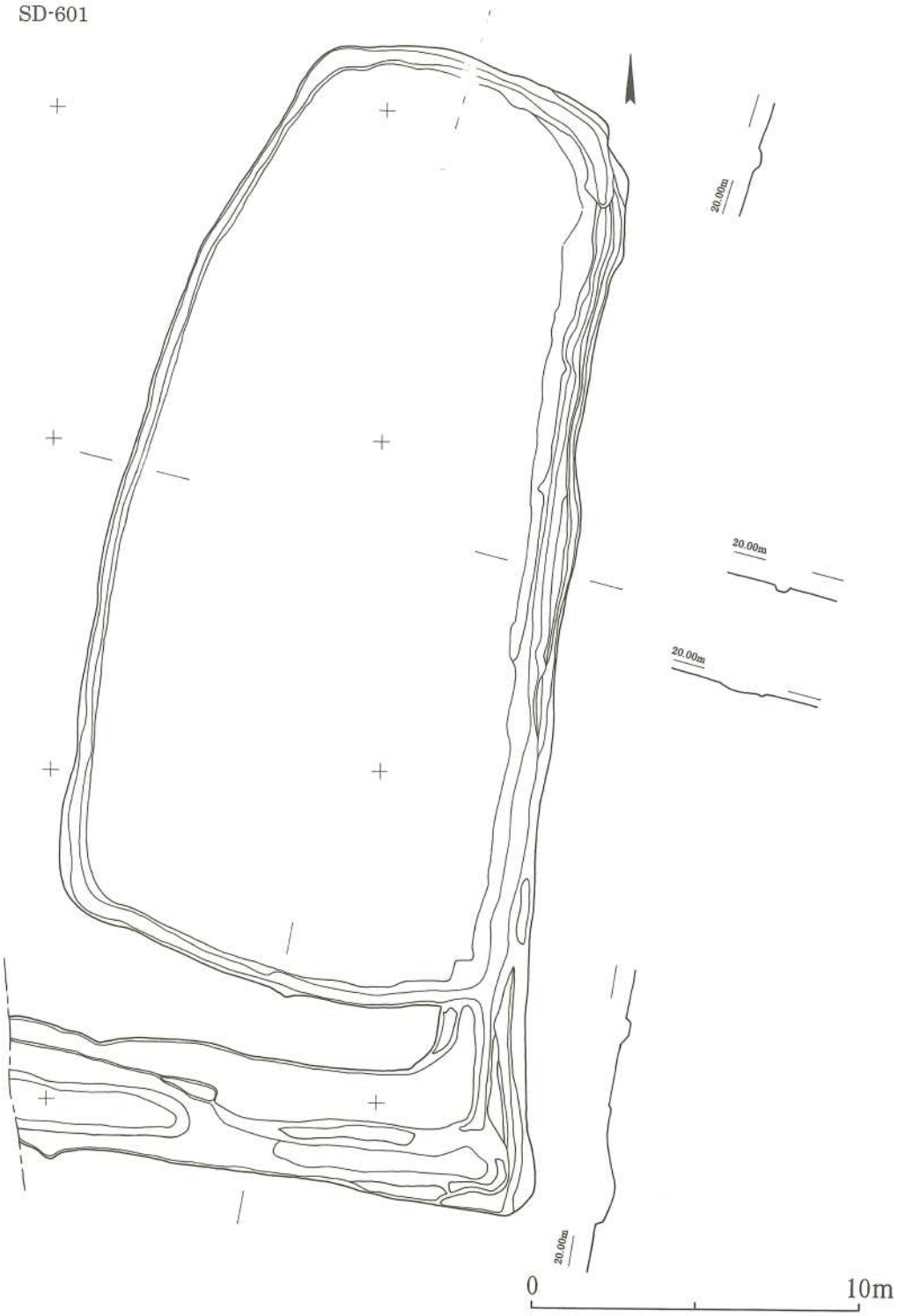


Fig.16　船石遺跡６区溝跡実測図(1)SD-601（１/200）

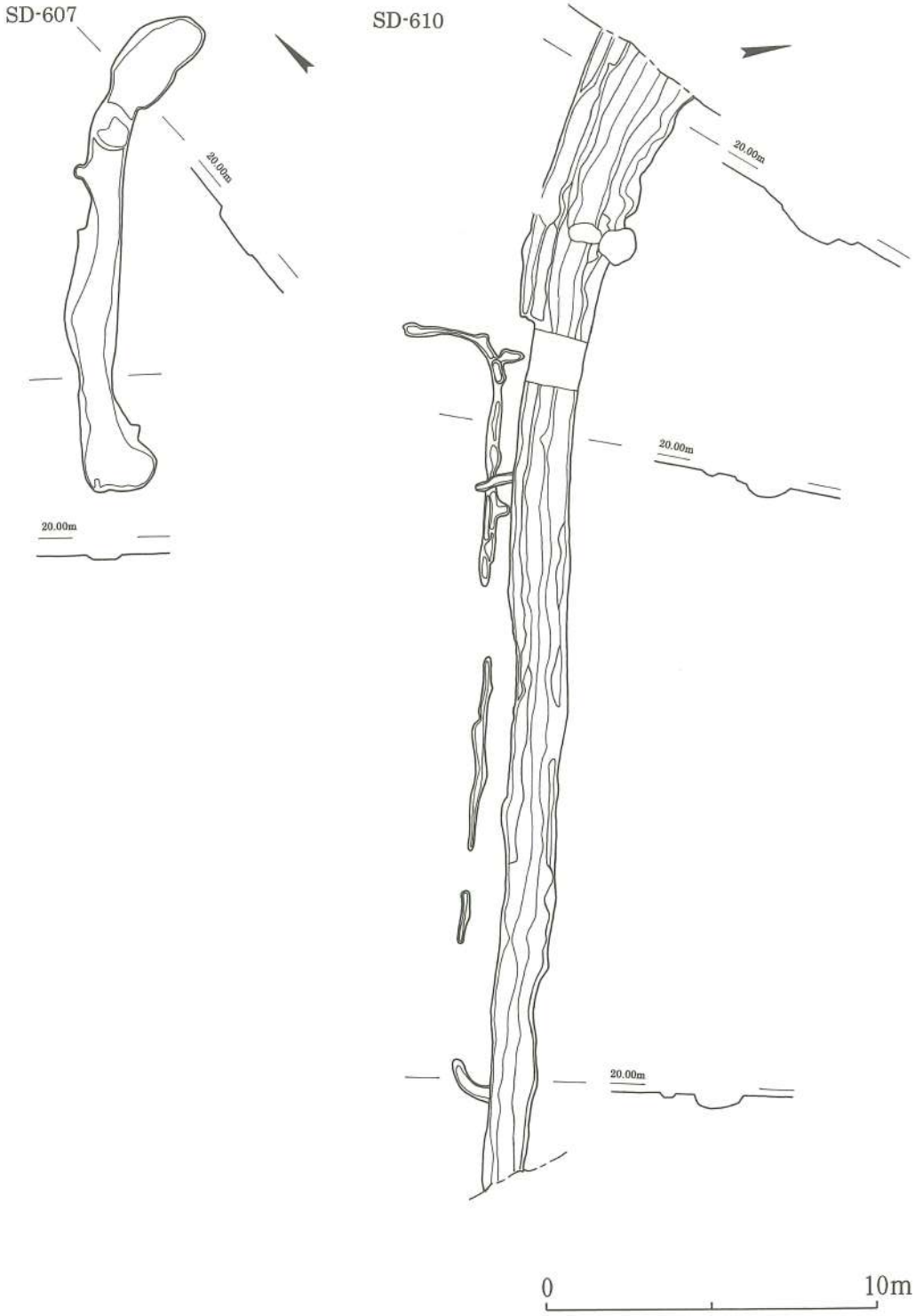


Fig.17　船石遺跡 6 区溝跡実測図(6)SD-607・SD-610（1/200）

長約15mが検出された。幅は、1.0m～2.0m、深さは10cm程度と浅い。

SD-610（Fig. 4 , 17・PL. 4 ）

SD-610は、B-3 Gr.南部からE-2 Gr.にかけて調査区北部をほぼ東西に横断する形で延長約35mが検出された。区画の目的で掘られたものと考えられる。掘り方もしっかりとしており、調査区東端分部で幅は1.2m、深さ50cm、西端部分で幅約3.1m、深さ70cmと西に向かっていくに従い、広く深くなっている。また、東端から約2.5m付近でこの溝と並行して走る小溝が始まり、20mほどこの2条の溝は断続的に並行し、さらに小溝は、ここで直角に折れ、南へ3mほど続き消滅する。小溝の幅は、20cm～40cm、深さは10cm～20cmである。

2．遺　物（Fig.18～33・PL.19～26・Tab. 5 ）

船石遺跡6区の調査では、これまで述べてきた各遺構から、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器はじめ、中世の土器などが出土し、これらに伴い少量ではあるが石器なども出土している。ここでは土器については、代表的なものを遺構ごとに、石器などについては、文末にまとめて報告する。

SH-601出土土器（Fig.18）

1～3は、いずれも弥生式土器。1は逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。2はやや厚手の逆「L」字形口縁をもつ鉢で、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。3は器台の裾部。内面ナデ、外面中位にハケ目。

SH-602出土土器（Fig.18）

4、5は、弥生式土器。4は器台の裾部。内外面ともにナデ。5は甕。逆「L」字形口縁を呈するが、口縁が上面が内側に傾斜している。内外面ともにナデ。

SH-603出土土器（Fig.18）

6～12は、いずれも弥生式土器。6は広口壺。胴部上位がすぼまり短い口縁が大きく外に開く。内外面ともにナデ。7～10は逆「L」字形口縁の甕。7～9、10は内外面ともにナデ。9は外面にハケ目。11は壺の胴部中位で最大径部分に断面が「m」字形に近い凸帯がめぐる。内外面ともにナデ。12は傘状の蓋の裾部。

SH-604出土土器（Fig.18, 19）

13～20は、いずれも弥生式土器。13、14、16は逆「L」字形口縁の甕で内外面ともにナデ。14は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。16は胴部が張りをもつ。15、17、18は壺で内外面ともにナデ。15は広口壺で短い口縁が大きく外に開く。17は口縁部が朝顔状に開く鋤形口縁の壺。内外面ともにナデ。18は壺の胴部中位で最大径部分よりやや上部に断面三角形の凸帯

が１条めぐる。19は器台の裾部。内面ナデ、外面ハケ目。20は傘状に開く蓋のつまみ部分。つまみ上面はやや窪みをもち、内面ナデ。外面ハケ目。

SH-605出土土器（Fig.19）

21～27は、いずれも弥生式土器。21～24は逆「L」字形口縁の甕。21、22は口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。25～26は壺。25は鋤形口縁をもつ口縁部。26は壺の胴部中位で最大径部分に断面が「m」字形に近い凸帯がめぐる。27は壺の胴部中位で最大径部分と肩部に断面が「m」字形に近い凸帯がそれぞれめぐる。いずれも内外面ともにナデ。

SH-606出土土器（Fig.19, 20・PL.19）

28～34は、いずれも弥生式土器。28～31は逆「L」字形口縁の甕。28、29は口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。30、31は内面ナデ、外面ハケ目。32は鋤形口縁の壺。丸味を帯びた肩部に朝顔状に開く口縁部がつく。内外面ともにナデ。33は器台裾部を欠く。受け部の開きは小さい。内面ナデ、外面ハケ目。34は蓋、つまみ上面は窪みをもち、体部は外反しながら開く内外面ナデ、つまみ付近にハケ目を残す。

SH-607出土土器（Fig.20）

35、36は弥生式土器。35は鋤形口縁の壺。内外面ともにはナデ。36は逆「L」字形口縁の甕。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-608出土土器（Fig.20・PL.19）

37、38は弥生式土器。37は壺の胴部下位。逆玉葱方を呈し最大形部分に断面三角形の凸帯が１条めぐる。内外面ともにはナデ。36は逆「L」字形口縁の甕。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-610出土土器（Fig.20・PL.19）

39～42は、いずれも弥生式土器。39～41は逆「L」字形口縁の甕。39は口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。42は壺の胴部下位。最大径部分に断面が「m」字形に近い凸帯がめぐる。内外面ともにナデ。内面の一部に指頭圧痕が残る。

SK-601出土土器（Fig.21・PL.19）

43～47は須恵器。43～46は高台坏。43はやや腰が張った体部が内湾しながら開き口縁端部が小さく外反する。底部外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がつく。44は体部が直線的に外傾し口縁に至る。底部外周にそって小さな高台がめぐる。45は腰が丸味をもつ体部が内湾しながら開き口縁端部が小さく外反する。底部外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がつく。46は大振りの坏で、碗に近い形態を呈す。体部はやや外反しながら開き、底部外周より内側に「ハ」の字形に開くしっかりした高台がつく。47は坏蓋。天井部は平坦で口縁端部が下方につままれている。

48～51は土師器。48、51は高坏。48は高坏脚部裾。内外目ともにナデ。51は坏部。体部は浅

く外反しながら開き口縁に至る。49は甕。胴部が上位でややくびれ口縁が外傾しながら開く。口縁部内面ハケ目、外面ナデ、胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケ目。50は甑？胴部上部に短く外傾する口縁がつく。遺存部は内外面ともにナデ。

SK-602出土土器（Fig.21・PL.19）

52、53は弥生式土器。52は器台裾部。内外面ともにナデ。53は逆「L」字形口縁の甕、内面ナデ、外面ハケ目。

SK-603出土土器（Fig.21, 22・PL.20）

54～61は、いずれも弥生式土器。54～56、60は逆「L」字形口縁の甕。54、55は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。57は小型土器。甕で内湾する口縁外側と口縁下部にそれぞれ断面三角形の凸帯がめぐる。内外面ともにナデ。58、59は口縁部が朝顔状に開く素口縁の壺。58は内外面ともにナデ。59は内面ナデ外面にハケ目を残す。61は逆「L」字形口縁の鉢。底部はやや上底で、内外面ともにナデ。

SK-604出土土器（Fig.22）

62、63は弥生式土器。62は甕。胴部下位に張りをもち、口縁はいったん横に開き端部が上方につままれている。内外面ともにナデ。胴部中位を欠き口縁部と底部は直接接合できなかったが同一個体と考えられる。63は逆「L」字形口縁の鉢、体部は半球形に近い形態を呈す。内外面ともにナデ。

64は中世土器。瓦質で肩が張り短いな口縁がやや内刑し立ち上がる。口縁内面ハケ目、他の部位はナデ。肩部に梅花形の陰花文をもつ。

SK-606出土土器（Fig.22, 23・PL.20）

65～70は、いずれも弥生式土器。65～68は逆「L」字形口縁の甕。66は口縁上面の平坦部が内傾する。68は胴部に張りがない。67は、外面にハケ目を残すが、他は内外面ともにナデ。69、70は朝顔状に開く口縁の壺。69は鋤形口縁、70は素口縁。69、70ともに内外面ナデ。

SK-607出土土器（Fig.23・PL.20）

71、72は、いずれも須恵器。71は高台坏。体部が直線的に外傾し口縁端部が小さく外反する。底部外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く小さな高台がつく。器面が摩滅し判読できないが、高台内に3文字のヘラ描きの文字をもつ。一文字目は形から「多？」とも見えるが、二文字目は不明、三文字目は「酒」、「洴」のような三水偏の文字。72は坏蓋。天井部はふくらみがなく平坦で、口縁部は玉縁状を呈し、つまみを失う。上面に二文字のヘラ描き文字を持つ。一文字目は「多」、二文字目は示偏または禾偏の文字と思われる。

SK-608出土土器（Fig.23, 24・PL.20, 21）

73～85は、いずれも弥生式土器。73～75は逆「L」字形口縁の甕。73は内外面ともにナデ。74は内面ナデ、外面ハケ目。75は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナ

デ。76は甕の底部。焼成後穿孔された内径８㎜ほどの小穴をもつ。77、78、80～82は壺77、78は素口縁、80は鋤形口縁、81は口縁が横に開き上面に平坦な面をもつ。82は逆玉葱方の胴部で最大径分部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。これらの壺はともに内外面ナデ。79は逆「L」字形口縁の鉢。口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。内外面ともにナデ。83は器台受け部と裾部が同程度に外反し開く。内外面ともにナデ。84は、馬上杯状の器で、一般的な高坏の坏部より丸味のある深めの体部に高坏様の脚がつく。内外面ともにナデ。85は蓋。内外面ともにナデ。

SK-609出土土器（Fig.24）

86～88は、いずれも須恵器の蓋。86は、小型の広口壺などの蓋。天井部は平坦で口縁は下方に向かってやや開き、端部が小さく外側につままれている。87、88は坏蓋。87は丸味のある体部がそのまま口縁に至る。88はやや深めの体部で、口縁端部は身の受けとするために下方へ鋭くつままれている。

SK-610出土土器（Fig.24, 25・PL.21）

89～100は、土師器、須恵器類。89～91、94は土師器の坏。89は厚手で、丸腰の体部がそのまま内湾しながら立ち上がり口縁に至る。90は丸底の浅い体部に外傾する短い口縁がつく。91は丸底で外傾する口縁がつく。94は平底の浅い皿、やや内湾する短い口縁をもつ。92、93、95は須恵器の坏。92、93はやや外反する口縁部。95は高台坏。やや腰が張った体部で口縁は直線的に開き端部で小さく外反する。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開くしっかりした高台がつく。96は須恵器の坏蓋。体部は浅く、口縁端部が下方につままれている。97、98は土師器の甕。97は胴部上位がくびれ、小さな口縁が外反しながら開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。98は胴部上位がそのまま朝顔状に大きく開き口縁となる。口縁部内面にハケ目を残し、胴部内面はヘラケズリ。外面はナデ。99、100は土師器の壺。99は広口壺で、やや内傾する短い口縁がつく。100は頚部画のくびれが顕著で、口縁は外反しながら開く。

SK-611出土土器（Fig.25・PL.21）

101～111は、いずれも弥生式土器。101～106は逆「L」字形口縁の甕。101は胴部がやや張りをもち口縁上面の平坦面が内傾する。内面ナデ、外面ハケ目。102は口縁がやや垂れ下がったもの。内面ナデ、外面ハケ目。103は内外面ともにナデ。104～106は口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。いずれの内外面ともにナデ。105は小ぶりで口縁部が内傾する。107は逆「L」字形口縁の鉢。口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。108、109は壺。108は朝顔状に開く素口縁をもつ。109は頚部で断面三角形の凸帯が１条めぐる。ともに内外面ナデ。110は蓋のつまみ部分。内面ナデ、外面ハケ目。111は、84と同様の杯？

SK-612出土土器（Fig.25, 26・PL.21, 22）

112～128は、いずれも須恵器。112～121は坏類。112、114～119は高台坏。122は焼きが悪く

土師質を呈す。底部外周に沿った位置に高台がつく。114、116～118は腰の張りが強く口縁はやや外反する。底面外周より内側に高台がつく。115は小ぶりで深めの体部をもつ。118は口縁が直線的に外傾し開く。120、121は坏。120はやや丸底の浅い体部に端部がやや外反し鋭く尖る口縁をもつ。底部外面に特徴ある筆致で書かれた「肥人」のヘラ描き文字をもつ。121はやや上底の浅い体部で口唇端部が小さく玉縁状につままれている。122は腰が張った高坏の坏部。123は、そば猪口形を呈し、平底の底部に直線的に外傾する口縁がつく。底面は糸切り後ナデ。124は円面硯。台部の破片が透かし2単位分遺存しており、硯の部分は失われている。透かしは縦3.5cm、幅1.2cm程の矩形を呈す125～127は蓋類。125は天井部が扁平でやや内湾し口縁に至る。126は、口縁端部が玉縁状につままれたもの。127は、天井部が高く擬宝珠状のつまみをもち、口縁端部が玉縁状をなす。128は甕の口縁部。口縁下部に波状の櫛目文がめぐる。

129～136は土師器の甕類。129、132は外反し開く口縁をもつ甕。129は内外面ともにナデ。132は内外面にハケ目。130、131、133、134、136は短い口縁が「く」の字形に開くもの。134は球形に近い丸底の胴部を持つ。

SK-614出土土器（Fig.27・PL.22,23）

137～141、154、155は土師器。137～141は坏。137、138、140は平底で体部は腰の張りが強く口縁端部が小さく外反する。140は120と同様、底面に特徴ある「肥」の文字の一部が残る。139は平底で口縁がやや内湾しながら立ち上がる。141は丸底で体部が内湾しながら立ち上がり口縁に至る。154、155は甕。154は口縁が外反し開く。155は口縁が小さく外傾する。

144～153は須恵器。142～146は坏。142は体部の腰が張り、口縁端部がやや外反する。143は平底でやや外反しながら開く口縁をもつ。144は体部の腰が張り、口縁端部は外傾しながら直線的に立ち上がる。145は高台坏。体部の腰は丸く口縁端部がやや外反する。146は平底で体部が深く口縁端部が小さく外反する。147～150は蓋。147～149は坏蓋。147は天井部がやや高く、扁平なつまみをもつ。口縁端部が下方につままれている。146は平坦な天井部をもちそのまま口縁に至る。151は壺などの蓋。149は甕の口縁で口縁下部に波状の櫛目文がめぐる。152、153は高坏。152は脚部裾。153は脚部裾が一旦開き端部が下方につままれている。

SK-617出土土器（Fig.27）

156、157は中世土器の土鍋。口縁外面に凸帯をめぐらす。156は内面にハケ目、外面ナデ。157は内外面ともにナデ。

SK-619出土土器（Fig.27・PL.23）

158は須恵器の高台坏。口縁部は直線的に外傾し開き端部が小さく外反する。

SK-620出土土器（Fig.28）

159は中世土器の土鍋。口縁外面に凸帯をめぐらす。内面ハケ目、外面ナデ。

SK-623出土土器（Fig.28・PL.23）

160は須恵器の高台坏。120、140と同様、底面に特徴ある「肥」のヘラ描き文字をもつ。

SK-625出土土器（Fig.28・PL.23）

161～163は須恵器。161は高台坏、口縁は直線的に外傾し、底面外周よりやや内側に鈍い「ハ」の字形の高台がつく。162、163は坏蓋。いずれも天井部は丸味を帯び口縁端部が斜め下方向に小さく折られている。

SK-629出土土器（Fig.28）

164は須恵器の高台坏。小ぶりで丸味を帯びる底部に断面三角形に近い高台がめぐる。

SK-631出土土器（Fig.28）

165は弥生式土器。逆「L」字形口縁の甕。

SK-632出土土器（Fig.28・PL.23, 24）

166～171は、いずれも弥生式土器。166～169は逆「L」字形口縁の甕。166、168は外面にハケ目、他は内外面ともにナデ。170は手捏ねのミニチュア。171は鋤形口縁の壺。内外面ともにナデ。

SK-633出土土器（Fig.28）

172～175は、いずれも弥生式土器。172、173は逆「L」字形口縁の甕。173は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。174は朝顔形に開く素口縁の壺。内外面ともにナデ。175は蓋。外面にハケ目。

SK-634出土土器（Fig.29・PL.24）

176～181は、いずれも弥生式土器。176～179は逆「L」字形口縁の甕。179は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。176は外面にハケ目、他は内外面ともにナデ。180は朝顔形に開く素口縁の壺。内外面ともにナデ。171は鋤形口縁の壺。内外面ともにナデ。

SK-635出土土器（Fig.29・PL.24）

183～185は、いずれも弥生式土器。183、184は逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。185は逆「L」字形口縁の鉢。内外面ともにナデ。

SK-637出土土器（Fig.29）

186～189は、いずれも弥生式土器。186、187は逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。188は朝顔形に開く素口縁の壺。内外面ともにナデ。189は鋤形口縁の壺。内外面ともにナデ。

SK-638出土土器（Fig.30）

190～192は、いずれも須恵器。190、191は高台坏。190は体部がやや深めで腰の張りが強く口縁は外傾しながら直線的に開く。底面外周より内側に「ハ」の字形に開く小さな高台がつく。191は体部の腰の張りが強く口縁は外傾しながら直線的に開く。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がつく。192は扁平な坏蓋、口縁端部が斜め下方向につままれている。

SK-638出土土器（Fig.30）

193～196は、いずれも弥生式土器。193～195は逆「L」字形口縁の甕。193、194は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。ともに内外面ナデ。196は器台裾部。内外面ともにナデ。

SK-644出土土器（Fig.30・PL.24）

197は中世土器の土鍋。口縁外面に凸帯をめぐらす。内面ハケ目、外面ナデ。

SK-646出土土器（Fig.30・PL.24）

198～200は、いずれも弥生式土器。198は蓋、陣笠状の器体に上面がくぼみ外に広がるつまみをもつ。内外面ともにナデ、つまみ部分にハケ目。199～200は逆「L」字形口縁の甕。ともに内外面ナデ。

SK-650出土土器（Fig.30）

201、202は、弥生式土器。201は逆「L」字形口縁の甕で口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。196は器台裾部。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-651出土土器（Fig.30, 31・PL.24）

203～207は、いずれも弥生式土器。203～206は逆「L」字形口縁の甕。203、204は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。206外面にハケ目。他はともに内外面ナデ。207は器台裾部。内外面ともにナデ。

SK-652出土土器（Fig.31, 32・PL.24, 25）

208～219は、いずれも弥生式土器。208～215は逆「L」字形口縁の甕。213～215は口縁上面の平坦面が内径し、頸部は「く」の字形に近い形態を呈す。208～210、213、214は外面にハケ目。他はともに内外面ナデ。216は朝顔状に開く素口縁の壺。内外面ともにナデ。217～219は器台。いずれも鼓形を呈し、217、219は外面にハケ目、他はともにナデ。

SK-653出土土器（Fig.32）

220～224は、いずれも弥生式土器。220～223は逆「L」字形口縁の甕。220は口縁上面の平坦面が内径し、頸部は「く」の字形に近い形態を呈す。222、223は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。221は外面にハケ目。他は内外面ともにナデ。224は蓋。体部は外反しながら傘状に開く。つまみの頂上分部を欠く。内外面ともにナデ。

SK-654出土土器（Fig.33・PL.25）

225～227は、いずれも弥生式土器。225は逆「L」字形口縁の甕。内面ナデ、外面ハケ目。226、227は器台。いずれも鼓形を呈し、内外面ともにナデ。

SK-655出土土器（Fig.33）

228は弥生式土器。逆「L」字形口縁の甕で内面ナデ、外面ハケ目。

SK-656出土土器（Fig.33・PL.25）

229は弥生式土器。逆「L」字形口縁の甕で口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-657出土土器（Fig.33）

230は弥生式土器の器台。内面ナデ、外面ハケ目。

SX-615出土土器（Fig.33・PL.26）

231～236は須恵器。213は高台坏。口縁は外傾しながら直線的に開く。底面外周のやや内側に鈍い高台がつく。232～236は坏蓋。232、234は天井部が丸味をもち口縁端部が小さく下方につままれている。232は擬宝珠状の、234は扁平なつまみがつく。233は遺存部に「多」のヘラ描き文字をもつ。235は扁平な蓋。

237、238は土師器の甕。237は内面ヘラケズリ、外面ハケ目。238は内外面ともにナデ。

船石遺跡6区出土土製品・石器（PL.27）

土弾（PL.27-1左）

長さ3.6cm、直径2.1cm。ラグビーボール形を呈す。SH-606出土。

抉り入り片刃石斧（PL.27-1中央）

長さ2.6cm、幅2.7cm、高さ2.7cm。断面は長方形を呈す。磨耗が激しく、刃部をはじめとして、それぞれの角は取れ、稜を失っている、写真左側辺に抉りをもつ。砂岩質の石材が使用されている。SH-604出土。

石槍（PL.27-1右）

打製の石槍で基部のみが遺存する。遺存部の法量は、長さ9.6cm、幅4.3cm、厚さ0.6cm。断面は凸レンズ形を呈す。サヌカイト製。SH-601出土。

石鏃（PL.27-2右上）

黒曜石製の凹基式石鏃。長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm。SK-601出土。

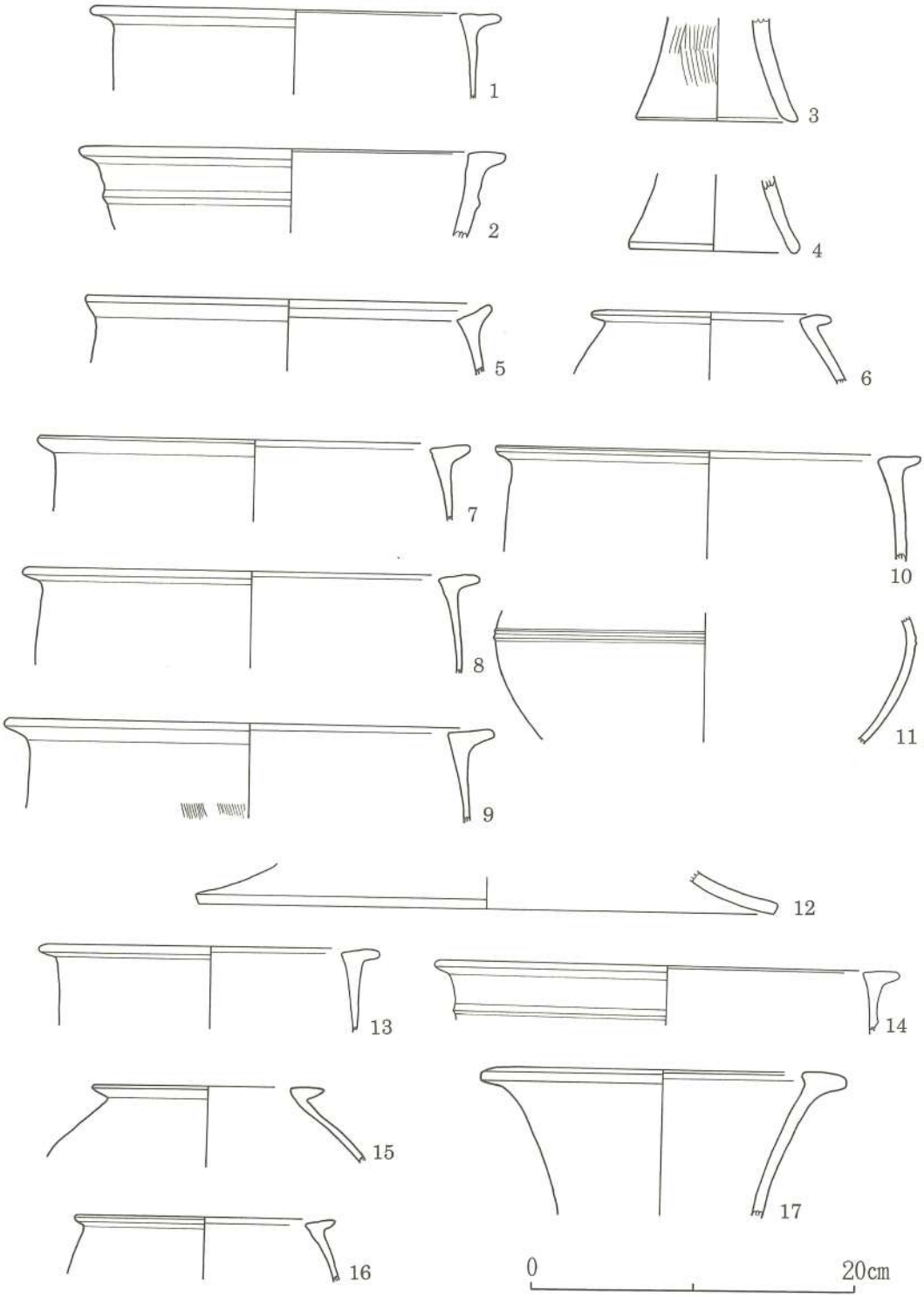


Fig.18　船石遺跡６区出土遺物実測図(1)（１/４）

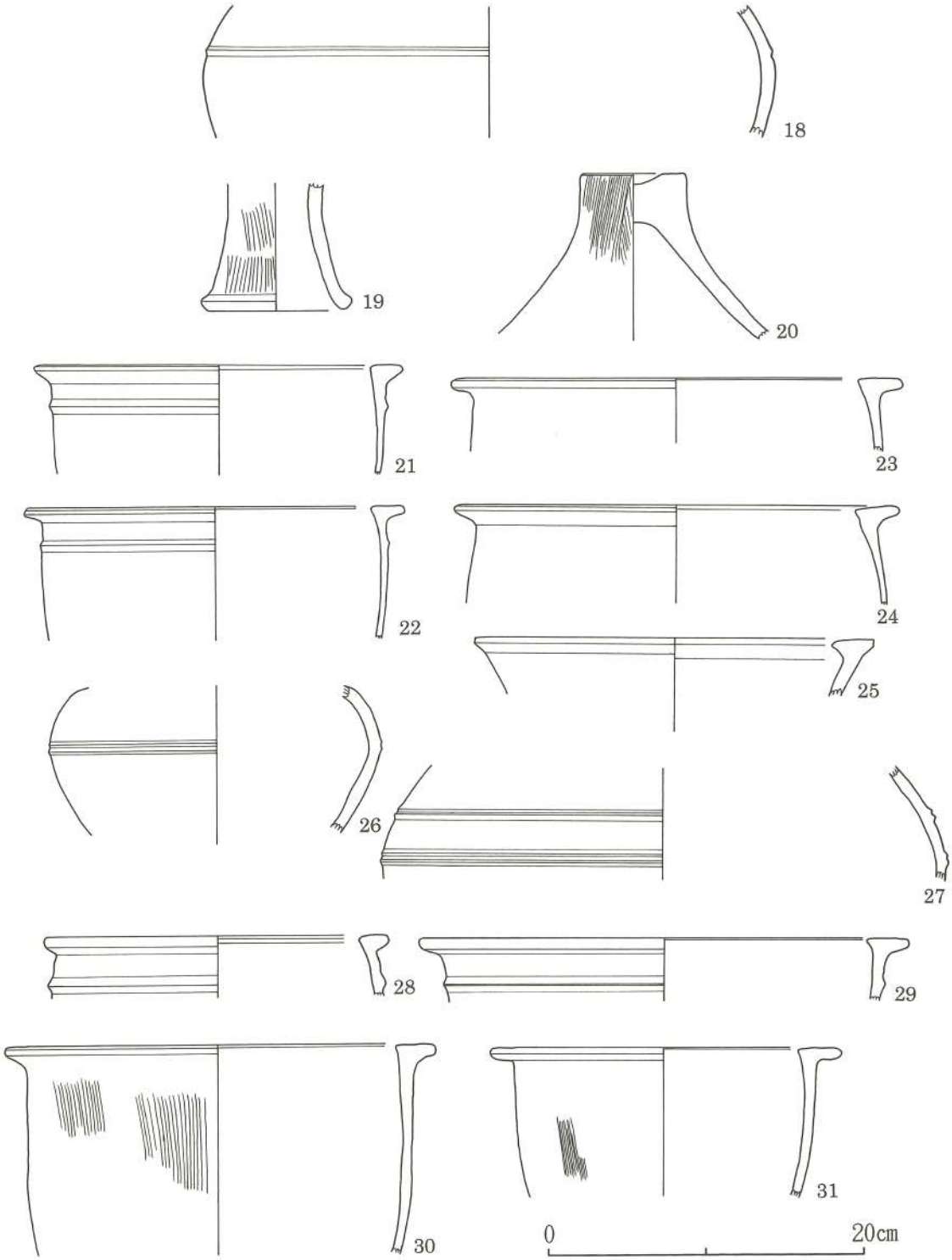


Fig.19　船石遺跡６区出土遺物実測図(2)（１/４）

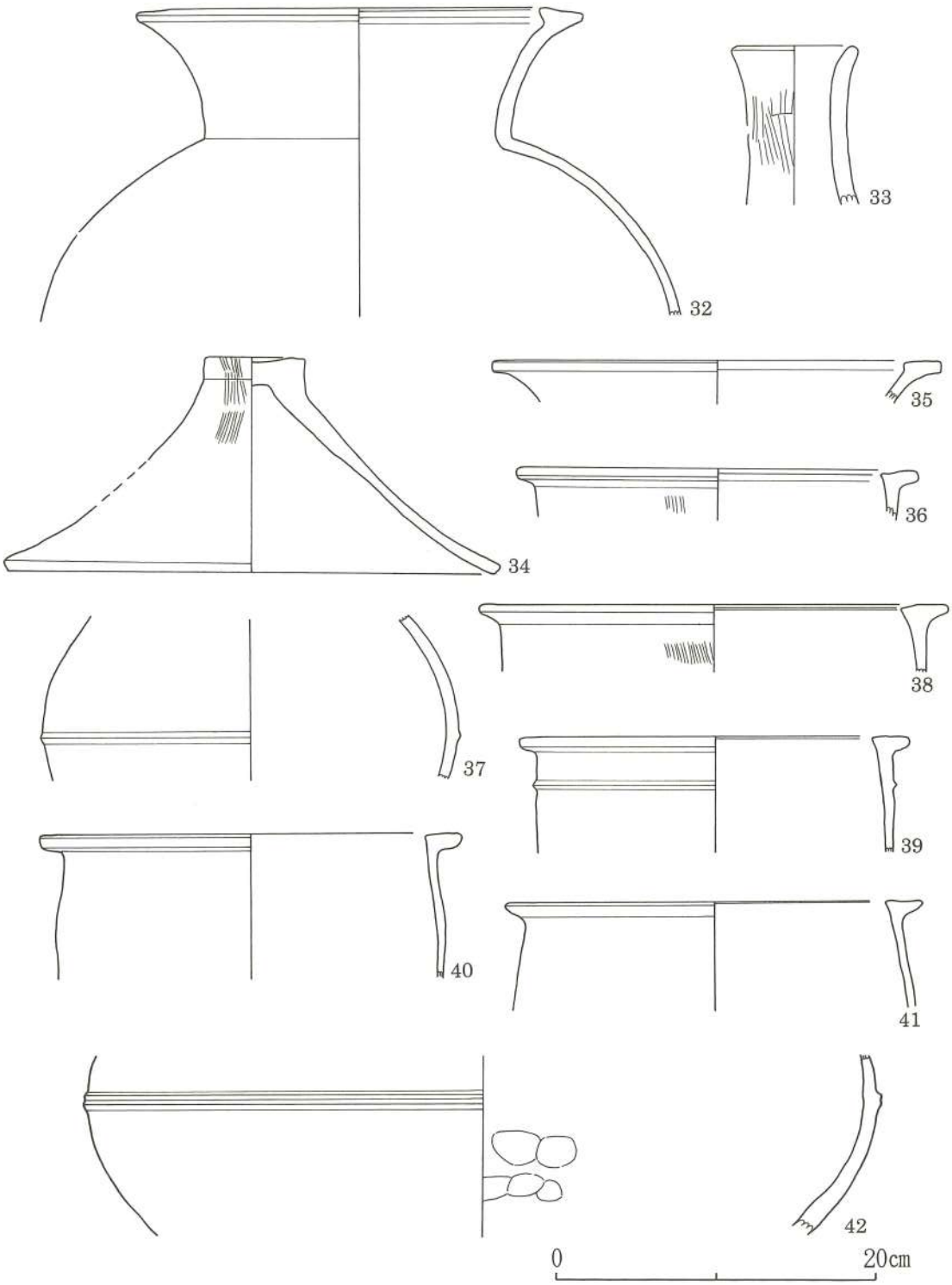


Fig.20　船石遺跡 6 区出土遺物実測図(3)（1／4）

Fig.21　船石遺跡６区出土遺物実測図(4)（１/４）

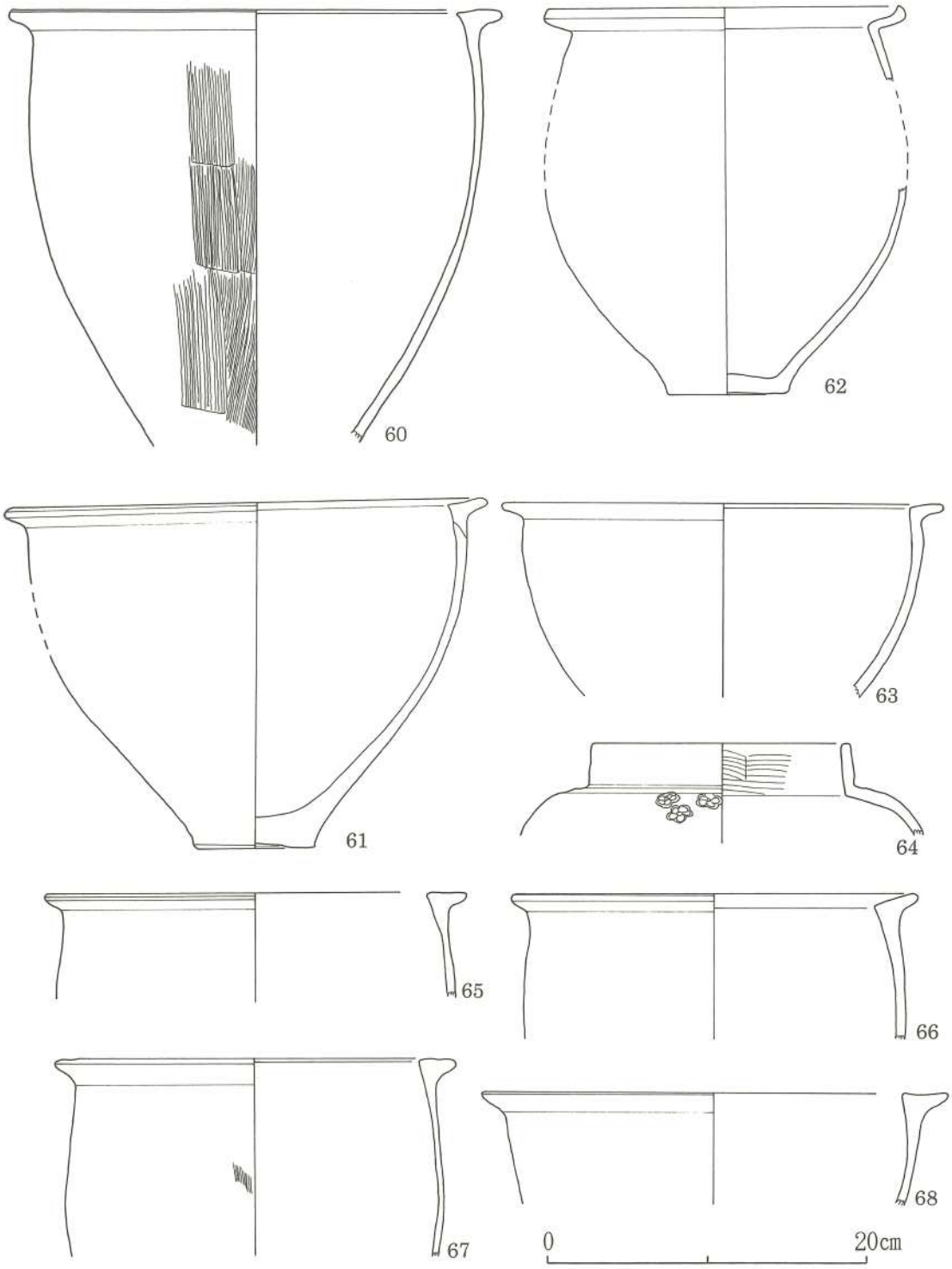


Fig.22　船石遺跡６区出土遺物実測図(5)（１/４）

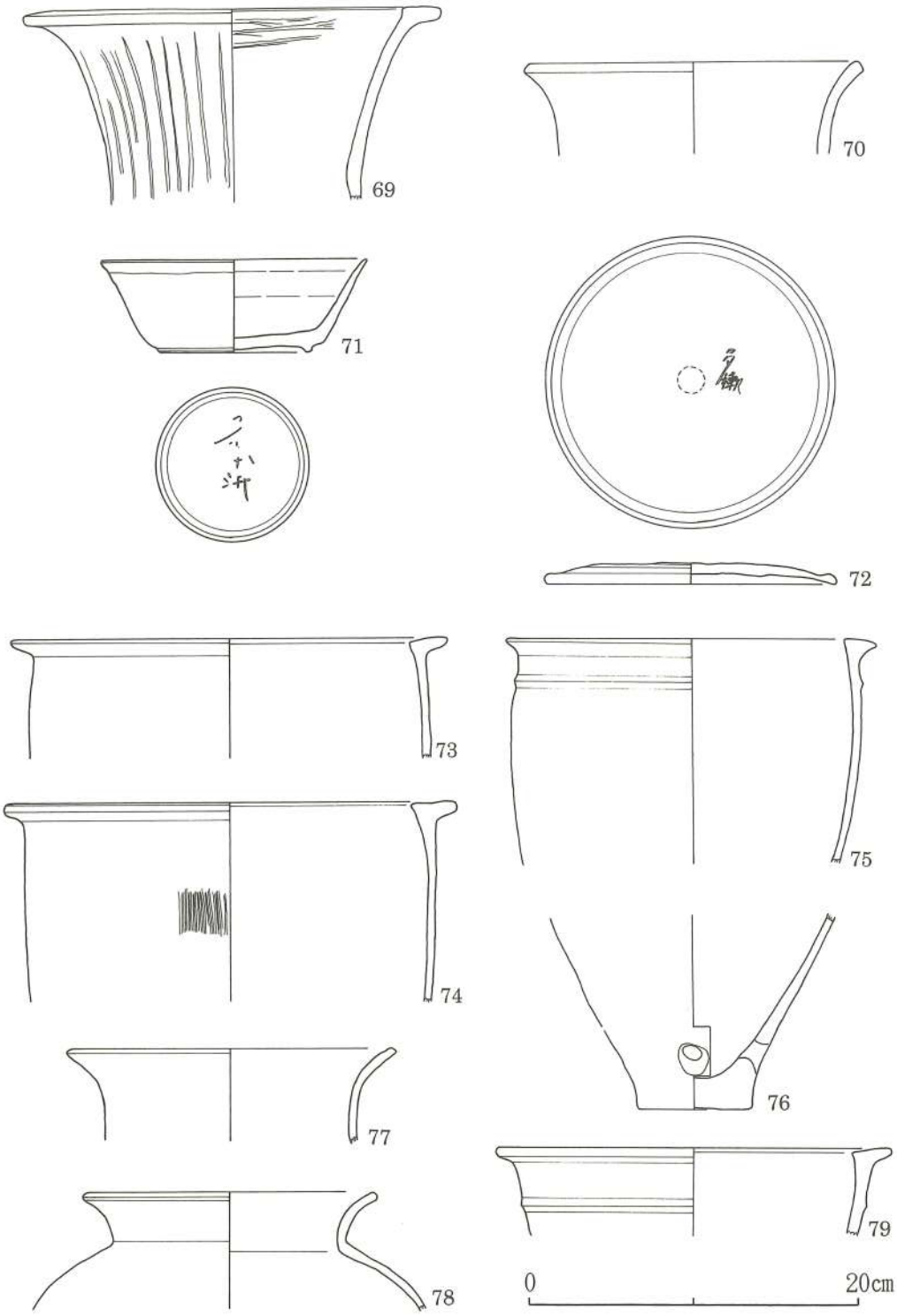


Fig.23　船石遺跡６区出土遺物実測図(6)（１/４）

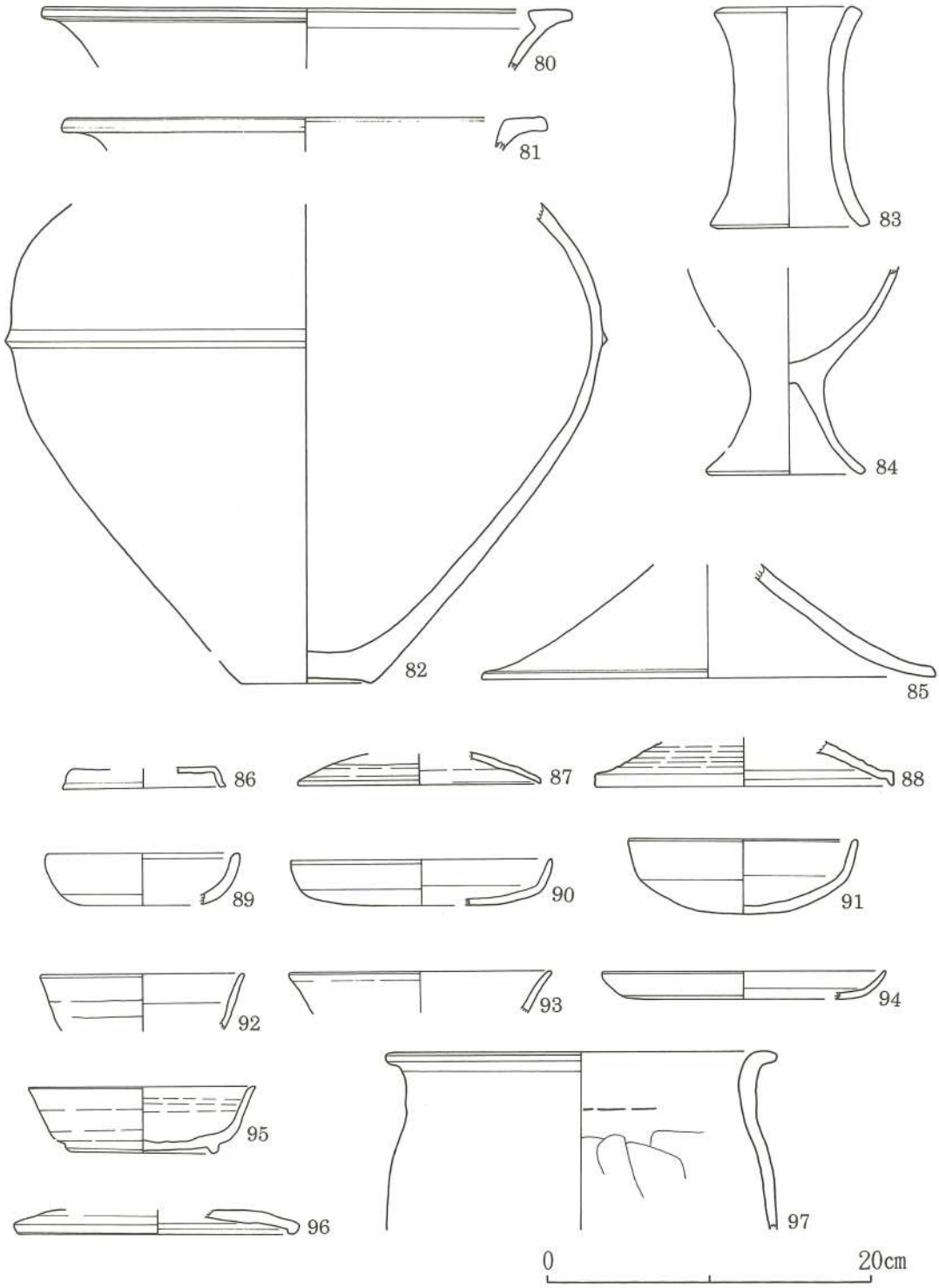


Fig.24　船石遺跡 6 区出土遺物実測図(7)（1 / 4）

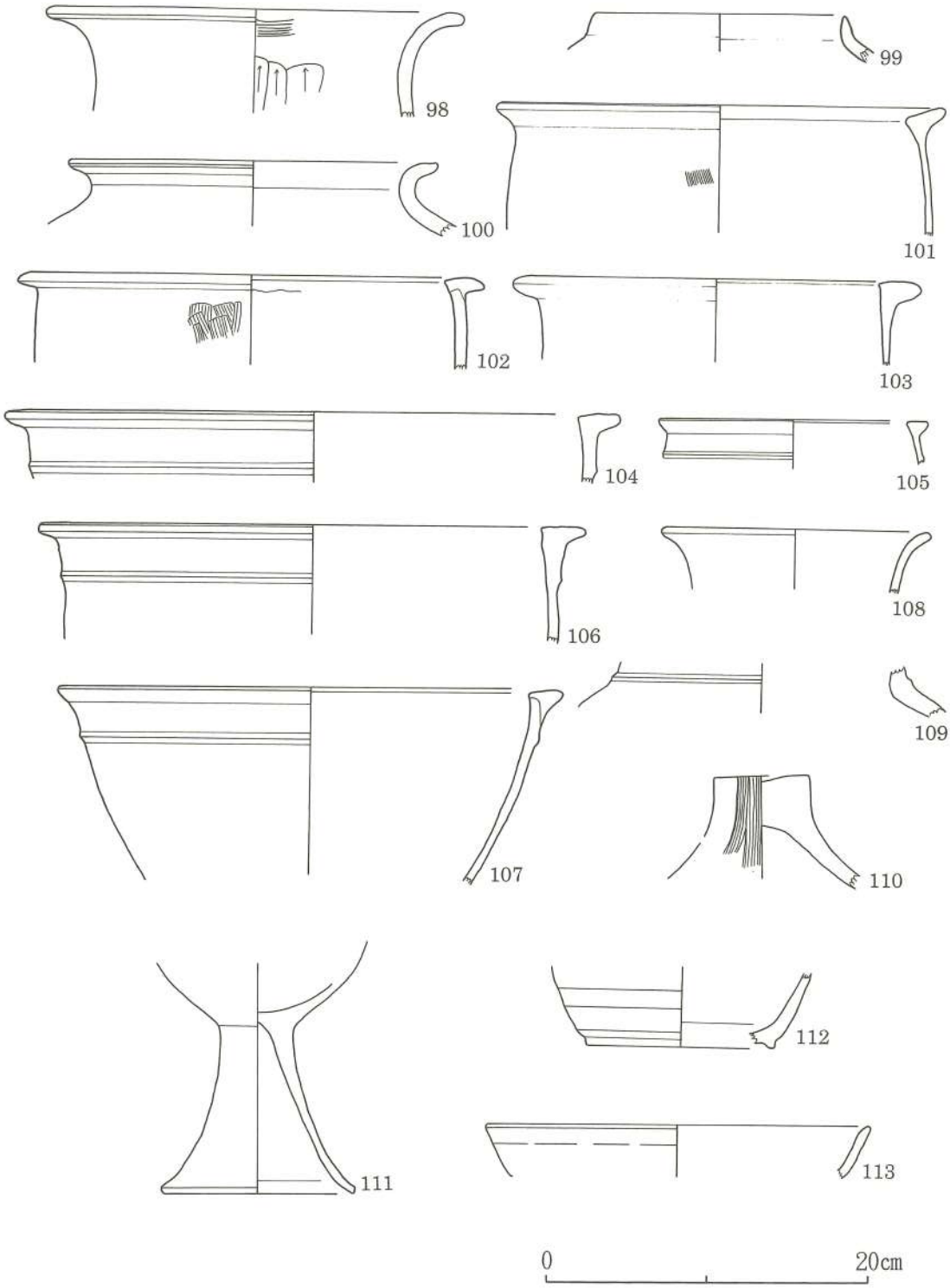


Fig.25　船石遺跡６区出土遺物実測図(8)（１/４）

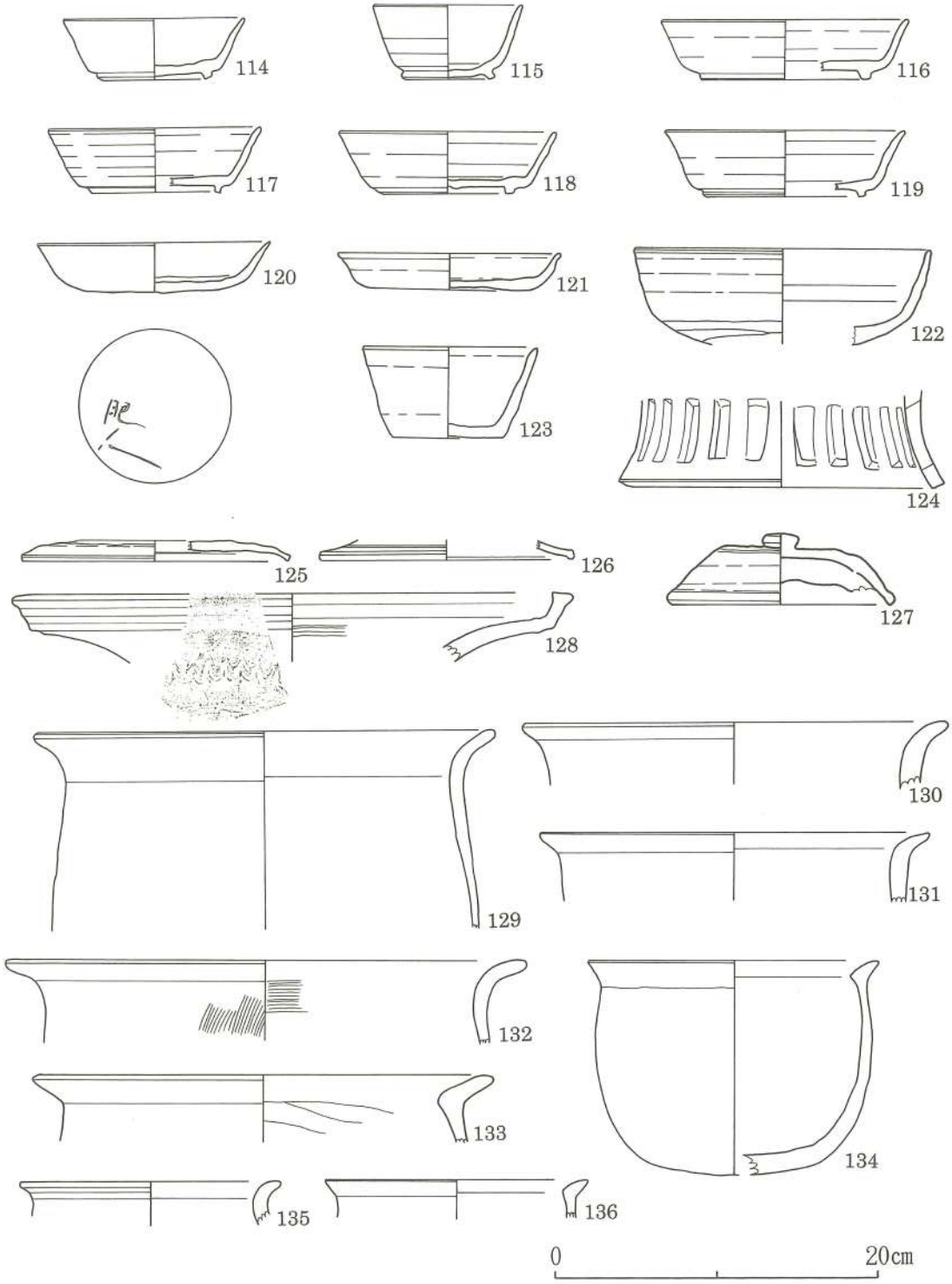


Fig.26　船石遺跡６区出土遺物実測図(9)（１/４）

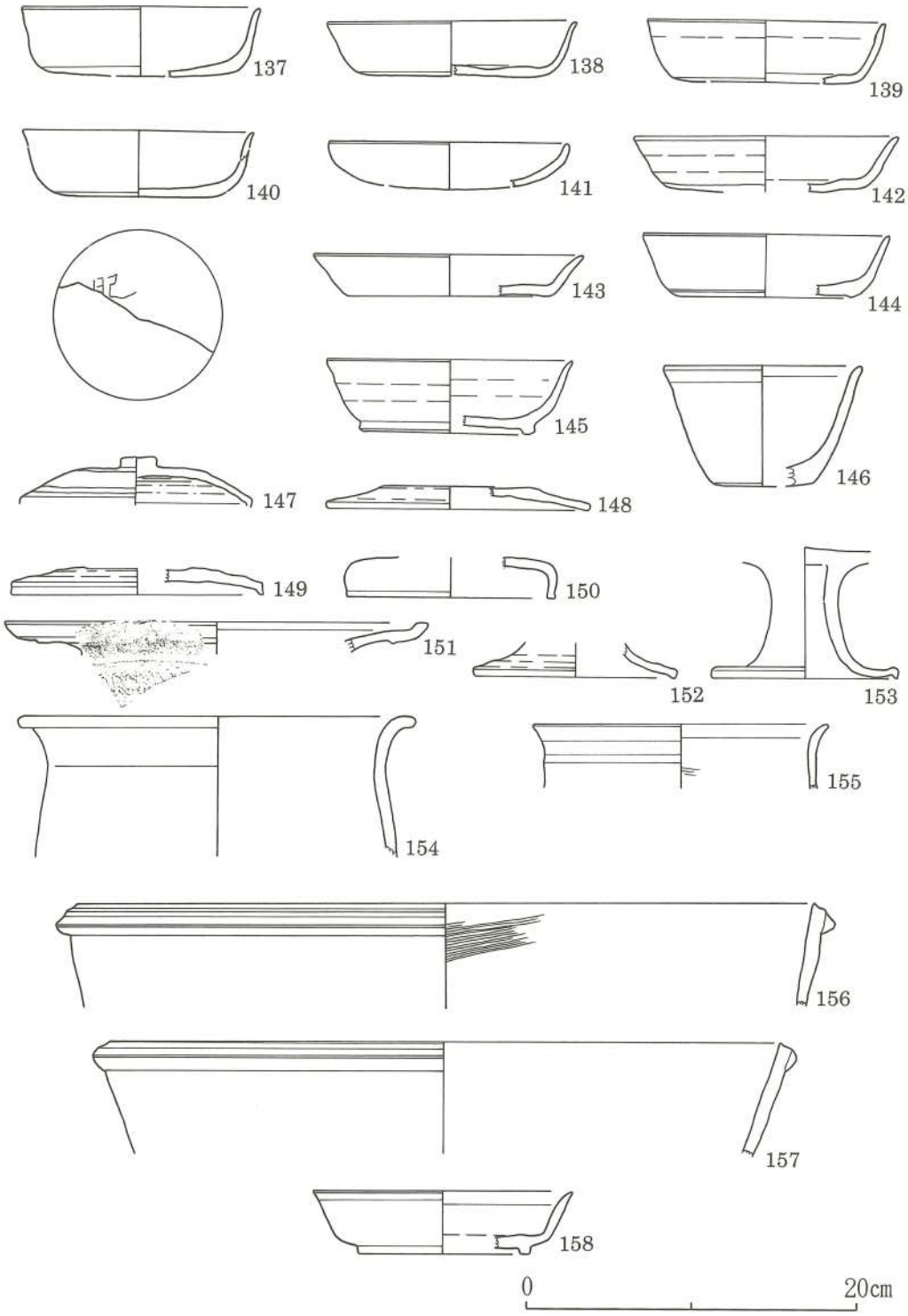


Fig.27　船石遺跡 6 区出土遺物実測図(10)（1／4）

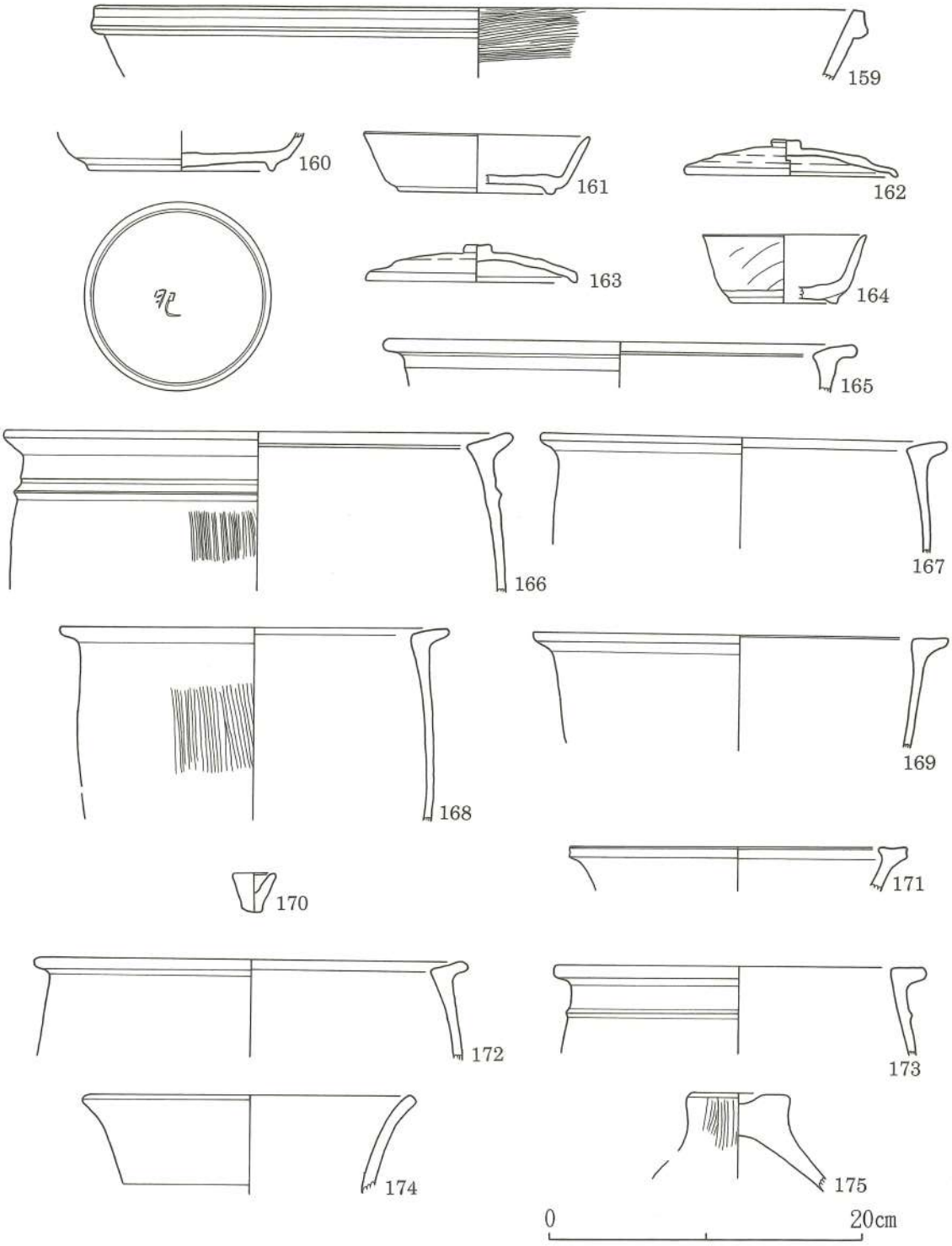


Fig.28　船石遺跡６区出土遺物実測図(11)（１/４）

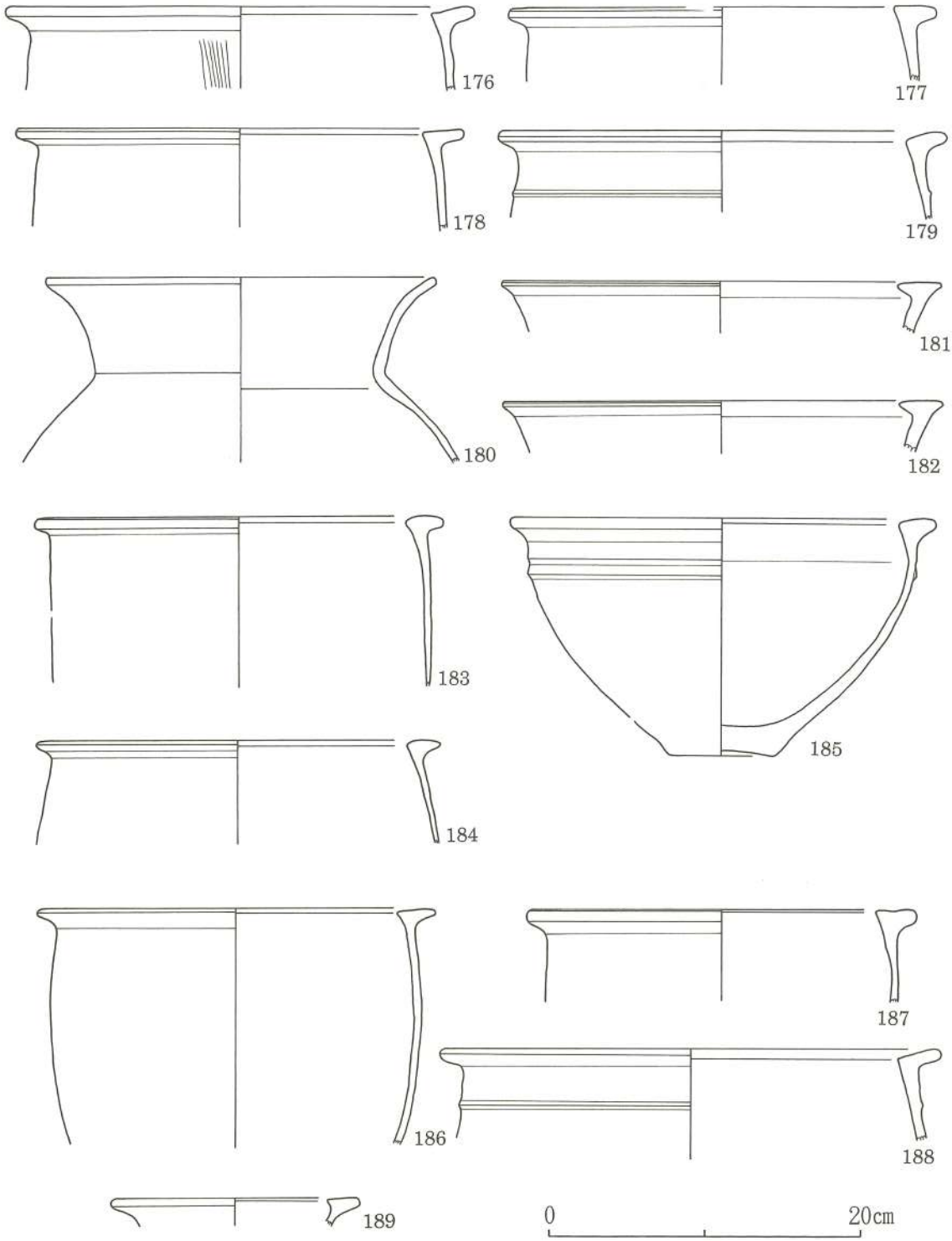


Fig.29　船石遺跡 6 区出土遺物実測図(12)（1 / 4）

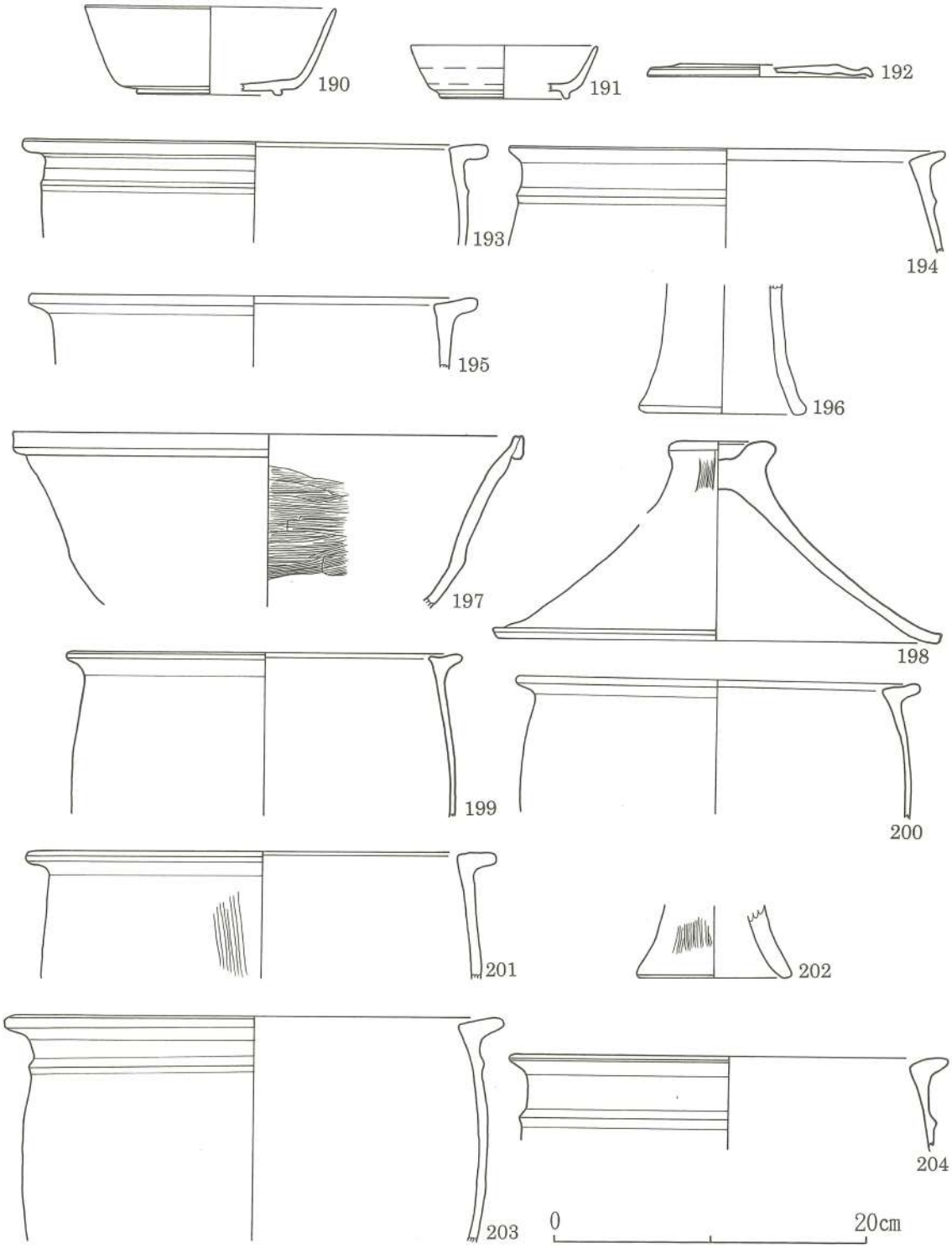


Fig.30　船石遺跡６区出土遺物実測図(13)（１/４）

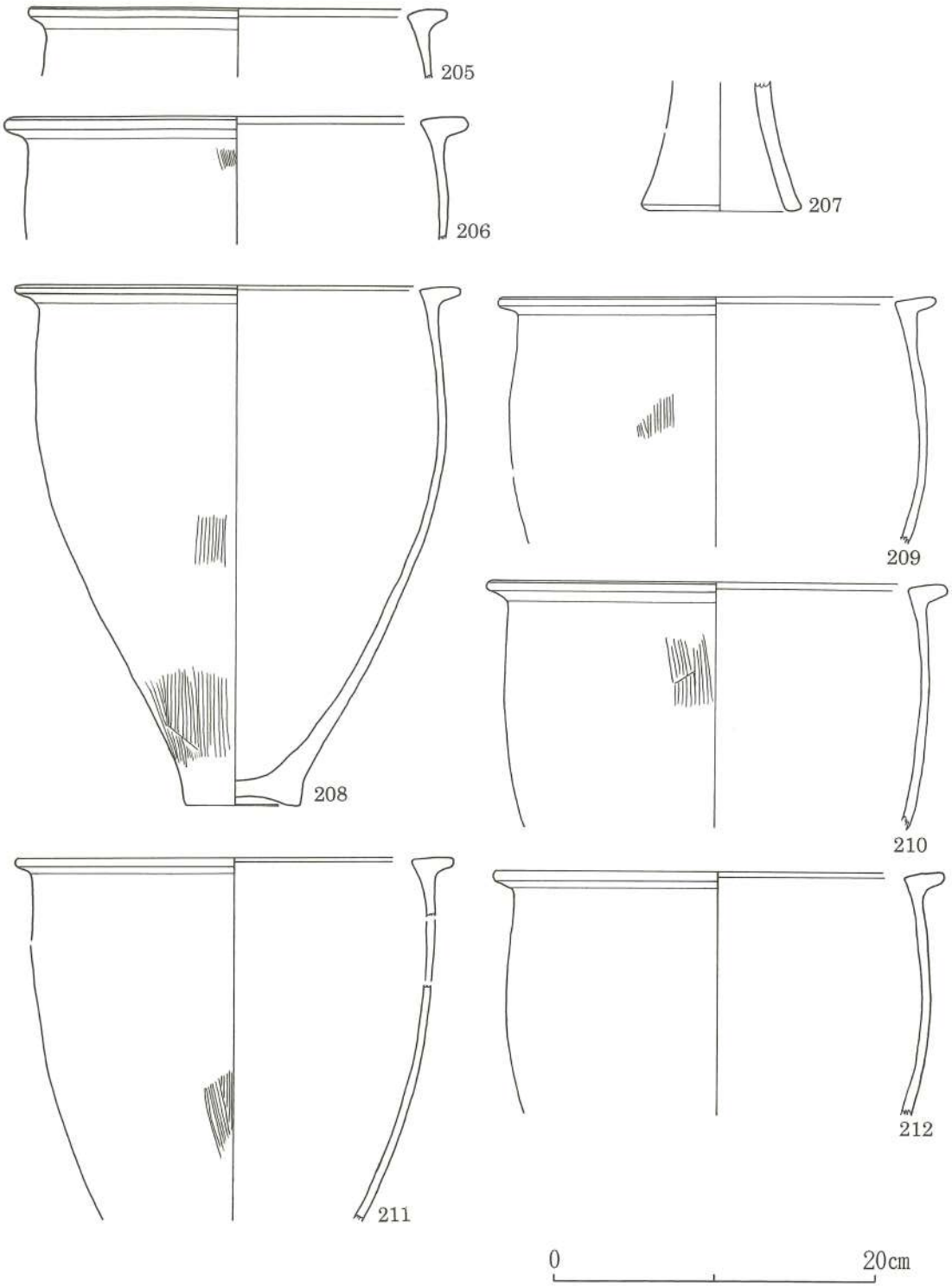


Fig.31　船石遺跡 6 区出土遺物実測図⒁（1／4）

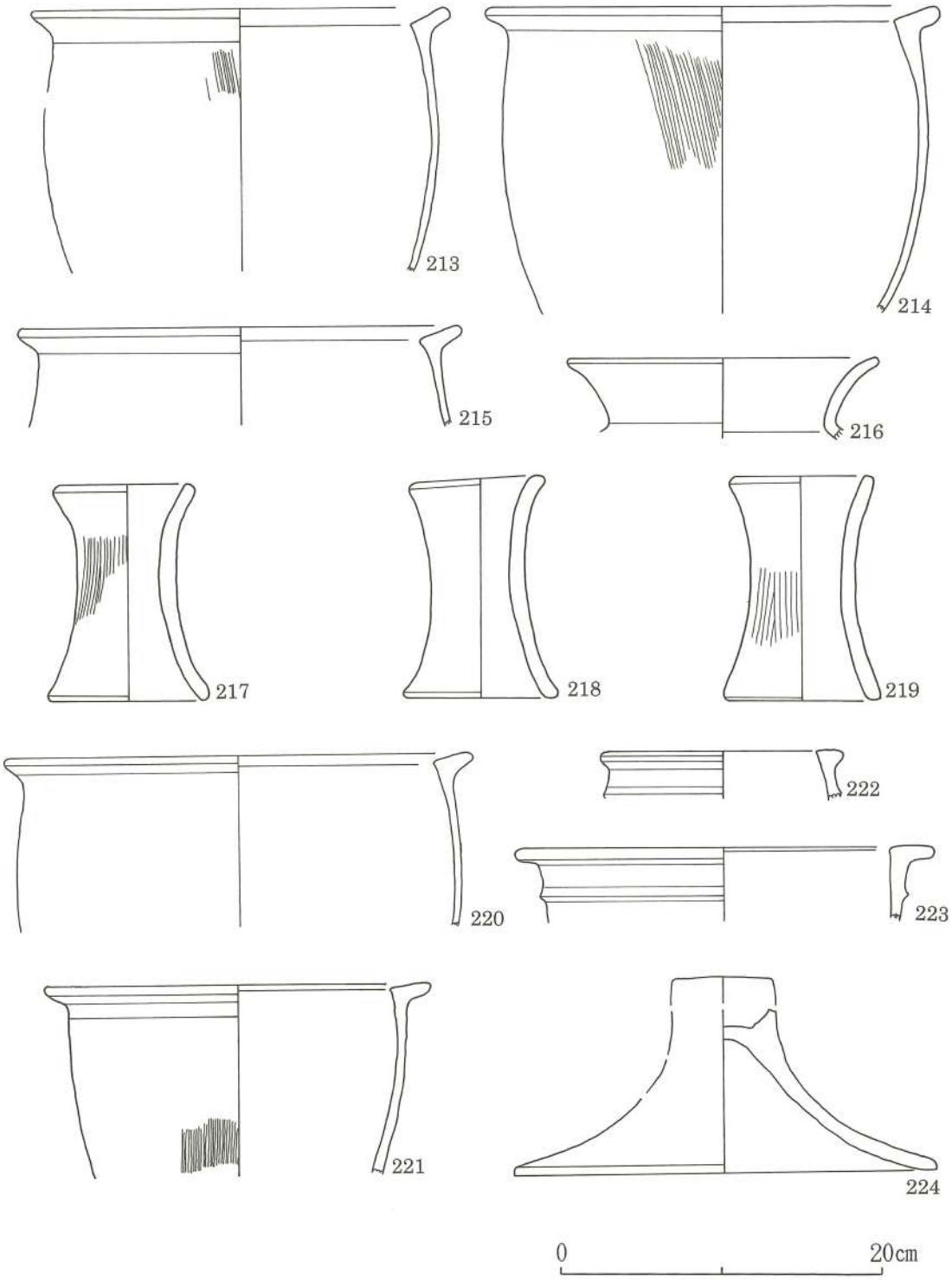


Fig.32　船石遺跡 6 区出土遺物実測図(15)（1 / 4）

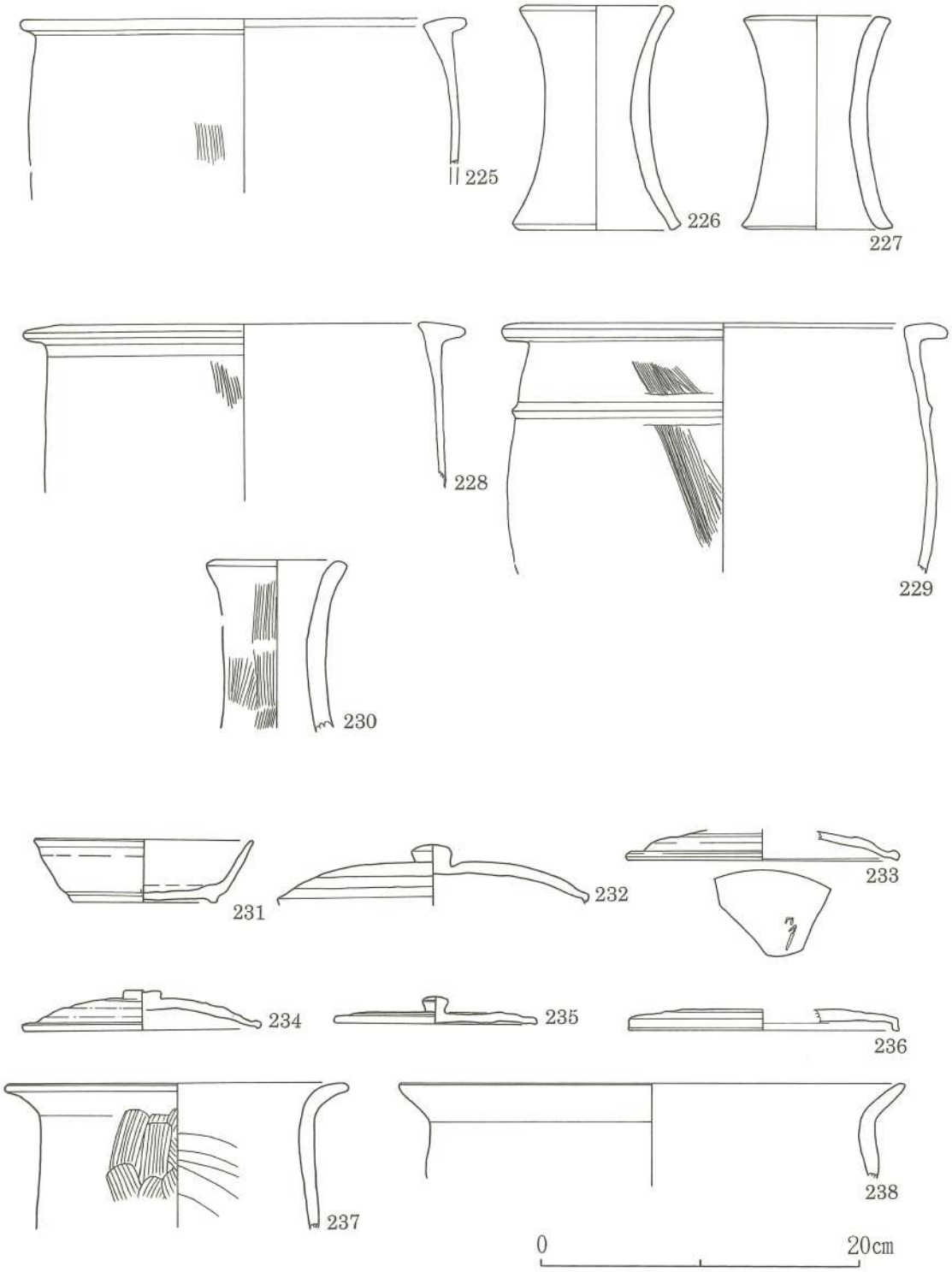


Fig.33　船石遺跡６区出土遺物実測図⑯（１/４）

Ⅴ．船石遺跡７区の調査

１．遺　構（Fig.34～36・PL.５,18・Tab.３）

今回７区の調査において検出された遺構は、縄文時代の土壙１基、弥生時代の竪穴式住居址１軒、土壙など５基、その他ピットなどであった。

(1) 竪穴式住居址（Fig.34,35・PL18）

今回の調査で竪穴式住居址として取り扱った遺構は、１軒であった。いずれも弥生時代中期前半の円形竪穴式住居址で、調査区の南端部分から検出された。

SH-701（Fig.34,35・PL18）

SH-701は、S-14Gr.付近で検出された推定径6.5mの円形の竪穴式住居址。幅４m弱の調査区内で住居のほぼ中央が検出されたものの、住居の中央より東側を耕作に伴う段で失っており、

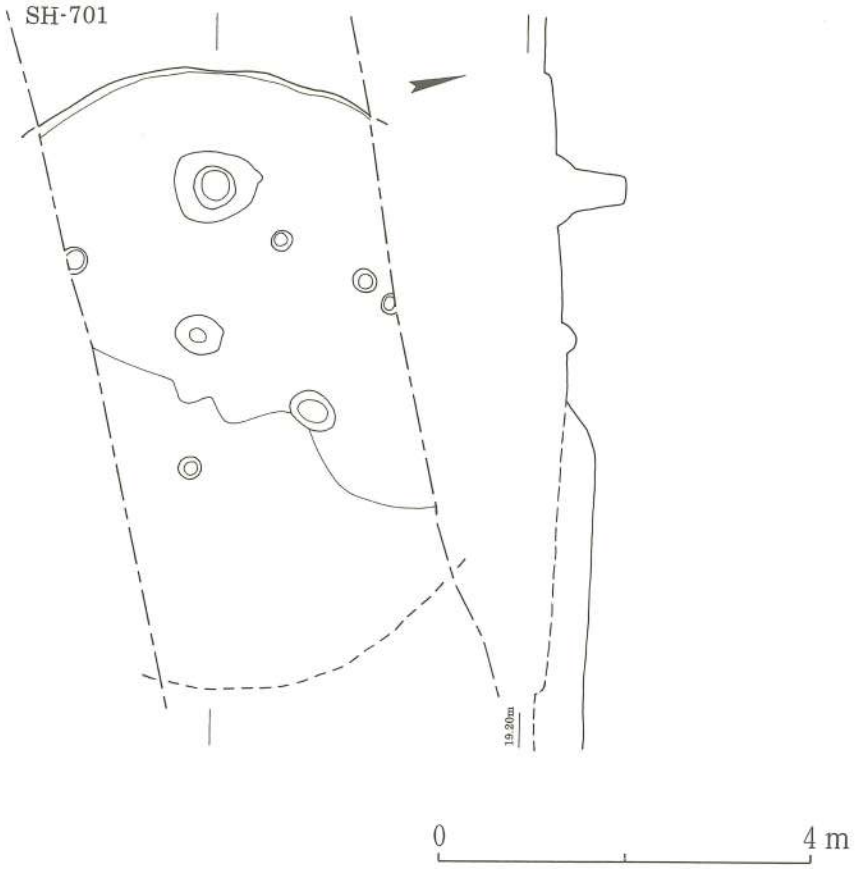


Fig.34　船石遺跡７区竪穴式住居址実測図（１/80）

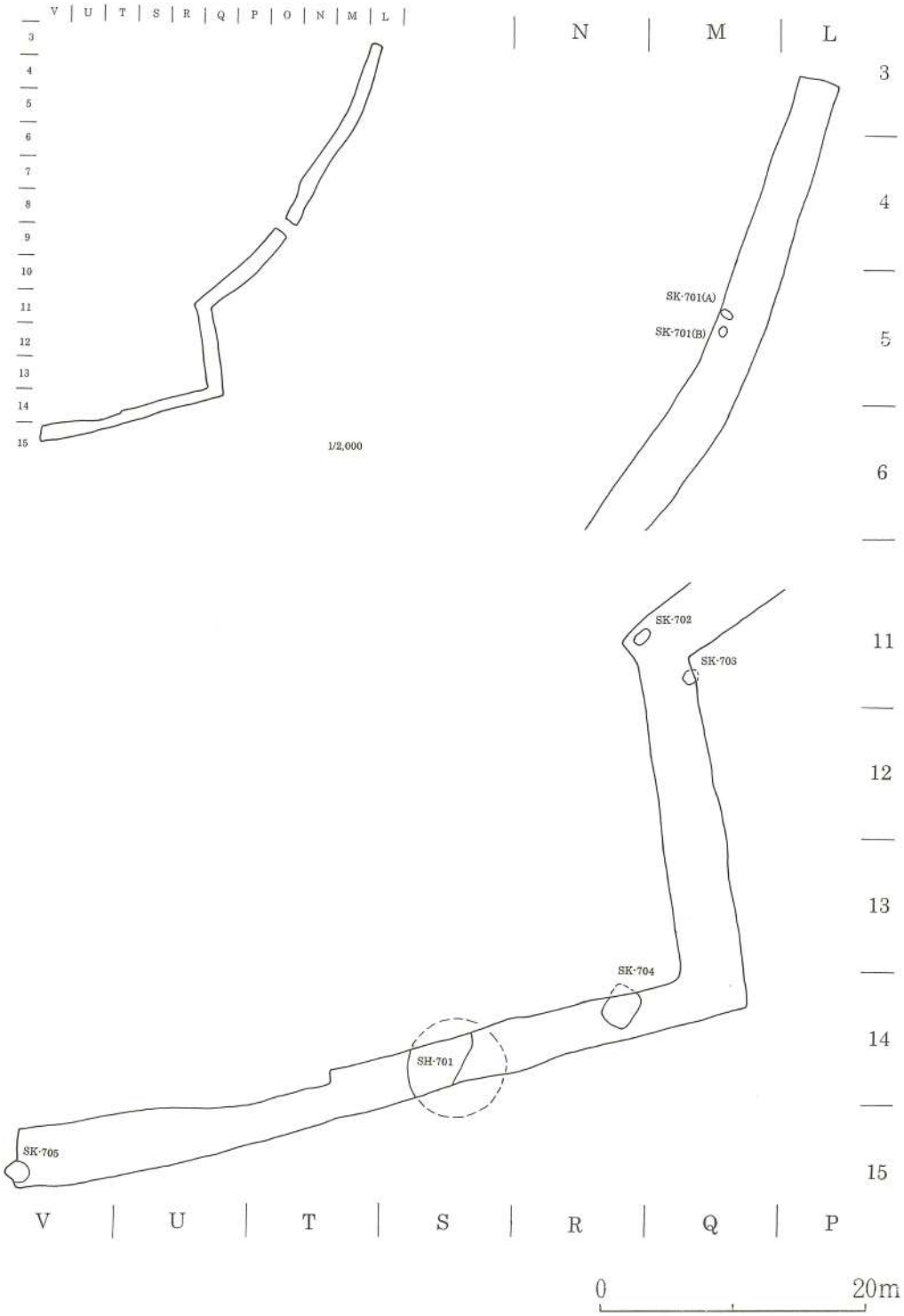


Fig.35　船石遺跡７区遺構配置図（1/500）

把握できた部分は全体の約2/5にとどまっている。西壁から1.2mのところにピットがみえるが、これが主柱穴のうちの一本であると推定される。床面積は検出部分で12.4㎡。床面までの掘り込みの深さは約15cm弱。

(2) **土壙**（Fig.35, 36・PL.18・Tab. 5）

今回の7区の調査で検出された土壙は6基であった。これらの中で出土遺物などから時期が特定できるものは、5基であった。SK-701Aが縄文時代後期、SK-702、SK-703、SK-704、SK-

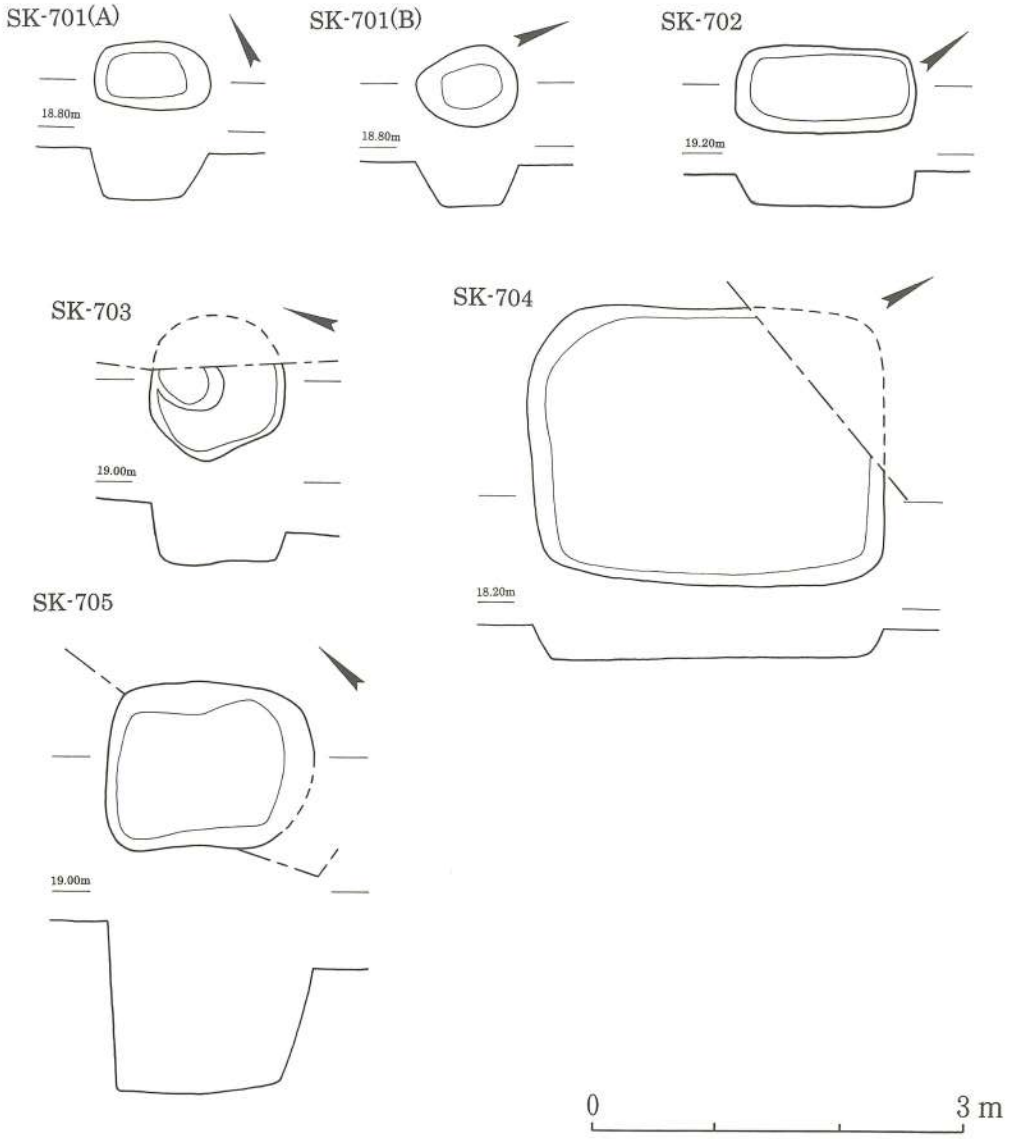


Fig.36　船石遺跡7区土壙実測図（1/60）

705が弥生時代中期の所産である。

とくに、縄文式土器とともに石器類が出土したSK-701Aは、上峰町内における発掘調査で検出された縄文時代遺構としては、初の調査例である。

以下、検出された各土壙の形態・法量などを一覧表にまとめ報告とする。

Tab. 5　船石遺跡7区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-701A	不整 隅丸長方形	0.92 0.62	0.53 0.36	0.37	0.2		縄文式土器鉢、石槍、石鏃、石斧、砥石、掻器	
SK-701B	不整円形	0.83 0.50	0.62 0.34	0.32	0.1			
SK-702	隅丸長方形	1.44 1.28	0.68 0.52	0.19	0.6		弥生式土器壺、器台	
SK-703	不整円形	1.06 0.92	※0.8 ※0.7	0.37	※0.6		支脚	
SK-704	隅丸長方形	2.83 2.60	2.20 2.01	0.28	※4.5		弥生式土器甕、壺、石鎌	
SK-705	不整 隅丸長方形	1.64 1.32	1.30 1.00	1.06	1.2		弥生式土器甕、壺、石斧	

2．遺　物（Fig.37,38・PL.26,27）

船石遺跡7区の調査では、これまで述べてきた各遺構から、縄文式土器、弥生式土器、などが出土し、これらに伴い少量ではあるが石器なども出土している。ここでは土器については、代表的なものを遺構ごとに、石器などについては、本項末尾にまとめて報告する。

SH-701出土土器（Fig.37）

239～241は、いずれも弥生式土器。239は逆「L」字形口縁の甕。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。240、241は甕棺として用いられるような大型の甕。

SK-701A 出土土器（Fig.37・PL.26）

242～255は、いずれも縄文式土器。248が浅鉢で他はいずれも深蜂。242は口縁部が波状を呈す。口縁外面に綾杉状の沈線文、爪形の押圧文をもつ。243は口縁外面に「×」形の連続文が押圧されている。245は、耳状の把手をもつ。口縁上面に沈線文や列天文をもつ。246は条痕文をもつ粗製の深鉢。249～255は沈線文をもつ破片。

SK-702出土土器（Fig.37）

256は、弥生式土器の器台。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-703出土土器（Fig.37・PL.26）

257は、弥生式土器の支脚。四角錐台形の支脚で、外面ナデ。側面に1ヶ所焼成前にあけられた小穴をもつが貫通はしていない。

SK-704出土土器（Fig.37,38・PL.26）

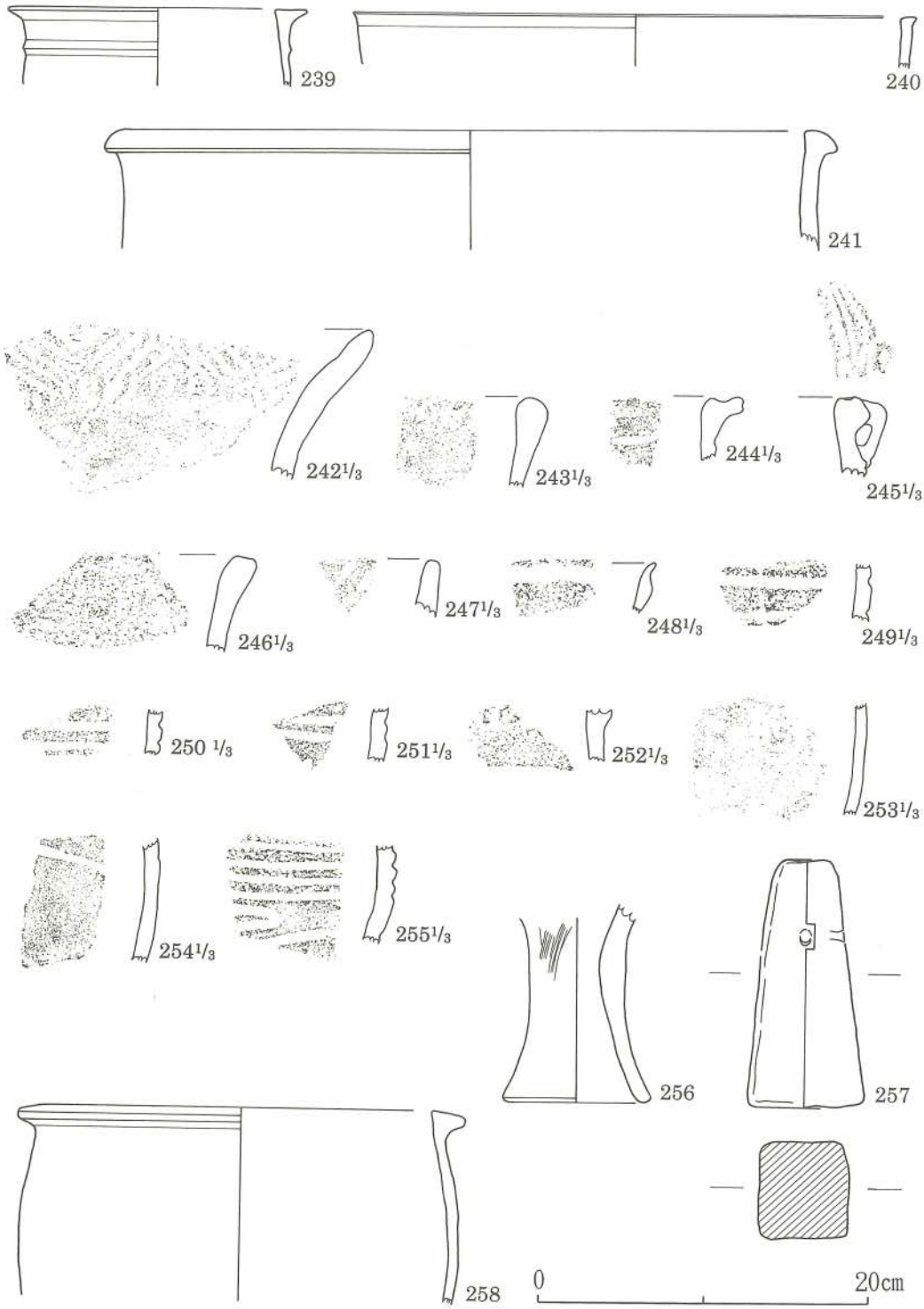


Fig.37　船石遺跡７区出土遺物実測図(1)（１/４）

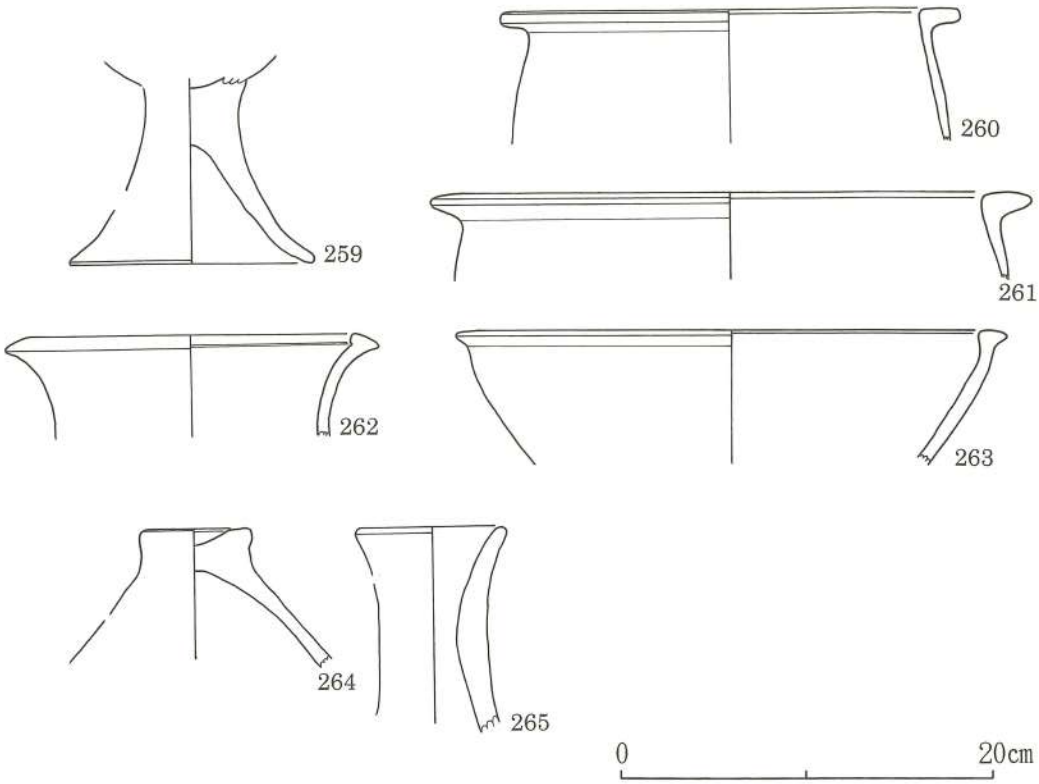


Fig.38　船石遺跡７区出土遺物実測図(1)（１/４）

258、259は、弥生式土器。258は胴部が張った逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。259は高坏の脚部。内外面ともにナデ。

SK－705出土土器（Fig.37）

260～265は、いずれも弥生式土器。260、261は逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。262は鋤形口縁の壺。内外面ともにナデ。263は逆「L」字形口縁の鉢。内外面ともにナデ。264は蓋。265は器台。

船石遺跡７区出土石器

SK-701A 出土石器（PL.27-３）

ａ、ｄは、黒曜石製の掻器。ａは長さ4.8cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、ｄ長さ5.0cm、幅2.4cm、厚さ0.6cm。

ｂは、黒曜石製の涙滴形を呈す石槍。断面は凸レンズ形を呈し、長さ6.3cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm。

ｃは、黒曜石製の有茎式柳葉形石鏃。先端を欠く。長さ4.7cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。

eは、扁平な砂岩質の石材の片面に何かをこすったような幅1㎝程の溝状の浅いくぼみが斜めに走っている。石材の法量は、長さ10.8㎝、幅3.6㎝、厚さ0.8㎝。

fは、砂岩質の石材を利用した、磨製石斧。断面は、角が丸い長方形に近い形を呈す。中途で折れ、刃部を欠く。遺存部の法量は、長さ12.8㎝、幅6.6㎝、厚さ3.4㎝。

片刃石斧（PL.27-2左上）

遺存部で長さ8.8㎝、幅3.0㎝、高さ3.8㎝。断面は長方形を呈す。砂岩質の石材が使用されている。SH-704出土。

石鎌（PL.27-2下）

粘板岩製の石鎌。中途で折れているがほぼ完形と思われる。長さ20.4㎝、幅最大部分で4.8㎝、厚さ0.6㎝。SK-705出土。

Ⅳ. ま と め

今回の船石遺跡６・７区の調査を通じての成果、所見、雑感などを列記し、まとめとしたい。

縄文時代の遺構・遺物について

これまで上峰町内における縄文時代の遺物は、表採や耕作時の不時発見によるものであった。今回の７区の調査で、SK-701A から土器及び石器がまとまって出土したが、これは発掘調査で得られた資料としては町内で最初の例であることを紹介しておく。土壙１基のみであり具体的な当時の状況は把握できない。このことについては今後の調査例の増加を期待したい。

弥生時代の遺構・遺物について

６区の調査において、竪穴式住居址が10軒検出されたが、いずれも調査区域の北西部分に集中しており、調査区の東部では、住居址はまったく見られず、土壙などの遺構の数も激減する。このようなことから、この区域における船石遺跡の弥生時代中期の集落の東限がここにあったとすることができよう。

また、個々の住居について見ると、主軸や規模から、これらを二つの群に分類できることを示唆したが、各住居の出土遺物をみる限り、両者の間に質的差異は見出せなかった。

奈良時代の遺構・遺物について

奈良時代の遺構としては、土壙が検出されたが、特徴ある遺物、遺構についてまとめてみたい。

まず、今回の調査で注目されるものは、特徴ある同一の筆致で書かれた「肥人」あるいは「肥」のヘラ描き文字を底部にもつ須恵器の坏が SK-612、SK-614、SK-623（高台坏）の３ヶ所の土壙から出土した。また、SK-607出土の高台坏底部に「多□□」、坏蓋に「多□」、SX-615出土の坏蓋遺存部に「多……」（以下欠損のため文字の有無は不明）と、「多」の字で始まる文字列をもつものも出土した。

このようなことから、まず、これらはそれぞれを出土した遺構が有機的な関連を持っていることが推測できる。しかし、その有機的関連が具体的にどういうことかは現時点では不明である。

つぎに、書かれている「肥人」あるいは「肥」のヘラ描き文字の「肥」は、肥前の肥であろうこと、そして「肥人」は「ヒノト」などと読むものと推測され、個人あるいは集団の呼称であったろうことは想像に難くない。しかし、「多□□」と同様、この文字のもつ具体的な意味については、ここでは明確にできない。

さらに、SK-612からは、円面硯の破片も出土しており、前述のヘラ描き文字とあわせて、奈良時代後半のこの時期この区域を識字階級の人々が占有していたものと考えられ、当時の社会の文化水準を考える上で、貴重な資料といえよう。

一方、特徴的な遺構は、SX-615が挙げられる。本文中でも触れたが、このSX-615に接してここから北東へ延びる溝跡SD-607、さらにSX-615の北東には建物址SB-602が位置している。これら3者の遺構の配置から、釣り殿、池、池に水を引くための流路を想定するには、無理があろうか。

図　　版

船石遺跡６・７区全景　－東より－

船石遺跡６区全景　－写真上方が北－

船石遺跡 6 区竪穴式住居址集中部分・SD-601　－写真上方が北－

船石遺跡 6 区 SX-615・SD-607　－写真上方が北西－

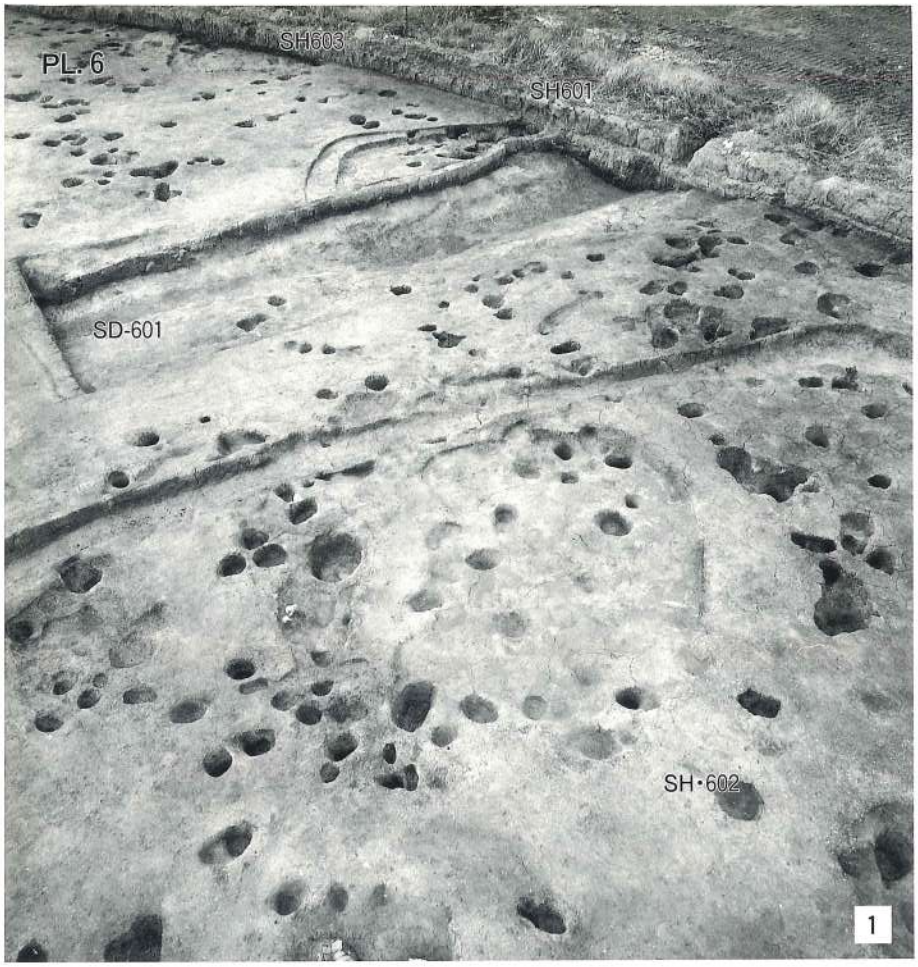
船石遺跡 6 区北部自然堆積土層調査区・SD-610　－写真上方が北－

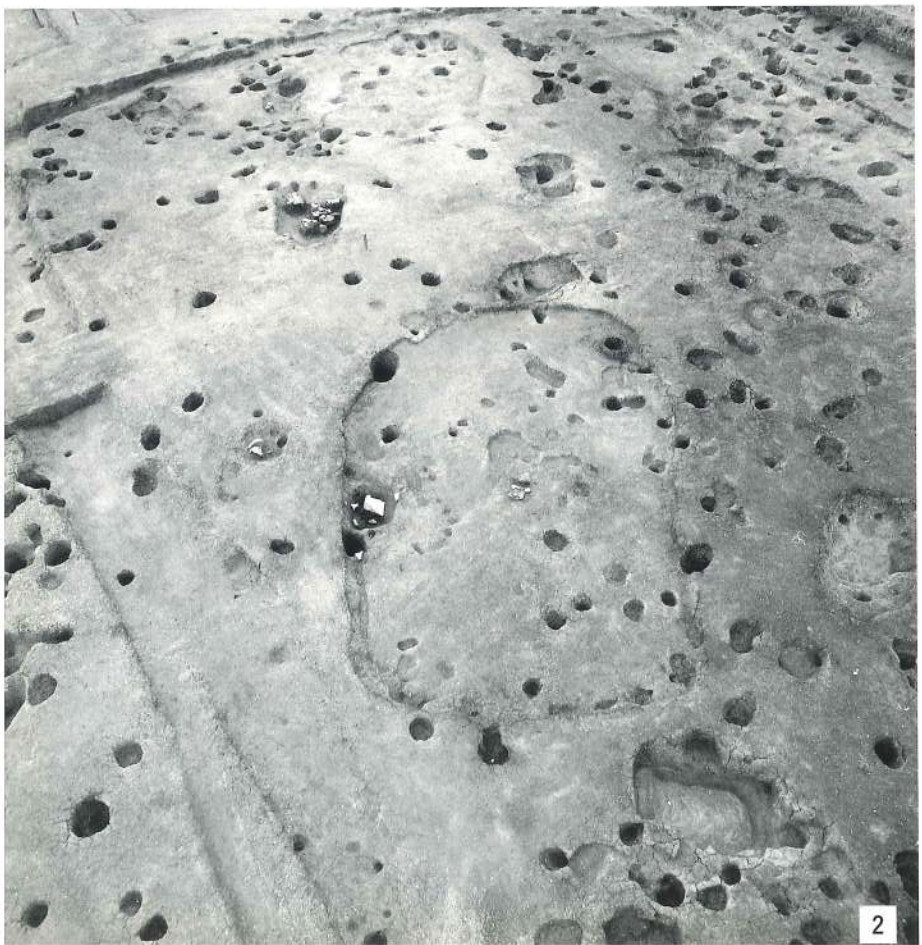
船石遺跡 7 区調査区

1　O-8Gr.より北東部分

2　Q-11Gr.より南部分

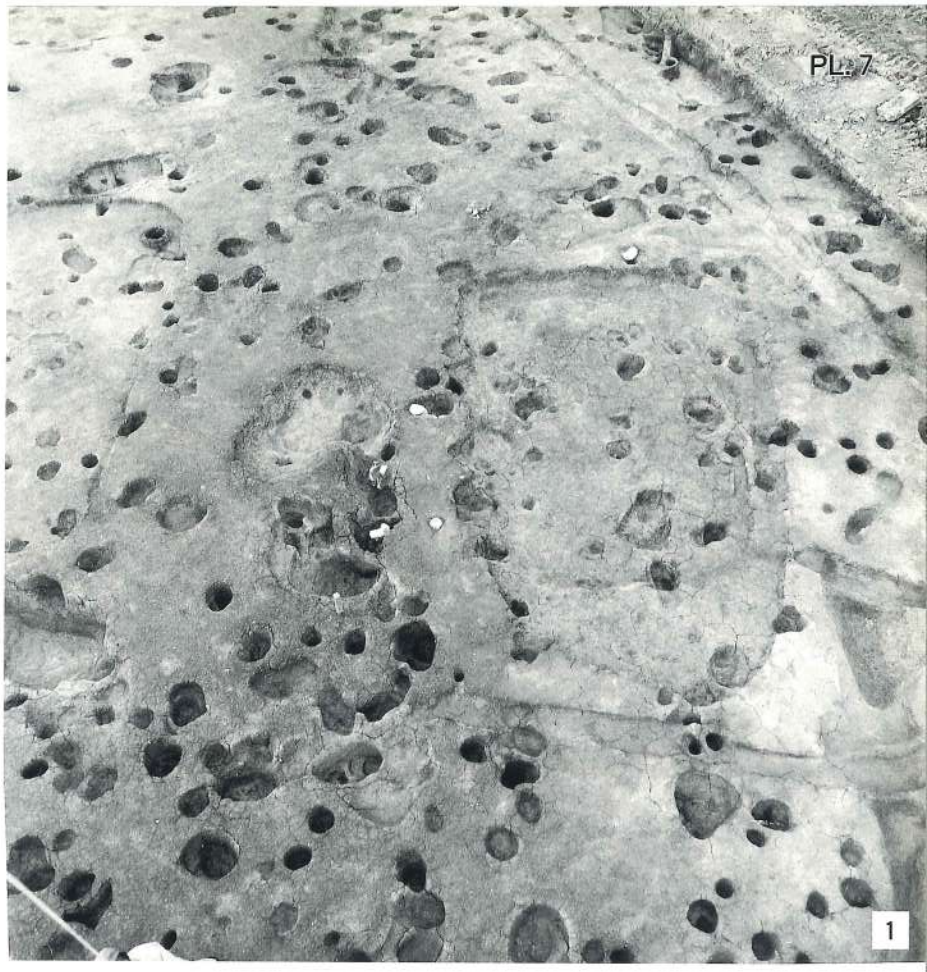
3　Q-14Gr.より西部分





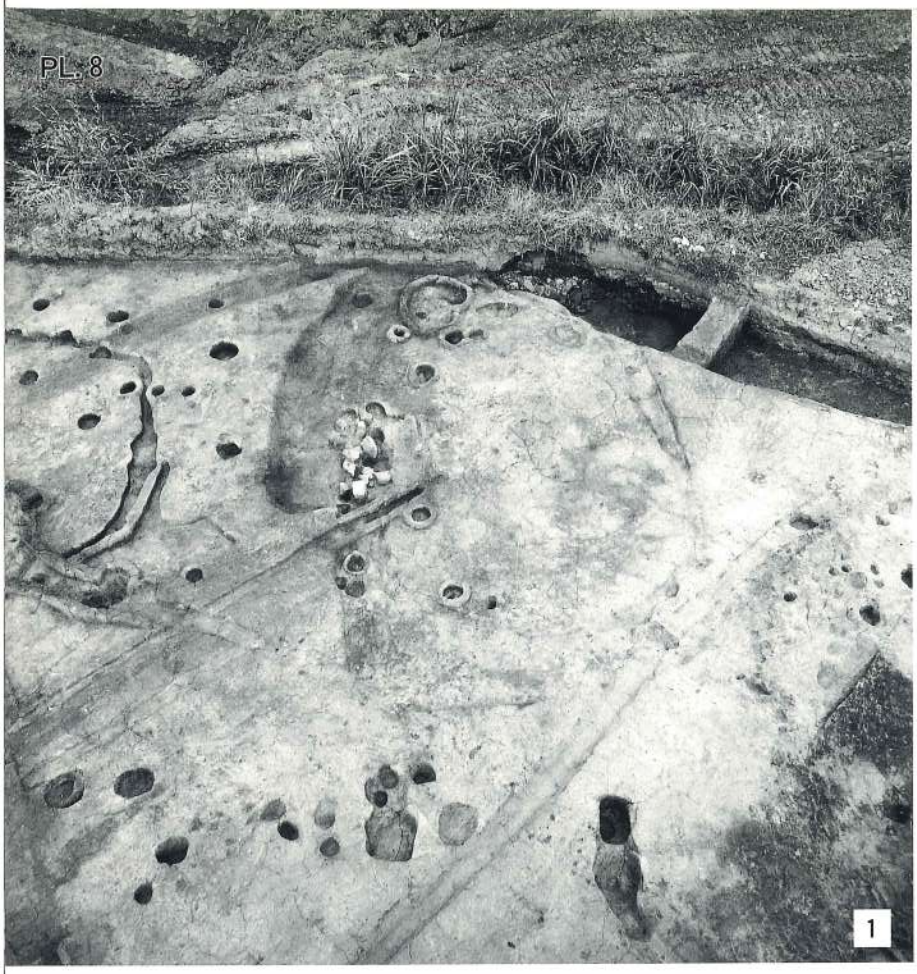
1　SH-601・SH-602・SH-603（北東より）

2　SH-604（北東より）



1　SH-605（北東より）

2　SH-606（南東より）



1　SH-607（南東より）

2　SH-608（南東より）

1　SH-609（北東より）

2　SH-610（南東より）

1　SH-602（北西より）

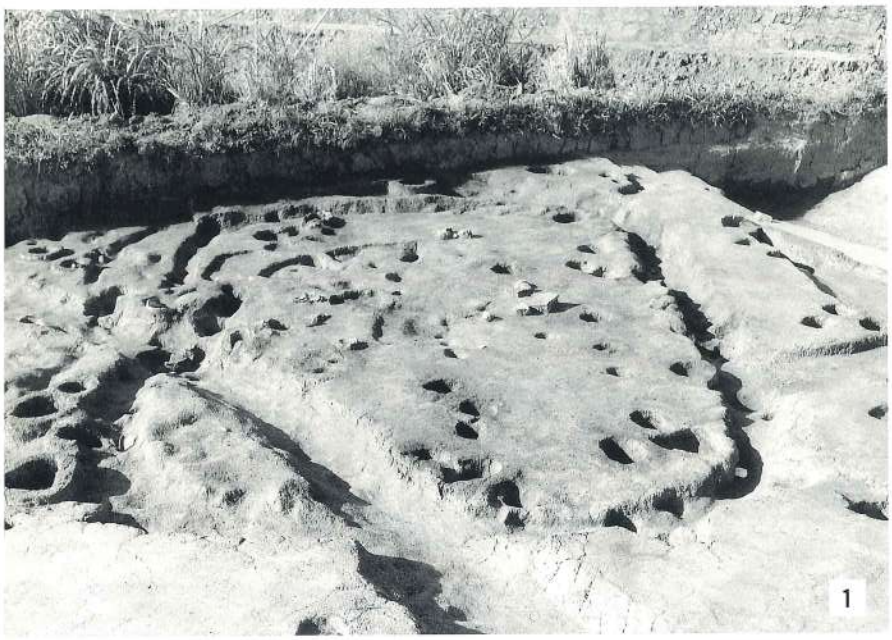
2　SH-603（北東より）

3　SH-604（北東より）

1　SH-605（北東より）

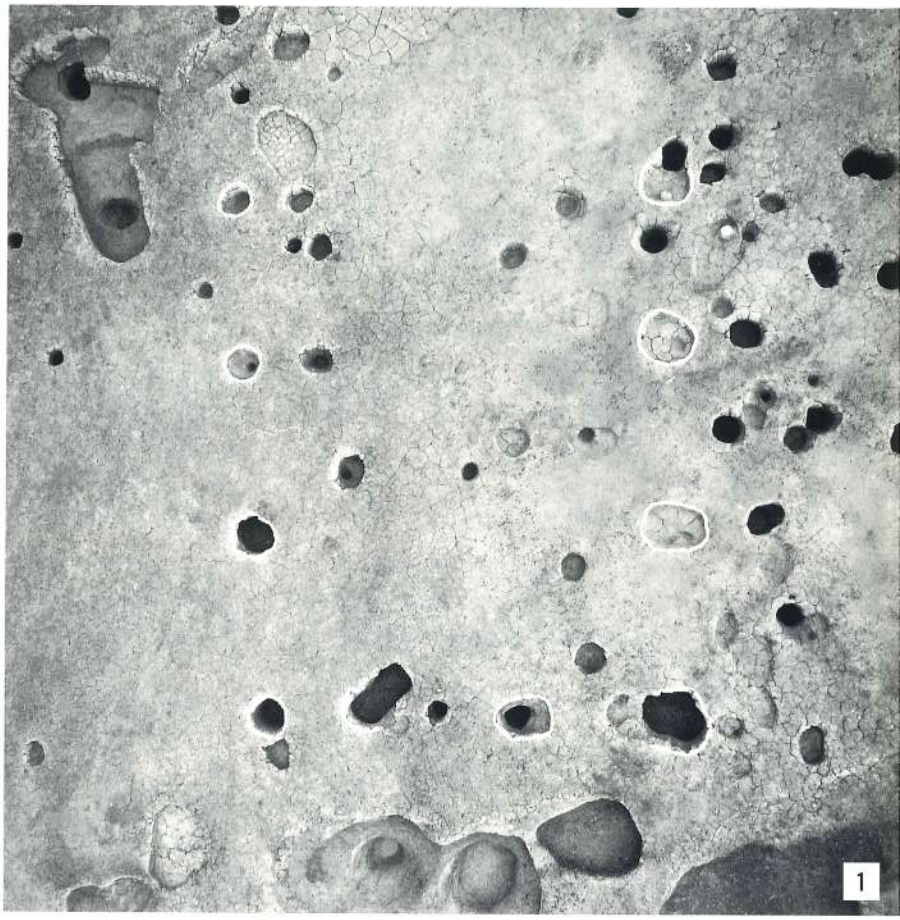
2　SH-606（南東より）

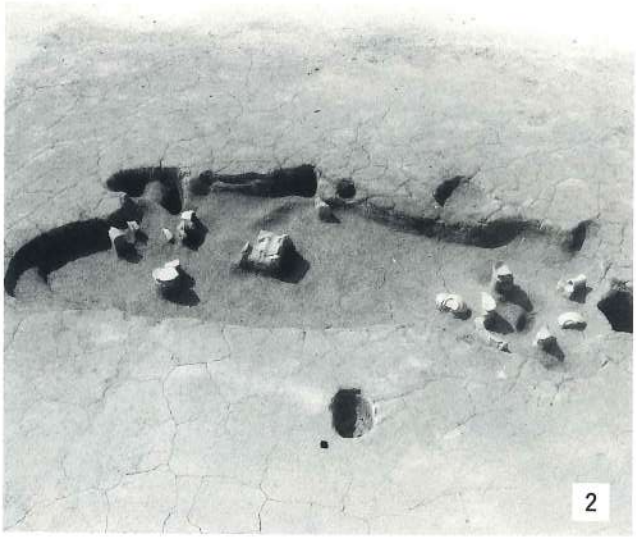
3　SH-609（南東より）



1　SH-610（南東より）

2　SB-601（南より）

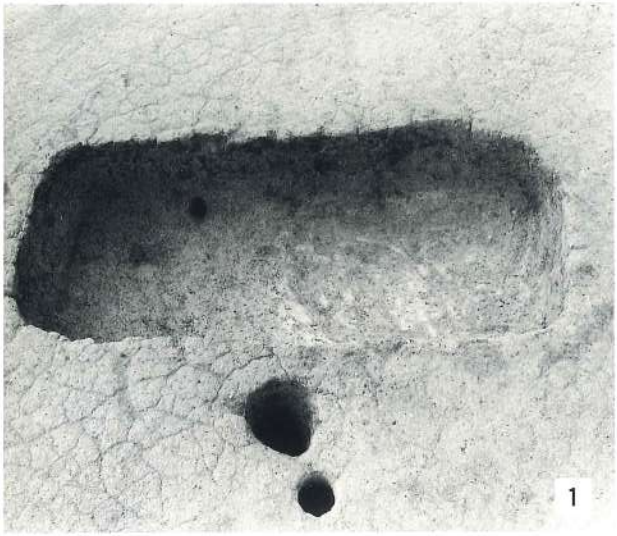


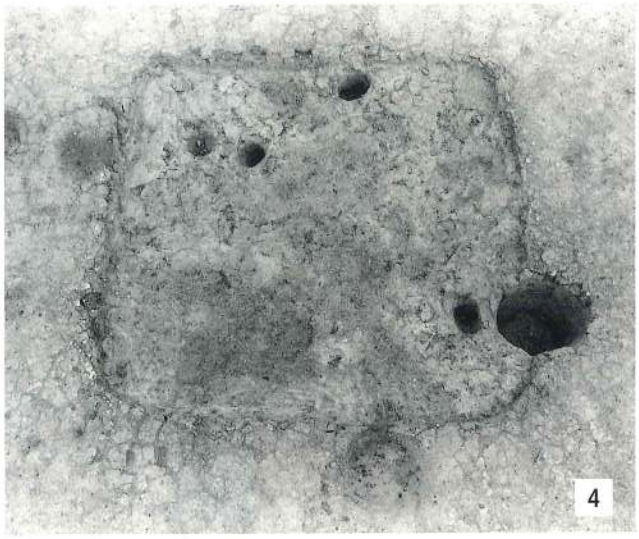


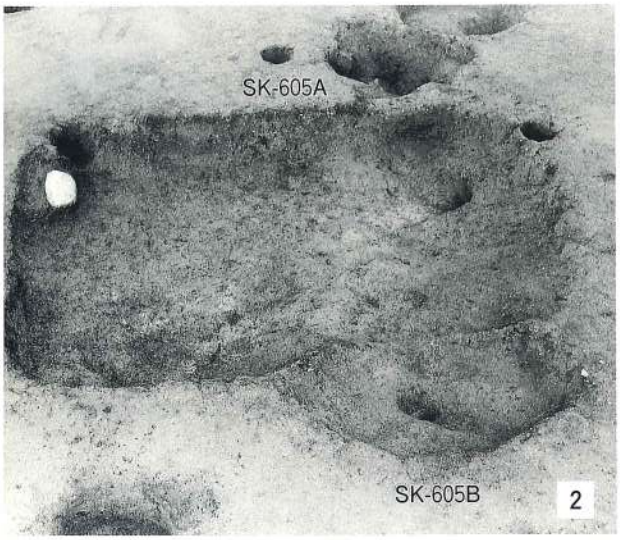
2　SK-601（南東より）

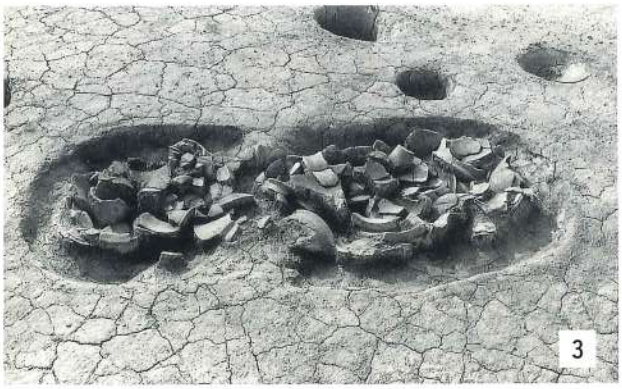
1　SB-602（南より）

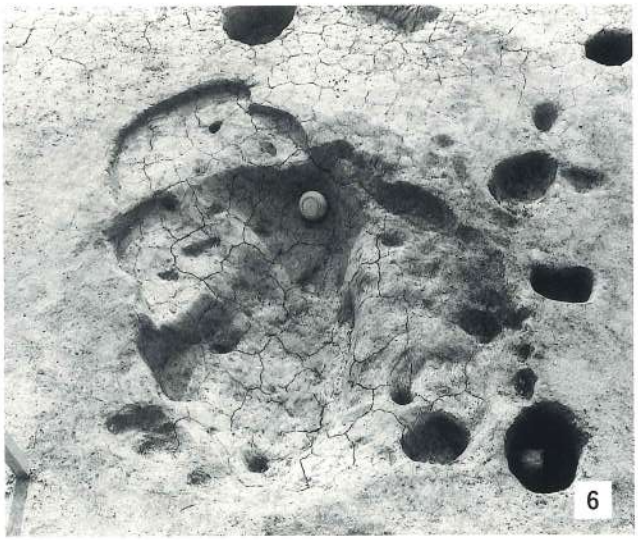
3　SK-602（南東より）











1　SK-604（北東より）

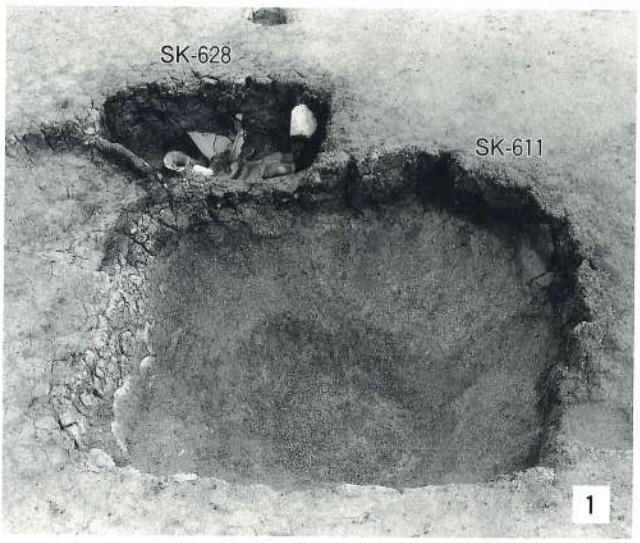
2　SK-605A･B（南東より）

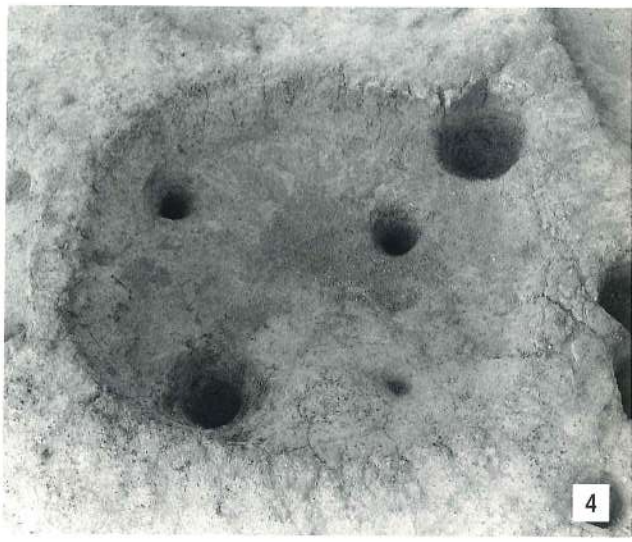
3　SK-606（南東より）

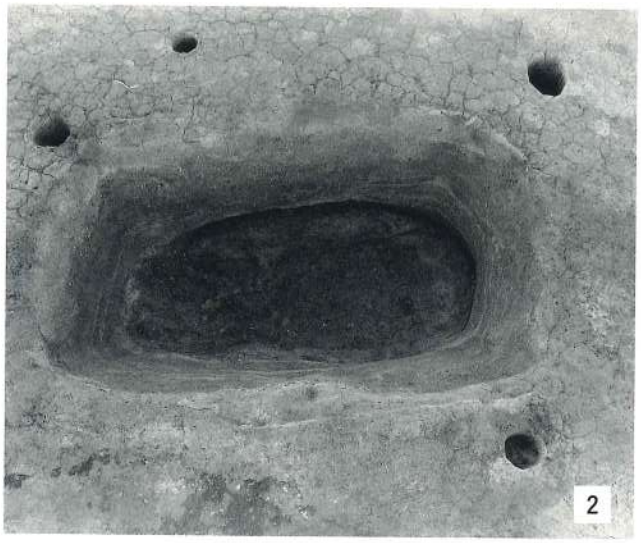
4　SK-607（南西より）

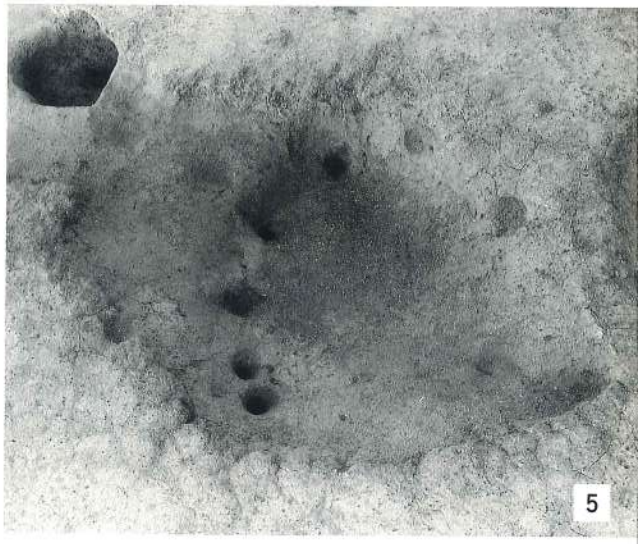
5　SK-608（北西より）

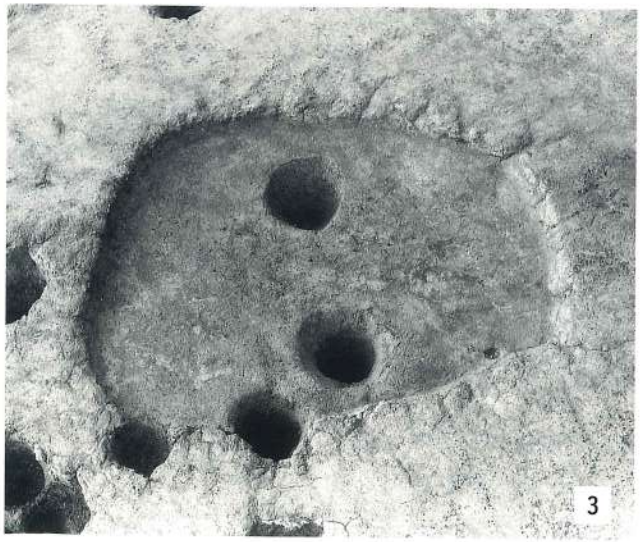
6　SK-610（東より）

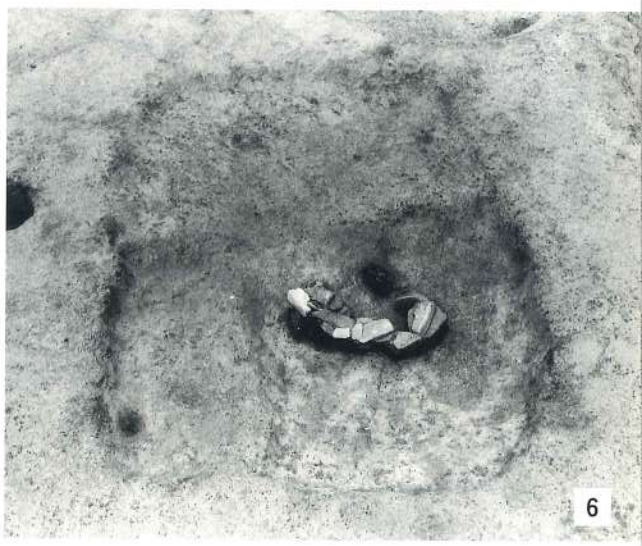












1　SK-611・SK-628（北西より）

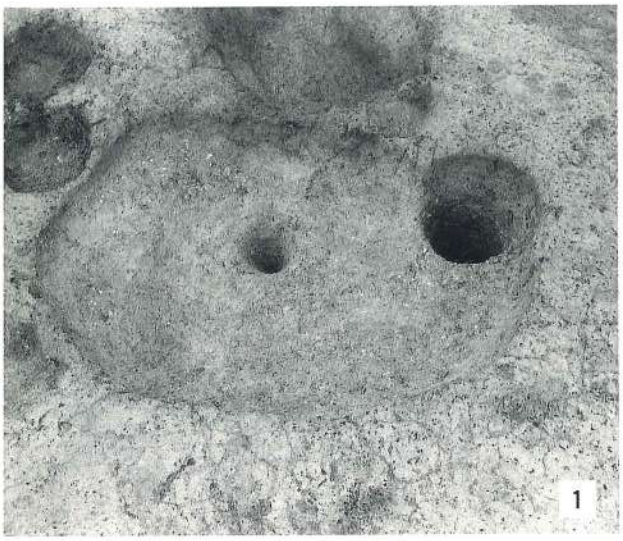
2　SK-616（東より）

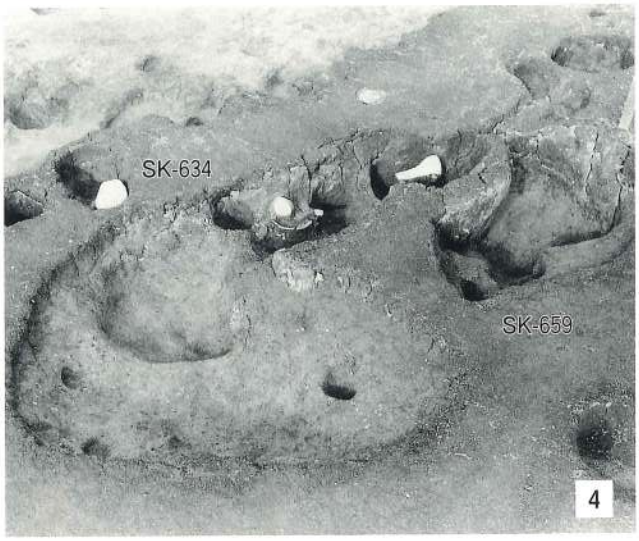
3　SK-621（東より）

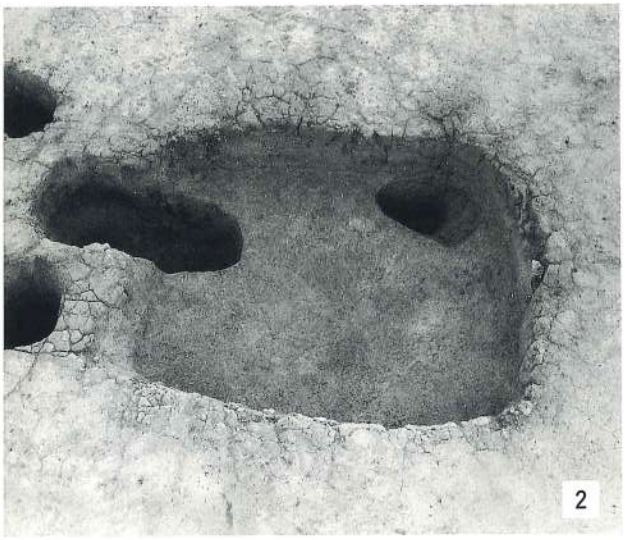
4　SK-622（東より）

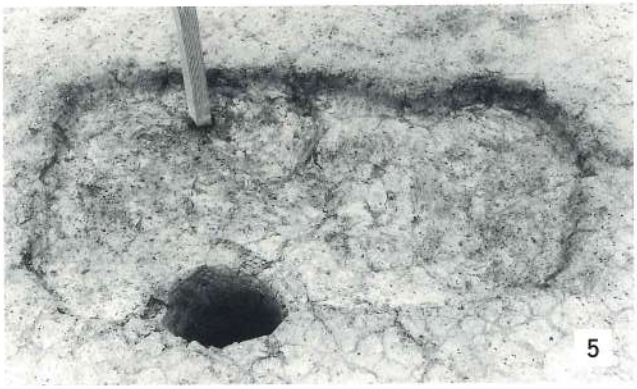
5　SK-623（南より）

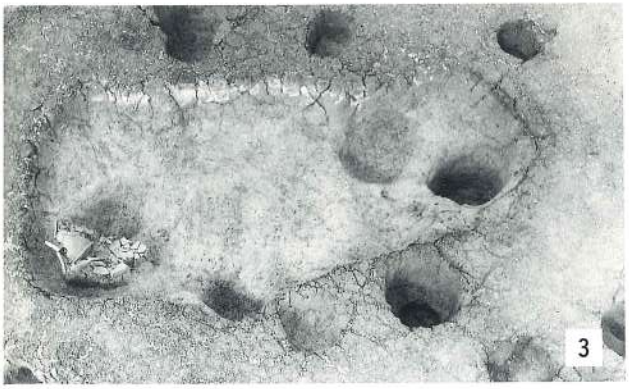
6　SK-625（西より）

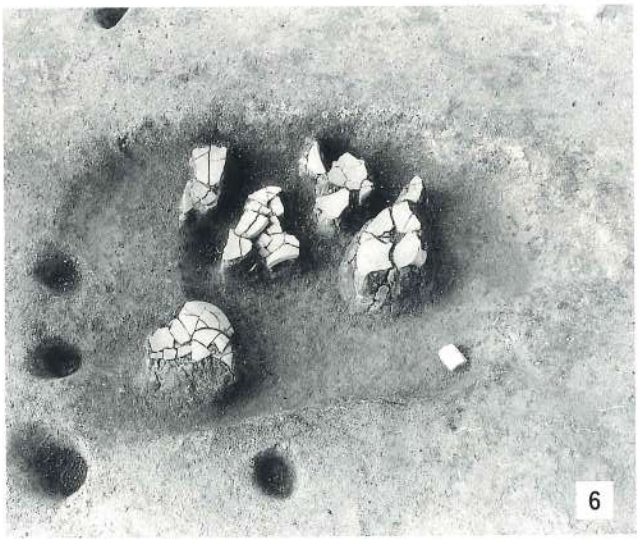












1　SK-626（南東より）

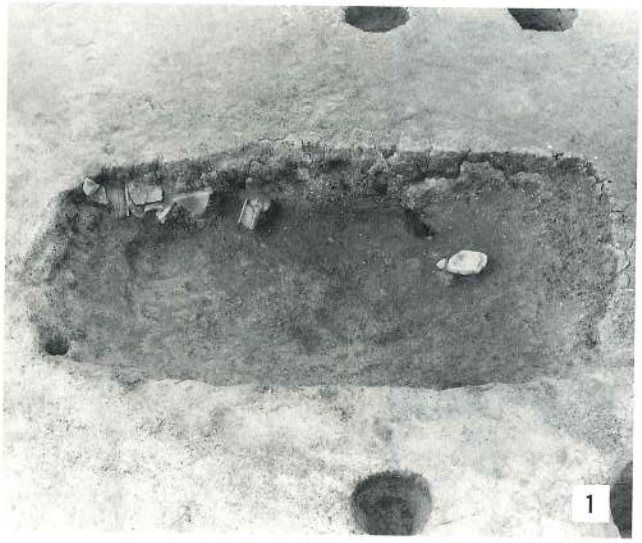
2　SK-630（南より）

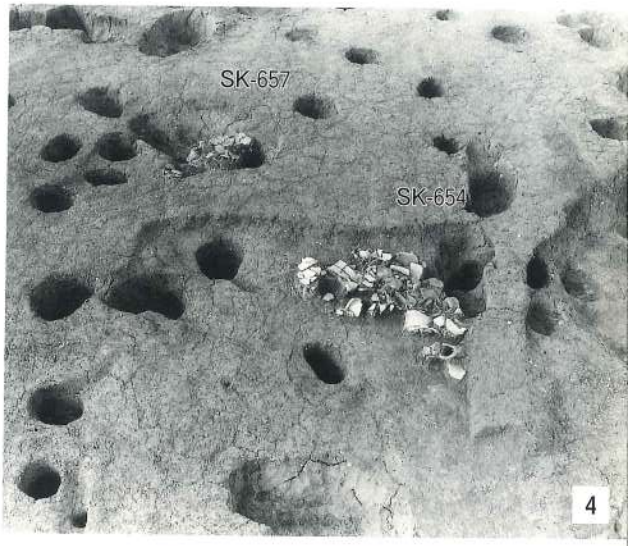
3　SK-632（南東より）

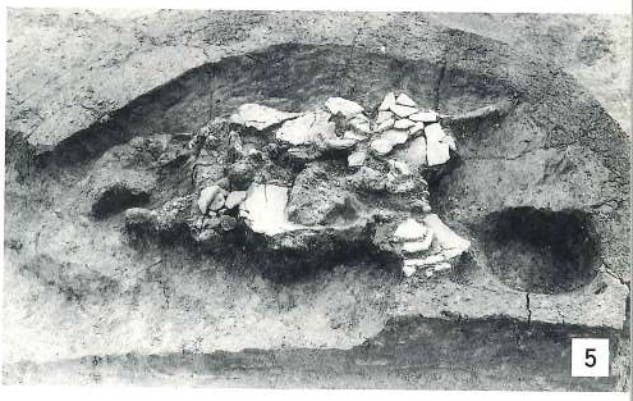
4　SK-634・SK-659（南より）

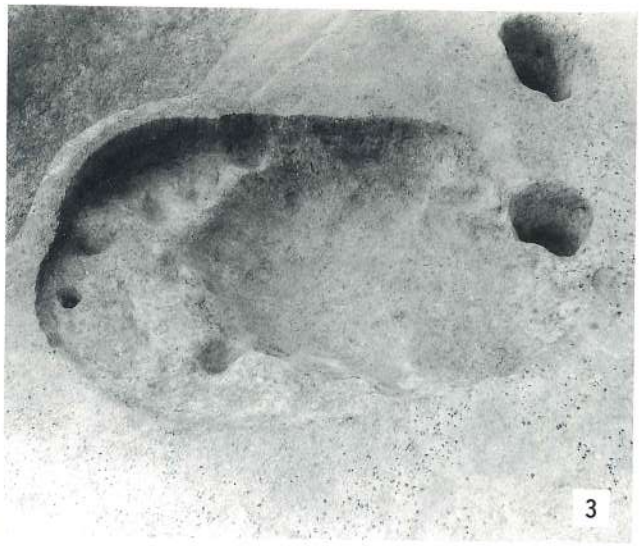
5　SK-635（南東より）

6　SK-646（南東より）









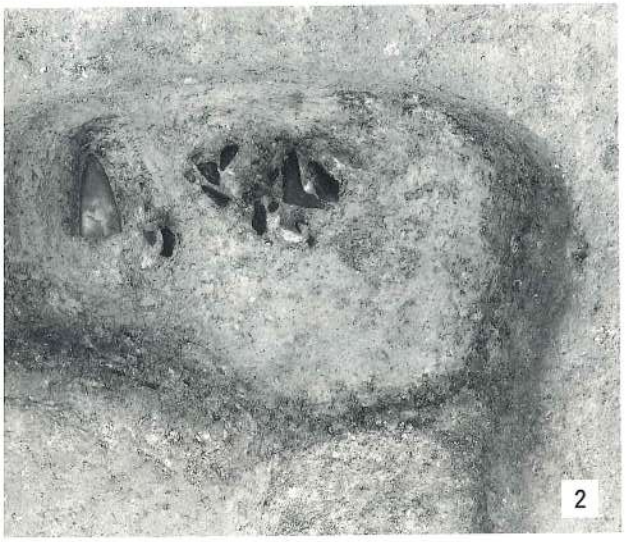
1　SK-650（南東より）

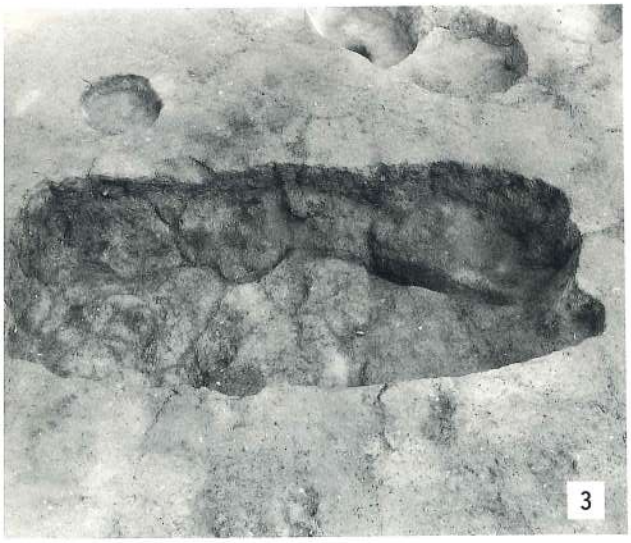
2　SK-651（南より）

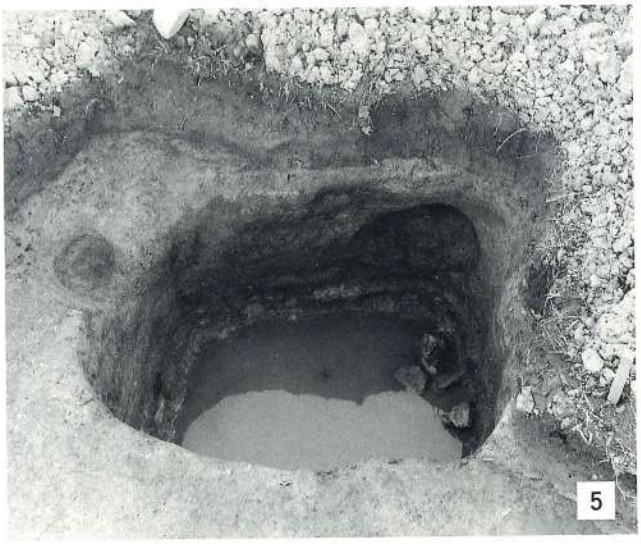
3　SK-652（北東より）

4　SK-654・SK-657（東より）

5　SK-655（北より）







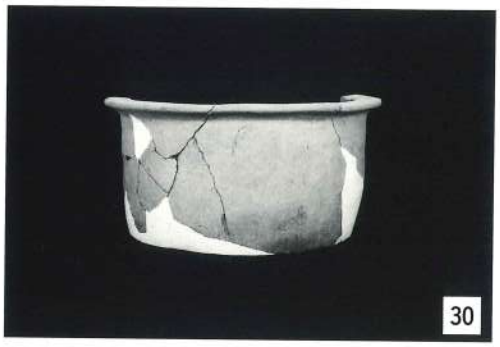
1　SH-701（西より）

2　SK-701A（北西より）

3　SK-702（北東より）

4　SK-704（南西より）

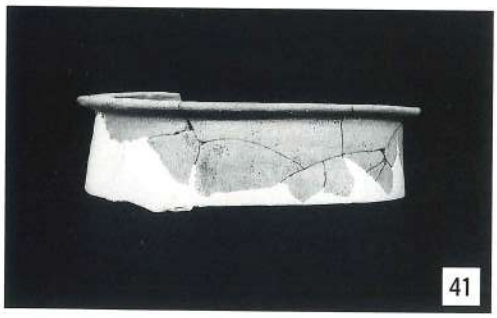
5　SK-705（北東より）


30

32

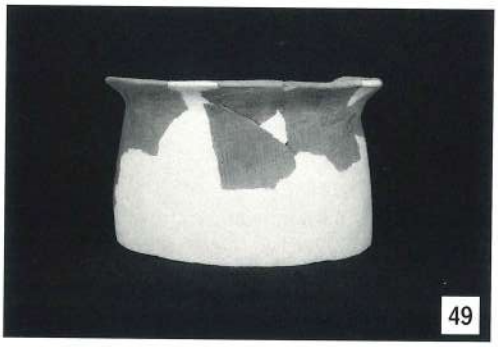
33

34


41

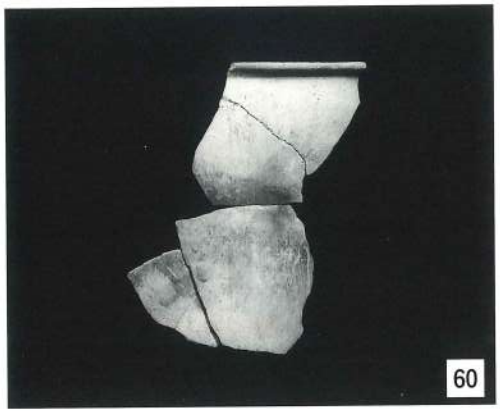
43

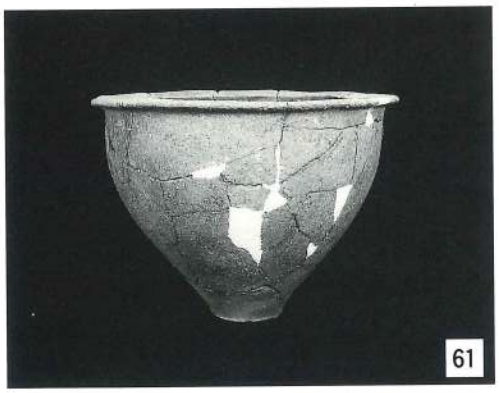
45


49

51

52


60


61

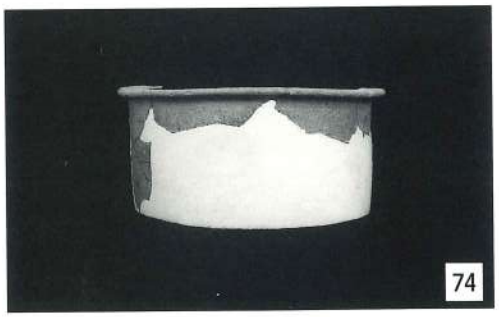
69

71

71

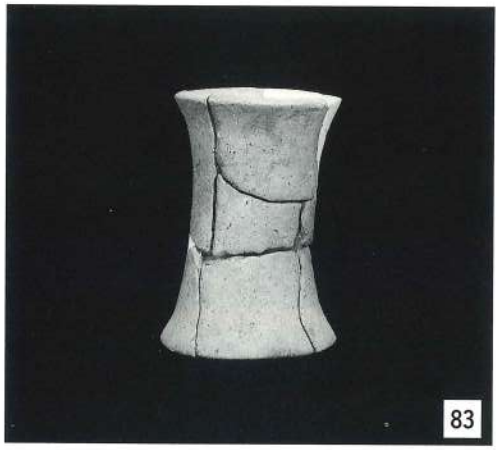
72

72

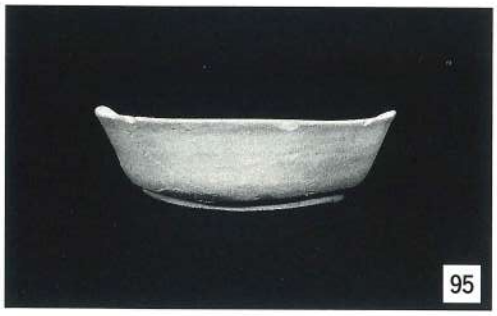

74

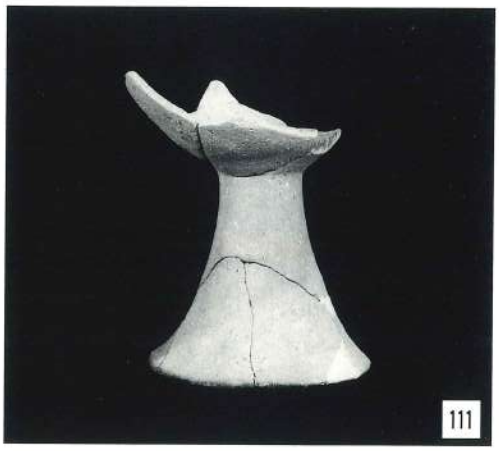
75

76

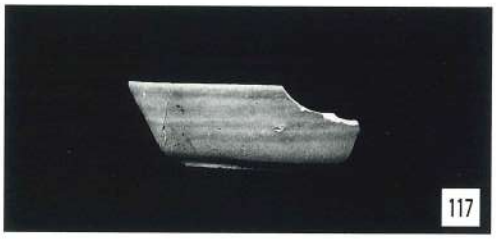

83

84

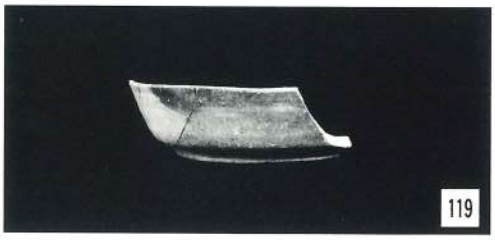

95


111

114

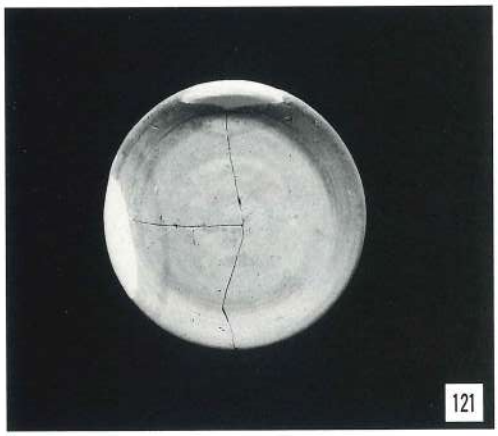

117

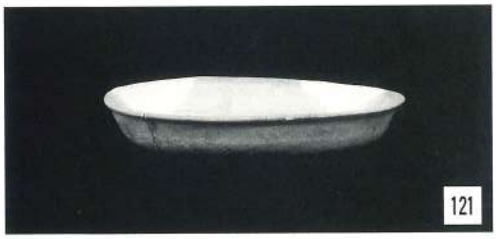
118


119

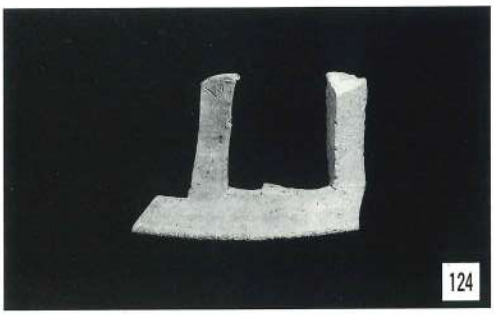
120

120

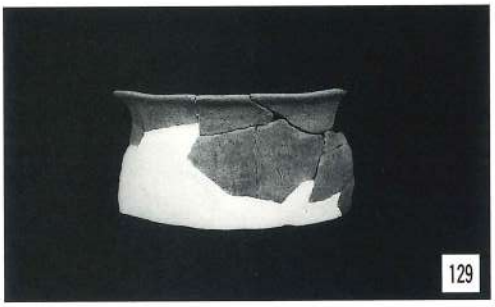

121


121

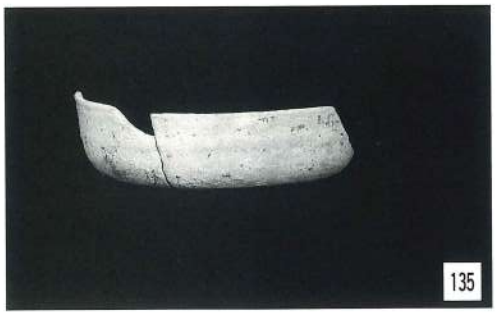
123


124

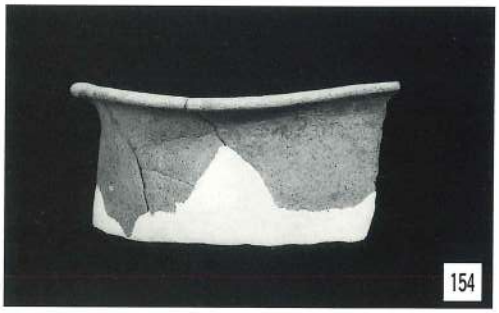
127


129

134


135

138

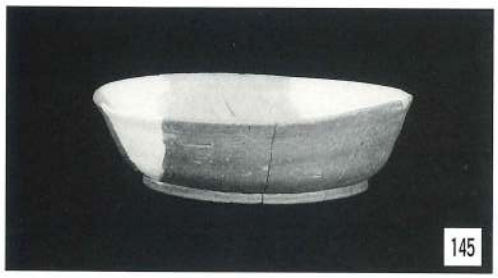

154

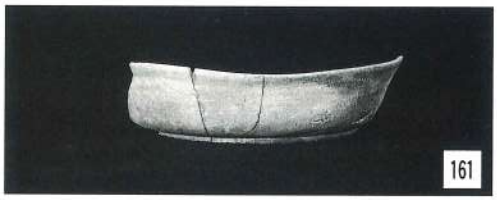
140

156

143

160


145


161

147

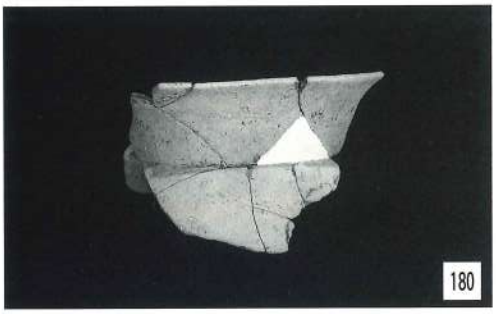
162

153

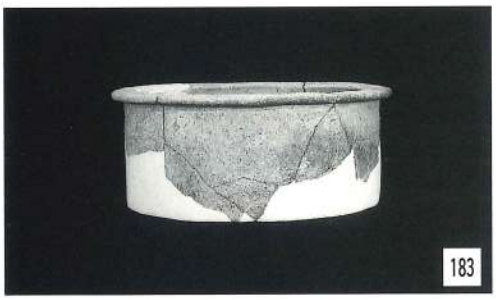
168

170

198


180

203


183

208

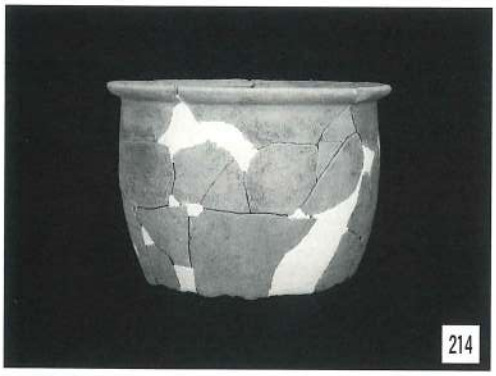
185

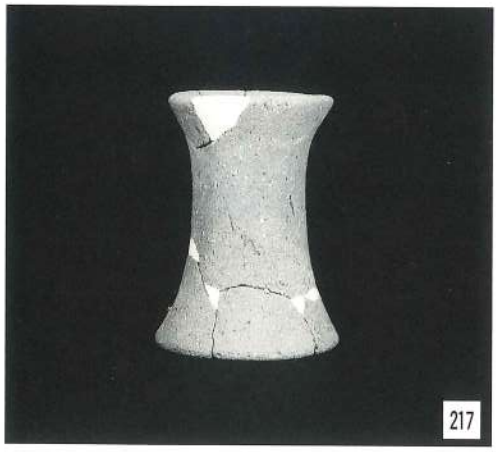
209

197

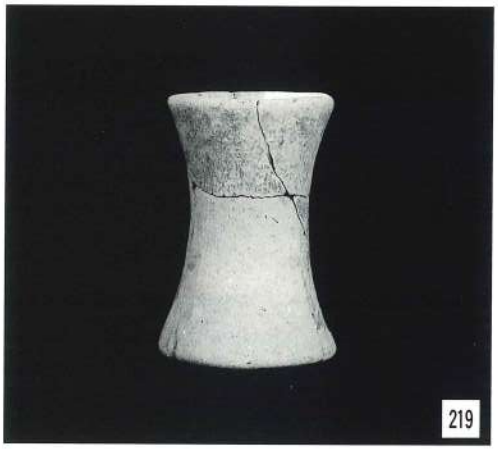
211

212


214

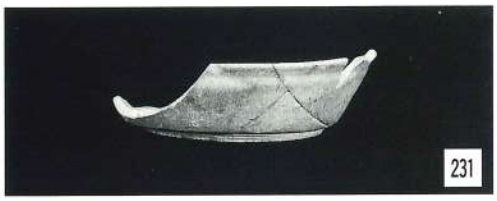

217

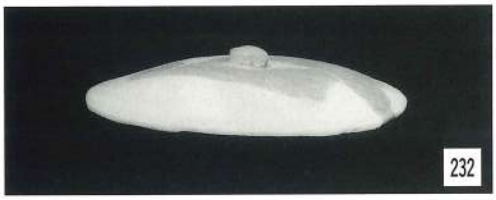
218


219

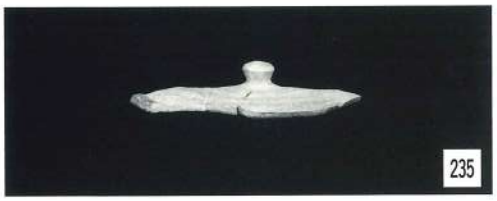
225

229

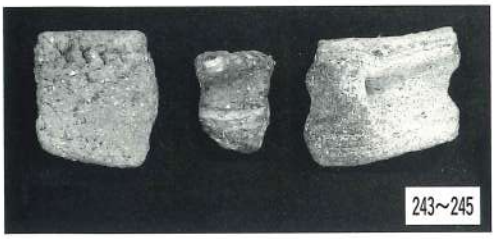

231

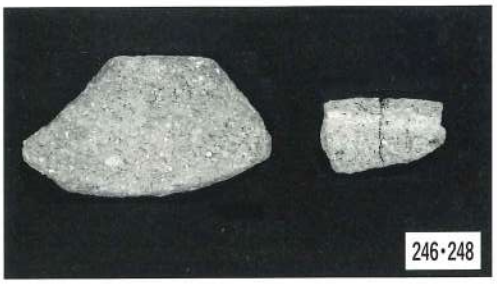

232

233


235

242

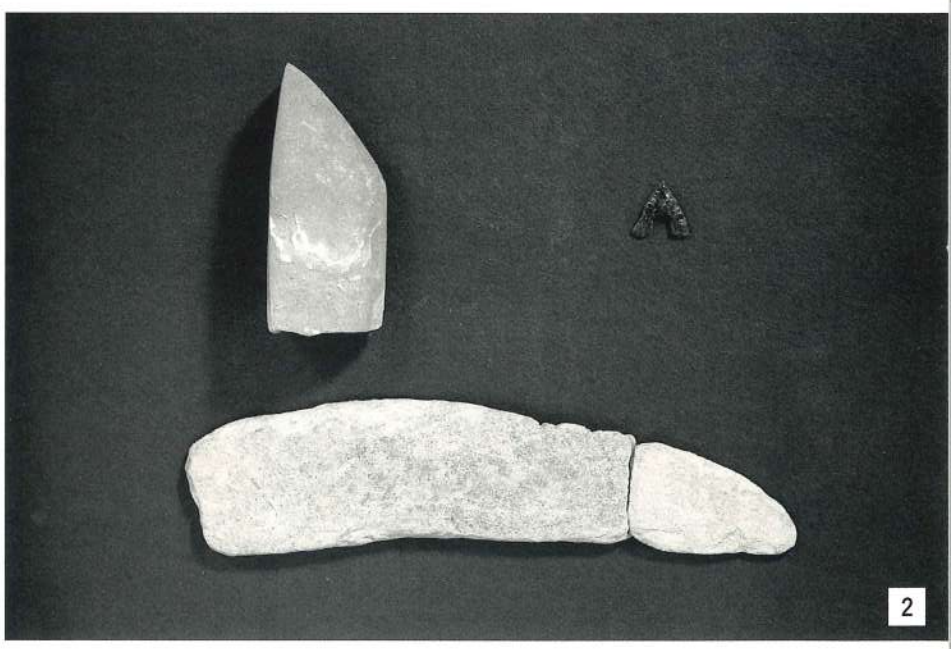

243~245

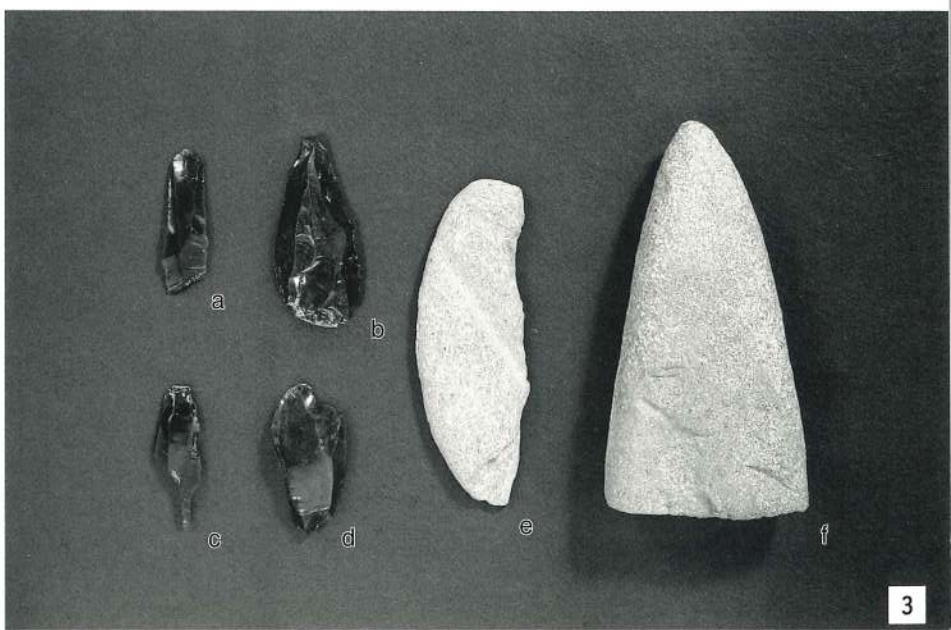

246・248

253・255

257

259





1　土弾・抉り入り片刃石斧・石槍

2　片刃石斧・石鏃・石鎌

3　SK-701A 出土石器（一括）

上峰町文化財調査報告書第８集

船 石 遺 跡 Ⅲ

平成２年３月20日印刷
平成２年３月31日発行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所383-１

印　刷　㈾佐賀印刷社
佐賀県佐賀市高木瀬町長瀬(大和工業団地内)